

大阪市埋蔵文化財発掘調査報告

— 2001・2002年度 —

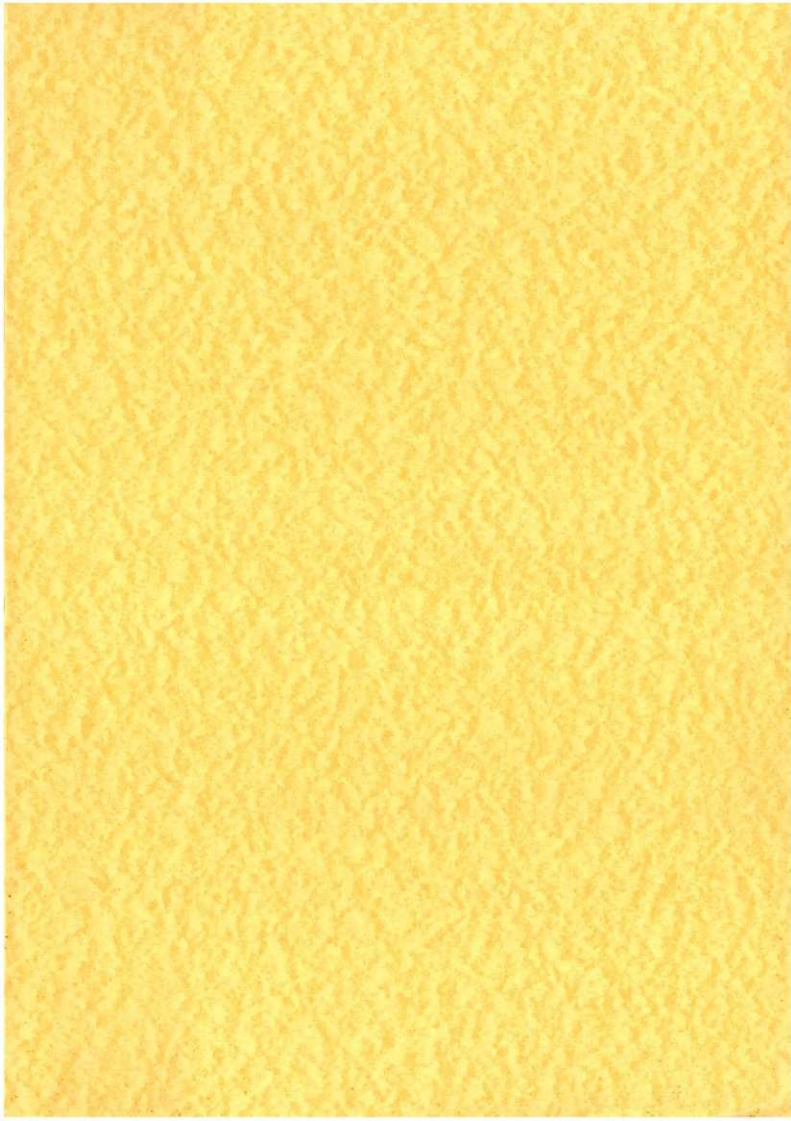
山之内遺跡・阿倍野筋南遺跡・伶人町遺跡・細工谷遺跡・船出遺跡

難波貝層遺跡・難波京朱雀大路跡・難波宮跡・大坂城跡

大坂城下町跡・中之島6丁目所在遺跡・森小路遺跡・三宝寺跡伝承地

2003.6

財団法人 大阪市文化財協会



大阪市埋蔵文化財発掘調査報告

—2001・2002年度—

山之内遺跡・阿倍野筋南遺跡・伶人町遺跡・細工谷遺跡・船出遺跡

難波貝層遺跡・難波京朱雀大路跡・難波宮跡・大坂城跡

大坂城下町跡・中之島6丁目所在遺跡・森小路遺跡・三宝寺跡伝承地

2003.6

財団法人 大阪市文化財協会



OS02-8次調査 豊臣期の連磨窯

大阪市埋蔵文化財発掘調査報告

— 2001・2002年度 —

山之内遺跡・阿倍野筋南遺跡・伶人町遺跡・細工谷遺跡・船出遺跡

難波貝層遺跡・難波京朱雀大路跡・難波宮跡・大坂城跡

大坂城下町跡・中之島6丁目所在遺跡・森小路遺跡・三宝寺跡伝承地

2003.6

財団法人 大阪市文化財協会

序 文

本書、『大阪市埋蔵文化財発掘調査報告－2001・2002年度－』は1996年度より刊行を開始した同シリーズの第5冊目となる。これは、各年度に行ったおもに民間の開発による調査成果を速やかに公表することを目的としたものである。

大阪市内にはいたるところに先人の足跡が残されており、発掘調査は毎日のように各地で行われている。日々蓄積される調査成果をできる限り速やかに公表し、共有の財産にしておくことは、調査に携わる我々の責務である。歴史の解明のためには個々の調査だけでは不足であるが、本書の積み重ねにより、市域全体の歴史の解明の一助になれば幸いである。

最後に、発掘調査の実施から本報告書の刊行にいたるまで、数々のご協力をいただいた関係各位の方々に、心より御礼申し上げる次第である。

2003年6月

財団法人 大阪市文化財協会
理事長 脇 田 修

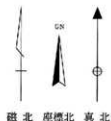
例 言

- 一、本書は財団法人大阪市文化財協会が2000・2001年度に実施した各遺跡の発掘調査のうち、大阪市教育委員会との委託契約によって実施した試掘立会調査の成果と、おもに民間事業者との委託契約によって実施した調査の成果をまとめた報告書である。後者については、各調査の契約終了時にすでに個別の報告書として提出したものを再録したものである。
- 一、調査に係わる費用は、第Ⅰ章表1に記した各調査の事業者の負担による。
- 一、発掘調査は、財団法人大阪市文化財協会調査課長京嶋寛の指揮のもと、小倉徹也・小田木富慈美・黒田慶一・佐藤隆・積山洋・高橋工・田中清美・平井和・平田洋司・藤田幸夫・松本啓子・村元健一・李陽浩の各学芸員が行った。また、試掘立会調査については小倉が行った。各調査の担当者・期間・面積などは第Ⅰ章表1にまとめている。
- 一、本書の編集は2002年度に、報告書作成係長松尾信裕の指揮のもと、平田が行った。執筆は各調査の担当者が行い、文責を末尾に記した。また、第Ⅰ章第1節および英文目次は平田、第Ⅰ章第2節は小倉が執筆した。
- 一、遺構・遺物の写真の撮影はおもに各調査の担当者が行い、一部を委託した。
- 一、発掘調査で得られた遺物、その他の資料はすべて当協会が保管している。
- 一、発掘調査から本書の作成に係わる作業には補助員諸氏の協力を得た。深く感謝の意を表したい。

凡 例

- 1、各調査次数に冠したローマ字は、その遺跡の略号を示す(例：「第Ⅱ章山之内遺跡の調査第1節YM01-13次調査」の「YM」は山之内遺跡の略号)。遺構名の表記は、溝・溝(SA)、各種建物(SB)、溝(SD)、井戸(SE)、土壌(SK)、柱穴・ピット(SP)、石垣(SW)、自然流路(NR)、その他の遺構(SX)の略号を冠した。ただし、形状を示す名称で表した方が具体的に理解しやすいばあいは、その名称を使用した例もある。遺構番号は、遺構の種類を示す略号に続いて各調査次数ごとの通し番号を付し(例：SD01)、埋土と層序との関係が明らかなばあいは、検出層準の地層番号を通し番号に冠した(例：第5層相当の溝=SD501)。
- 2、本書における遺物・採図の番号は、各報告ごとに付した。
- 3、本書で用いた方位には、磁北・座標北・真北の3種類がある。これらの区別は下記の指北記号によって示した。なお、座標北については2001年度の調査については旧来の日本測地系(国土平面直角座標第Ⅴ系)によるが、2002年度の調査については旧来の日本測地系(国土平面直角座標第Ⅴ系)と世界測地系(国土平面直角座標第Ⅵ系)に基づく両者がある。どちらを使用したかは文中で記している。水準値はT.P.値(東京湾平均海面値)で、本文・採図中では「TP±〇m」と表記した。
- 4、本書で用いた土器編年と器種名については、弥生土器は[佐原真1968、「近畿地方」：『弥生土器集成』本編2]に、古墳～飛鳥時代の須恵器は[田辺昭三1966、『陶器古墳址群』Ⅰ・同1981、『須恵器大成』]に、飛鳥・奈良時代の土器は[奈良国立文化財研究所1976、『平城宮発掘調査報告』Ⅶ・同1978、『飛鳥・藤原宮発掘調査報告』Ⅱ]に従い、煩雑を避けるために本文中では引用を割愛した。これら以外の文献に依拠したばあいはその都度明記した。
- 5、本書の地層断面図・柱状図で用いた岩相の基本パターンは[趙哲済1995、「長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅶ]のそれに準じて表現している。
- 6、註と引用・参考文献は各報告ごとに付した。
- 7、本報告書で使用する中・近世の時期区分については、大坂城跡・大坂城下町跡の調査成果をもとに下記の区分を採用している。これは一般的な時代区分とは異なるが、記録に残る火災や築城に伴う大規模開発に对照しうる地層を指標にして出土遺物を検討した結果得られたものであり、遺跡を解釈する上で設定した時期区分である。

大坂本願寺期	本願寺創建(明応5(1496)年)から焼亡(天正8(1580)年)まで
豊臣前期	大坂城三ノ丸築造開始(慶長3(1598)年)まで
豊臣後期	大坂夏ノ陣(慶長20(1615)年)まで
徳川期	大坂夏ノ陣以降



磁北 座標北 真北

本文目次

序文

例言

凡例

第Ⅰ章	2001・2002年度調査の概要	1
第1節	2001・2002年度の調査	1
第2節	試掘立会調査の結果	3
	1) FD02-1次調査	3
	2) NK02-1次調査	4
第Ⅱ章	山之内遺跡の調査	5
第1節	YM01-13次調査	5
第Ⅲ章	阿倍野筋南遺跡の調査	9
第1節	AS02-1次調査	9
第Ⅳ章	伶人町遺跡の調査	13
第1節	RJ02-5次調査	13
第Ⅴ章	細工谷遺跡の調査	17
第1節	SD01-3次調査	17
第Ⅵ章	難波京朱雀大路跡の調査	21
第1節	NS01-1次調査	21
第Ⅶ章	難波宮跡の調査	25
第1節	NW01-1次調査	25
第2節	NW01-3次調査	28
第3節	NW02-6次調査	33

第Ⅷ章 大坂城跡の調査	37
第1節 OS01－1次調査	37
第2節 OS02－8次調査	49
第3節 OS02－12次調査	75
第4節 OS02－29次調査	79
第Ⅸ章 大坂城下町跡の調査	83
第1節 OJ02－2次調査	83
第2節 OJ02－3次調査	90
第Ⅹ章 中之島6丁目所在遺跡の調査	99
第1節 NX02－1次調査	99
第Ⅺ章 森小路遺跡の調査	119
第1節 MS01－26次調査	119
第Ⅻ章 三宝寺跡伝承地の調査	127
第1節 SP01－1次調査	127
第2節 SP02－1次調査	131

あとがき・索引

英文目次

報告書抄録

図 版 目 次

- 1 YM01-13次調査
 - 上：東壁地層断面
 - 中：調査区全景
 - 下：SB301竈
- 2 AS02-1次調査
 - 上：調査区南壁地層断面
 - 中：第3層内遺構検出状況
 - 下：第3層内遺構完掘状況
- 3 RJ02-5次調査(一)
 - 上：SK02遺物出土状況
 - 中：SK30
 - 下：遺構掘削後全景
- 4 RJ02-5次調査(二)
 - 上：SK01・02検出状況
 - 中：SK02掘削状況
 - 下：SK01遺物出土状況
- 5 SD01-3次調査(一)
 - 上：機械掘削時の風景
 - 中：SD01検出状況
 - 下：SD01断面
- 6 SD01-3次調査(二)
 - 上：SD01-a
 - 中：SD01-d
 - 下：調査区全景
- 7 NS01-1次調査(一)
 - 上：北壁断面
 - 下：東壁断面
- 8 NS01-1次調査(二)
 - 上：第2遺構検出面
 - 下：第2遺構検出面東部
- 9 NS01-1次調査(三)
 - 上：第1遺構検出面
 - 下：SE101
- 10 NW01-1次調査
 - 上：調査区全景
 - 下：SP01
- 11 NW01-3次調査
 - 上：調査区全景
 - 下：調査区東部地層堆積状況
- 12 NW02-6次調査
 - 上：古代の柱穴
 - 中：近世の柱穴
 - 下：近世の遺構全景
- 13 OS01-1次調査(一)
 - 上：大坂ノ陣の焼土と石垣
 - 中：石垣全景
 - 下：石垣裏込め
- 14 OS01-1次調査(二)
 - 上：石垣西側に設置された石組
 - 中：石垣と現代の敷地境界
 - 下：調査地北面の道路
- 15 OS02-8次調査(一)
 - 上：調査地遠景
 - 中：第1層上面検出状況
 - 下：第3z層基底面検出状況
- 16 OS02-8次調査(二)
 - 上：1号竈検出状況
 - 中：2号竈検出状況
 - 下：3号竈検出状況
- 17 OS02-8次調査(三)
 - 上：4号竈検出状況
 - 中：5号竈検出状況
 - 下：瓦積み・暗渠遺構検出状況
- 18 OS02-8次調査(四)
 - 上：礎石と石組遺構の検出状況
 - 中：埋吏と石組遺構の検出状況
 - 下：調査終了状況
- 19 OS02-12次調査
 - 上：礎石と石組遺構の検出状況
 - 中：埋吏と石組遺構の検出状況
 - 下：調査終了状況
- 20 OS02-29次調査
 - 上：SD301検出状況
 - 中：SD301完掘状況
 - 下：SD301遺物出土状況
- 21 OJ02-2次調査
 - 上：徳川期遺構検出状況
 - 中：地山上面遺構検出状況
 - 下：地山上面遺構検出状況
- 22 OJ02-3次調査(一)
 - 上：地山上面遺構検出状況
 - 中：豊臣期遺構検出状況
 - 下：徳川期遺構検出状況

- 23 OJ02-3次調査(二)
上:SD201東半部
中:SD201西半部
下: SX101東半部
- 24 OJ02-3次調査(三)
上: SE301完掘状況
下: SK202動物骨出土状況
- 25 NX02-1次調査(一)
上: 調査地遠景
中: 南壁断面
下: SX10bi01検出状況
- 26 NX02-1次調査(二)
上: SW9aiii01検出状況
中: SX9ai01検出状況
下: 8bi層上面検出状況
- 27 NX02-1次調査(三)
上: SB8ai01の羽根部の検出状況
中: 8ai層上面検出状況
下: SX7i01-02、SA7i01検出状況
- 28 MS01-26次調査(一)
上: 調査区全景
中: 3区弥生土器出土状況
下: 2区東壁断面石廬丁出土状況
- 29 MS01-26次調査(二)
上: SK201遺物出土状況
中: SK201断面
下: SK201完掘後
- 30 MS01-26次調査(三)
上: SE101遺物出土状況
中: SE101井戸側検出状況
下: 8~10区土層堆積状況
- 31 MS01-26次調査(四)
上: 調査地全景
中: 地層断面
下: 第6層上面検出遺構
- 32 SP01-1次調査(一)
上: 調査地全景
中: 地層断面
下: 第4層内路込み検出状況
- 33 SP01-1次調査(二)
上: SD01全景
中: SX01検出状況
下: 第4層内路込み検出状況
- 34 SP02-1次調査
上: 調査地全景
中: 中世の溝SD601
下: 出土した縄文土器

第Ⅰ章 2001・2002年度調査の概要

第1節 2001・2002年度の調査

財団法人大阪市文化財協会が実施した発掘調査は、2001年度では受託件数で20件、調査面積で合計約10,000㎡、2002年度では受託件数で36件、調査面積で合計約11,000㎡であった。

このうち本書に収録した調査報告は、民間事業を主とする発掘調査と、大阪市教育委員会から委託を受けた試掘調査の結果である。対象となる遺跡は13箇所、発掘調査は2001年度が8件、2002年度が10件、うち試掘調査は2件である。各調査の調査箇所・期間などは表1に、報告した調査の位置は図1に示した。

おもな成果を概略すると、三宝寺跡伝承地では縄文時代中期末葉～後期前半の縄文土器が出土した

表1 本書所収2001・2002年度調査一覧表

序号	遺跡名	調査次数	調査の経緯	調査の種別	調査箇所	調査期間	調査地	調査担当者	頁数
1	新出遺跡	FD02-1	大阪市による建設工事	試験調査	難波中3丁目8-1,2	2003年2月27日	第4	小倉徹也	3
2	難波貝塚遺跡	NK02-1	大阪市による建設工事	*	難波中1丁目15-15地	2003年3月6日	第3	小倉徹也	4
3	山之内遺跡	YM01-13	大加土村による建設工事	発掘調査	住吉区山之内3丁目17 山之内3公園	2001年10月9日～15日	35	高橋工	5
4	阿倍野荻原遺跡	AS02-1	有限会社ワイズ・エーによる建設工事	*	阿倍野区阿倍野5丁目9-32	2002年5月9日～16日	33	村元健一	9
5	怡人町遺跡	RJ02-5	宗教法人一心寺による建設工事	*	天王寺区遠坂1丁目177,81	2002年4月21日～2月26日	105	藤田幸夫	13
6	堀工谷遺跡	SD01-3	近鉄不動産株式会社・新屋和不動産株式会社による建設工事	発掘調査	天王寺区平ヶ峰町87の一部、 15の一部	2002年1月21日～2月19日	170	山岸洋	17
7	豊成京奈奈大跡跡	NS01-1	大阪市住宅供給公社による建設工事	*	天王寺区北山町41-1	2001年4月2日～26日	125	佐藤隆	21
8	難波宮跡	NW01-1	中道不動産株式会社による建設工事	*	中央区上町1丁目122-25地	2001年4月20日～5月8日	100	平岡浩	25
9	*	NW01-3	山内興産株式会社による建設工事	*	中央区馬場町1丁目	2001年6月4日～7月2日	120	李海徳	28
10	*	NW02-6	アークバウ株式会社による建設工事	*	中央区安堂寺町1丁目45-1、 2、4、豊道寺町1丁目41-1	2002年7月29日～8月6日	50	山岸洋	33
11	大板城跡	OS01-1	株式会社日経プレス・エーによる建設工事	*	中央区石町2丁目17	2001年4月9日～27日	164	松本勝子	37
12	*	OS02-8	大阪市教育委員会による建設工事	*	中央区粉浜町1丁目31-31 南大江小学校	2002年4月23日～7月6日	530	小倉徹也 宮本友知 小田本直恵 田中康典	49
13	*	OS02-12	大板建設株式会社による建設工事	*	中央区東高殿町27-2、28-2	2002年6月17日～27日	39	平井和	75
14	*	OS02-29	日本リサーチ株式会社による建設工事	*	中央区上本町南2丁目6-1他	2003年3月3日～10日	25	平井和	79
15	大板城下町跡	OJ02-2	三井リース株式会社による建設工事	*	中央区本町2丁目121-1	2002年7月5日～8月1日	134	平井和	83
16	*	OJ02-3	近島瓦町建設工事	*	中央区瓦町1丁目19-1	2002年9月17日～11月16日	300	平井和	90
17	中之島6丁目 所伝遺跡	NX02-1	味の素株式会社による建設工事	*	北区中之島6丁目1-1他	2002年8月1日～10月3日	298	小倉徹也	99
18	森小島遺跡	MS01-26	大阪市交通局による建設工事	*	港区新島5丁目地先	2002年3月1日～4月19日	250	黒田隆一	119
19	三寶寺跡伝承地	SP01-1	大阪市交通局による建設工事	*	東淀川区馬場3丁目	2001年10月22日～11月1日	80	平田洋司	127
20	*	SP02-1	学校法人大阪経済大学による建設工事	*	東淀川区大田2丁目14、4-4、5-2、2-3の一部、旭光3丁目 83-2、84-2、148-2	2002年4月15日～5月24日	355	松本勝子	131

※は試掘調査の数

(SP02-1次調査)。伶人町遺跡では鎌倉～室町時代の井戸・土塋などが検出された(RJ02-5次調査)。大坂城跡では豊臣期の瓦窯および日本で初めての木製瓦范が検出された(OS02-8次調査)。中之島6丁目所在遺跡では蔵屋敷に係わる舟入の石垣などを検出した(NX02-1次調査)。

(平田洋司)

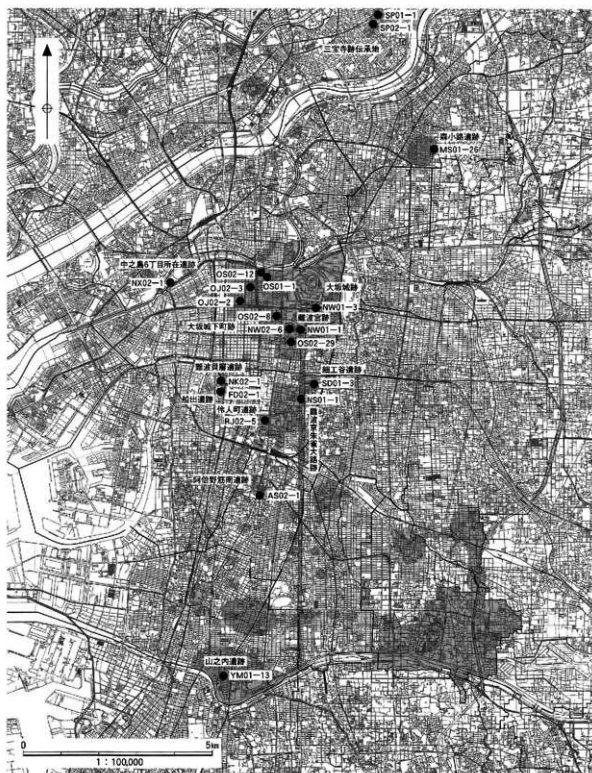


図1 各調査地点の位置(網は埋蔵文化財包蔵地、大阪市教育委員会「大阪市文化財地図」平成13年4月版より)

第2節 試掘立会調査の概要

1) FD02-1次調査

2003年2月27日に行った船出遺跡の試掘調査である(図1)。敷地内の4箇所でGL-3mまでの地層の観察を行った(図2・3)。0層は現代の盛土層である。1層は褐灰色ないし黄灰色の細～中礫混り中～極粗粒砂からなる作土層および、黒灰色ないし灰白色の細～中礫混り粗～極粗粒砂からなる盛土層である。試掘坑1～3で、肥前磁器や京・信楽系陶器などが出土した。2層は褐灰色のシルト～細粒砂・細礫混り極粗～中粒砂からなる作土層である。試掘坑2で、瓦器片と須恵器片が出土した。3層は淘汰の良い、水平葉理の発達する海浜成層である。今回の調査では、作土層によって攪乱を受けており、生活面を確認することはできなかった。(小倉徹也)

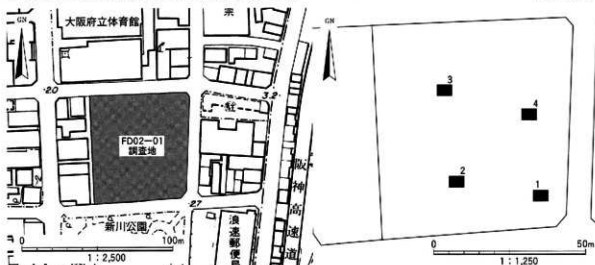


図1 調査地位置図

図2 試掘坑の配置

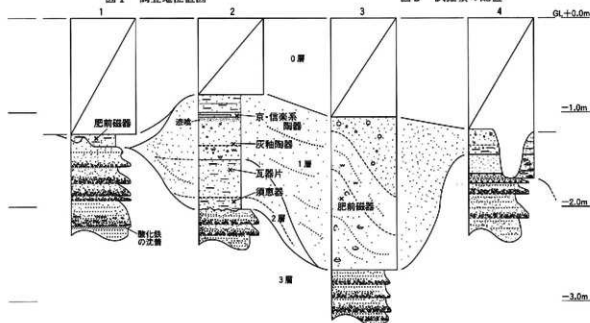


図3 各試掘坑の地質柱状図

2) NK02-1次調査

2003年3月6日に行った難波貝層遺跡の試掘調査である(図1)。敷地内の3個所でGL-3mまでの地層の観察を行った(図2・3)。0層は近・現代の盛土層である。1層は主として灰褐色ないし暗灰色のシルト・細粒砂・細礫混り粗～中粒砂からなる作土層および、シルトの偽層を含む暗灰色の中～粗粒砂からなる盛土層である。試掘壕3でGL-1.95mの作土層から、古代から中世と考えられる土師器片が出土した。2層は淘汰の良い、水平葉理の発達する海浜成層である。試掘壕1ではGL-1.95～2.60mで東側へ傾く斜交葉理がみられた。今回の調査では、作土層によって攪乱を受けており、生活面を確認することはできなかった。(小倉徹也)

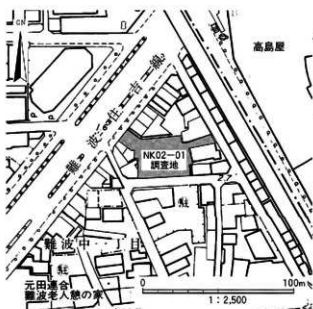


図1 調査地位図

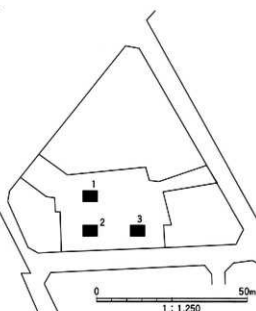


図2 試掘壕の配置

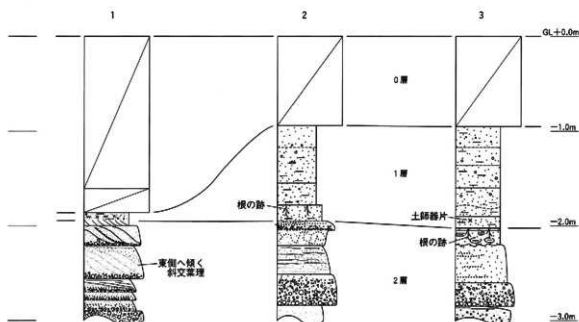


図3 各試掘壕の地質柱状図

第Ⅱ章 山之内遺跡の調査

第1節 YM01-13次調査(図版1)

1)調査にいたる経緯と経過(図1)

山之内遺跡は大阪市の中央部を南北に延びる上町台地の基部に位置している。旧石器時代から近世にいたる複合遺跡であるが、特に遺跡南西部では弥生時代と古墳時代中期～奈良時代の建物跡などが多数発見されており、同時代の居住地が展開していたものと考えられる。この地域内において大加土木による建設工事が計画されたため、財団法人大阪市文化財協会は大阪市教育委員会の委託を受け、当該地点の埋蔵文化財の有無を確認するべく2002年9月18日に試掘調査を行った。この結果、地表下浅くに飛鳥時代の遺物包含層が遺存していることが判明し、建設工事による破壊を免れ得ないことから発掘調査を行うこととなった。

掘削は現代の盛土を重機によって除去したほかはすべて人力によった。調査および報告書に用いた方位は磁北を示している。

2)調査の結果

i)層序(図2)

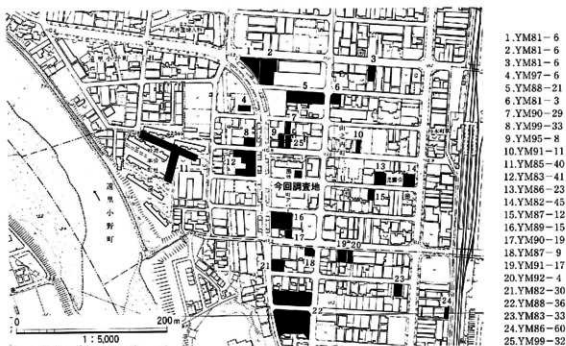


図1 調査地位置図

調査地の標高はTP+11.4mで、層厚約30cmの現代の整地層を除去すると、地表下約30～50cmで地山となり、その間に3層の地層が存在した(図2)。

第1層：暗灰黄色細粒砂からなる現代耕土である。層厚は最大で20cmである。

第2層：褐色細粒砂からなり、下位の地山に由来する礫礫が混る。層厚は最大で10cmほどである。ガラス片などを含むことから、現代のものであり、第1層の床土である可能性が高い。

第3層：暗褐色細粒砂混り粘土質シルトからなる。堅穴住居SB301の埋土である。土師器・須恵器を含む。

ii) 遺構と遺物

a. 古墳時代の遺構(図2・3)

SB301 調査区の南東で発見された堅穴住居で、平面形は方形とみられる。調査区内で検出されたのは住居の中心から北西側の一辺までの部分で、全体のほぼ4分の1に当たるとされる(図2)。堅穴部分の深さは0.15mで、埋土は第3層である。埋土断面を検討しても貼床に相当する地層はみられな

かった。埋土を除去すると、2個の柱穴と、北西辺の中央部で竈が検出された。竈本体は暗褐色シルト質粘土で構築され、馬蹄形に潰れた状態で検出された。

これを除去すると地山上で幅1.2m、奥行き1.0m、深さ0.1mほどの凹みが現れた。この凹みの中に竈が構築されたものと考えられる。底面は熱によって赤く変色していた。崩落した竈本体の土に混って須恵器杯蓋1・杯身2や土師器高杯の脚部などが出土した(図3)。須恵器は難波Ⅱ新段階[佐藤隆2000]に属する。竈背面から住居北西方向の外壁に向って、幅約0.3m、深さ約0.1mの溝が約0.6m延びており、竈からの煙出しの溝と考えられた。熱による底面の赤変は煙出し部分に

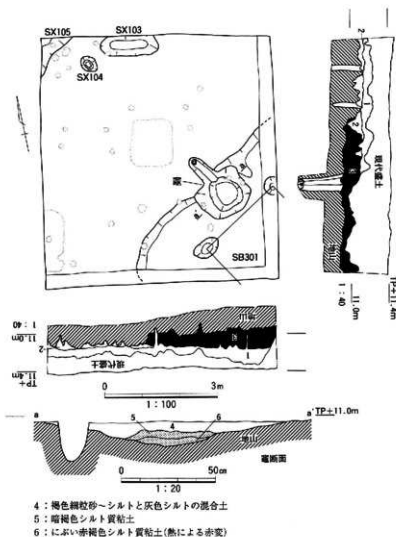


図2 遺構平面図・地層断面模式図

は及んでいなかった。北東側柱穴の平面形は楕円形で、長径は約0.4m、深さは約0.5mであった。柱痕跡は直径0.1mで、柱穴底部には6～7個の円礫が調密に置かれていた。円礫群は柱の沈下を防ぐためのものと考えられる。柱穴間の間隔は2.4mである。柱間の中央から堅穴部北西の隅付近までの距離は3.2mで、これを参考にする、堅穴部の一辺が6.4mで、内部に4本の柱が立つ堅穴住居が復元される。この堅穴住居の年代は須恵器1・2の形態から6世紀後葉～7世紀初頭と考えられる。

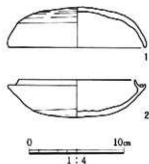


図3 SB301出土遺物

b. 近世以降の遺構(図2)

SX103～105 調査区北西隅付近の、第1・2層基底面で検出された土壇状の遺構で、いずれも深さ0.2mほどである。埋土には陶磁器が含まれ、遺構の年代は近世以降に下る。

3) まとめ

今回の調査は小規模であったにもかかわらず、6世紀後葉～7世紀初頭の堅穴住居を検出することができた。山之内遺跡南西部のJR阪和線以西の地域では、古墳時代から飛鳥・奈良時代の建物跡が多数検出されている。本調査地の北側ではYM95-8・99-32次調査で、西側でもYM83-41・93-33次で飛鳥・奈良時代の建物跡が発見されている。しかし、今までに見られている堅穴住居はすべて古墳時代のもので、飛鳥時代以降の例はなかった。今回検出した堅穴住居は7世紀初頭に下る可能性もあり、山之内遺跡の堅穴式住居では最も新しい一群に属することは間違いない。古代の住居は堅穴住居から掘立柱建物へという変化で捉えがちであるが、掘立柱建物が主流を占める時代にあっても少数ながら堅穴住居が併用されたことは今回の調査からも明らかで、用途による使い分けを考える必要があらう。

(高橋工)

参考文献

佐藤隆2000、「古代難波地域の土器様相とその史的背景」：大阪市文化財協会編『難波宮址の研究』第十一、pp.253-265

第Ⅲ章 阿倍野筋南遺跡の調査

第1節 AS02-1次調査(図版2)

1) 調査にいたる経緯と経過(図1・2)

大阪市阿倍野区に所在する阿倍野筋南遺跡は、古墳時代前期の集落遺跡として知られる。過去に行われた調査では、竪穴住居や大型の総柱建物などが確認されている[大阪市文化財協会1999]。また、近年では、かつて調査が集中した阿倍野筋の西側だけでなく、東側でも同時期の遺構が検出され、集落の拡がりについて新たな知見が得られている。

今回、発掘調査が行われた地点は遺跡指定範囲の南端に位置する(図1)。調査に先立って行われた試掘調査では、現代盛土以下に包含層が良好に遺存していることが明らかとなり、古代にさかのぼる可能性がある地層と、地山上で小型ピットが確認された。建物の基礎工事が地山に達することから、協議の結果、調査を行うことになった(図2)。



図1 調査地周辺図

調査は2002年5月9日より開始した。遺物包含層の可能性のある第3層の直上までを重機を用いて掘削し、以下は人力で掘削して、遺構の検出および遺物の採集に努めた。その結果、試掘で確認された時期不明の暗色帯の層内から数基のピットを検出した。調査は5月15日に終了し、同日中にフェンス、器材の撤去を含むすべての作業を終えた。

なお、本報告で用いる方位は磁北を指している。

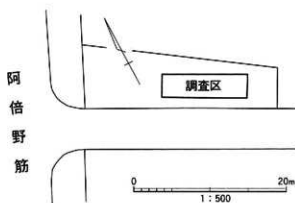


図2 トレンチ配置図

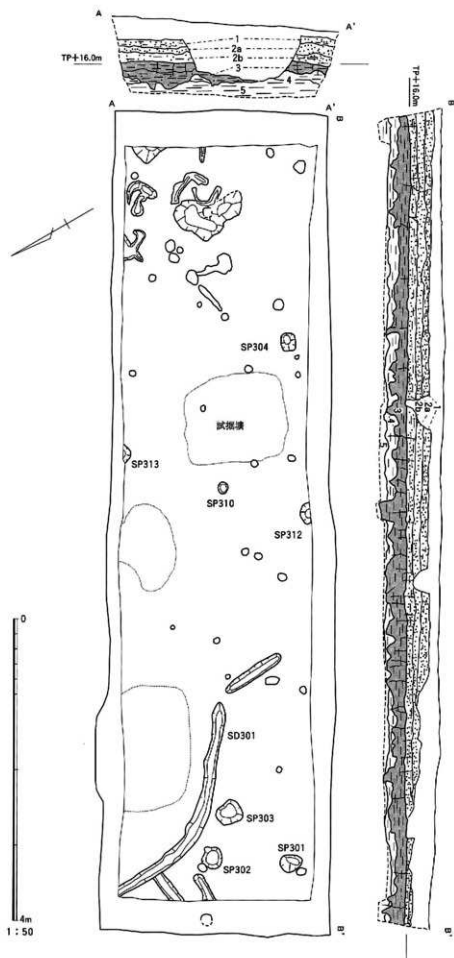


図3 調査区東・南壁断面図および第3層内検出遺構平面図

2) 調査の結果

i) 層序(図3)

第1層：現代整地層の直下で確認された現代作土層である。調査区の西側では削平されて遺存しなかった。

第2a層：シルト混りオリブ褐色中粒砂からなる作土層であり、層厚は10cmあった。第1層と同様に、西側では削平されていた。遺物は出土しなかったが、層相から近世のものと判断される。

第2b層：褐色シルト質中粒砂からなる作土層であり、層厚は10cmであった。上面には乾痕が確認できた。本層から出土する遺物には陶磁器が含まれず、瓦器が含まれることから、中世の作土層と判断される。

第3層：調査区の全域にみられる粗粒砂混り暗褐色シルト層で、やや暗色化した古土壤である。層厚は最大で20cmあり、下面は植物擾乱などにより大きく乱れていた。遺物は土師器の細片が数点出土したのみであるが、遺物に須恵器が含まれないこと、付近の調査結果から推測すると、古墳時代前期の地層である可能性がある。本層内でビットと杭痕を検出した。

第4層：調査区の全面に分布する粗粒砂混り褐色シルト層で、層厚は10cmあった。上層の第3層からの擾乱により大きく乱されている。遺物はまったく出土せず、地層の年代を特定するにはいたらなかった。

第5層：粗粒砂混り明褐色粘土層で、本調査区の地山である。

ii) 遺構(図3)

遺構の検出はすべて第5層上面で行ったが、検出した遺構は、第3層内の遺構である。

ビットは大きさからは2種に大別することができる。一つは直径10cmほどの小型のもので、調査区の全域に分布する。断面を観察したところ、地表から斜めに鋭く打込まれており、杭の痕跡と判断した。

もう一つは直径30cmほどの円形のもので、調査区の西半分で見出された。柱の痕跡を確認できたものはなかったが、いずれも5cm大の偽礫で埋戻されている。SP310・312・313は南北に組合う可能性があるが東西には展開せず、組合ったとしても建物ではなく、欄になると思われる。

以上のビットは、いずれも第3層を埋土とするものであるが、遺構の切合いから、まず後者のやや大きなビットが掘られ、その後杭が打込まれていたことが判明した。

また、調査区の東部では、同じく第3層を埋土とする不定形な落込みを検出したが、下層に複雑に潜り込む状態から、人為的なものではなく、植物による擾乱と判断した。

調査区の西側では幅20cmの細い溝を検出した。溝は人為的に埋められたものではなく、自然に埋没したものと思われるが、用途などは不明である。

3) まとめ

今回の調査では、中世の地層である第2b層以降、この地が耕作地として使用されていた状況が明らかになった。それ以前の状況については、第3層の年代によって評価が異なるものと思われる。

本調査地とは阿倍野筋を挟んで西向いに位置するAS96-7次調査地でも、今回の調査結果ときわめて似た地層の堆積状況が確認されているが、本調査地の第3層に相当する地層は、作土層と報告されており、やや土地の利用状況が異なるものと思われる[大阪市文化財協会1997]。本調査地では第3層に伴う遺構はピットや植物の擾乱による不定形な落込みのみである。この結果から想定すると、第3層の時期は、未だ本格的な開発は行われていないが、人が土地に働きかけた最初の時期に当ると思われる。仮にこの第3層が古墳時代前期に相当するとしても、遺物の出土量がきわめて少ないことを考えれば、遺構の存続時間は短いものであり、北方300mに中心がある集落の縁辺部に当ると思われる。

中世以降は、耕作地として利用されたようであり、地層に含まれる遺物量も多くなる。以後、耕作地として現代に及び、その後、住宅地となっていたことが判明した。このような土地利用の状況は、周囲の調査結果と一致するものである。

今回の調査では、第3層に伴う遺構の調査が焦点となったが、その時期を特定することはできなかった。しかし、本調査地の知見によれば、周辺でも本層は後世の削平を受けることなく良好に遺存しているものと思われ、今後、周囲での調査でも重要な調査対象になるものと思われる。遺跡南方の調査事例は少ないが遺構の分布が周辺に及んでいたことが改めて確認されたことは今回の調査の最大の成果であろう。

(村元健一)

参考文献

- 大阪市文化財協会1997、『近畿財務局による阿倍野第二住宅新築工事に伴う阿倍野筋遺跡発掘調査(AS96-7)略報』
大阪市文化財協会1999、『阿倍野筋遺跡発掘調査報告』

第Ⅳ章 伶人町遺跡の調査

第1節 RJ02-5次調査(図版3・4)

1)調査にいたる経緯と経過(図1・2)

調査地は四天王寺の西方で一心寺の北方に当る(図1)。2002年12月に試掘調査を実施したところ、中世にさかのぼるとされる遺構が検出された。このため2003年1月21日より、本調査を実施した。調査は江戸時代後期以降の盛土層を重機で掘削し、それ以下を人力で掘削した。後述するように、基本的には江戸時代後期以降の盛土層以下は地山であるため、機械掘削後は地山面上面での精査となった。

2)調査の結果

i)層序(図3)

- 第0層 第2次世界大戦時の焼瓦を多く含む層、およびそれ以降の盛土層である。
第1層 黒色シルト層で、江戸時代後期以降の盛土層である。
第2層 灰色粘土層で調査地の東側の一部で認められる。後述のSK01・02の埋土である。
第3層 橙色細粒砂層で地山である。

ii)遺構と遺物(図4・図5)

検出した遺構は2時期に分けられる。一つは江戸時代後期で、井戸・土壇などがある。すべてが同時に存在したのではなく、江戸時代後期全般にわたって構築されたものであろう。

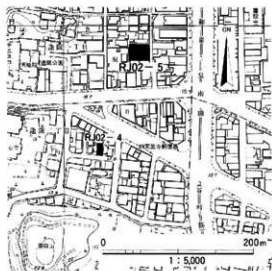


図1 調査地位置図

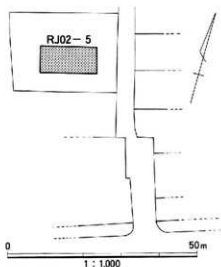


図2 調査区配置図

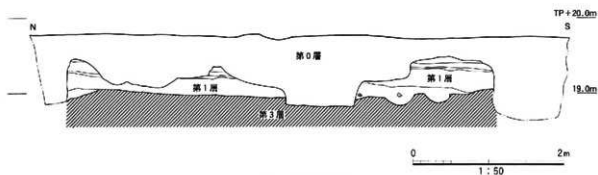


図3 東壁断面図

もう一つは14世紀を中心とする中世の遺構群である。これらの遺構には、4基の井戸と3基の土蔵がある。

SE01は調査区西部で検出した直径約1.2mの円形の井戸である。埋土は後述のSE11・08と同様に地山偽礫を含む黒色シルト層であるが、他の井戸に比べて地山偽礫が多くみられた。

SE08は直径約0.8mの円形の井戸である。埋土はSE11と同様に地山偽礫を含む黒色シルト層である。口径約9.6cmの土師器皿8が出土した。この皿は、外面をユビオサエで成形している。

SE11は直径約0.7mの円形の井戸で、SK02を切って構築されている。埋土は橙色細粒砂の地山偽礫を含む黒色シルト層である。埋土中の地山偽礫は、下部にいくにしたがい増加している。埋土中から丸・平瓦や土師器皿・羽釜(図5-13)などが出土した。土師器羽釜13は口径が16.4cm、残存器高は11.8cmで、体部外面はケズリ、内面はナデ調整している。また、体部外面全体に煤が付着

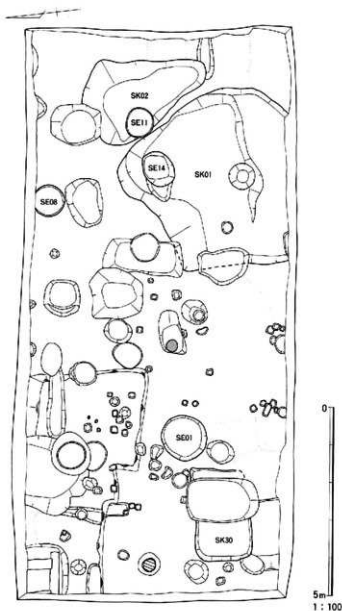


図4 遺構平面図

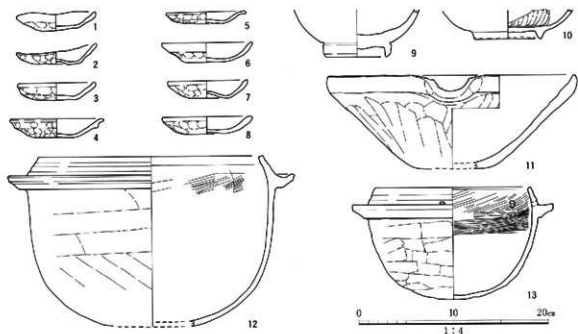


図5 出土遺物 (1～7、9～12:SK01、8:SE08、13:SE11)

している。また、口縁部の下部に小孔が、外面から内面に向かって斜め下方に3箇所認められる。

SE14は上部は円形であったが、下部は約0.6m四方の方形である。この井戸はSK01の底部で検出したもので、埋土はSK01と同じく灰色粘土であった。検出面から約2mまで掘削したのみであるので、深さと最下部の構造は不明である。SE11・08・01は、ともに底部まで確認していないので、井戸側・井戸側等の構造については不明である。それぞれ埋土中の出土遺物には平瓦・丸瓦が多いが、図で示したように土師器皿なども出土している。

SK30は調査地西端部で検出した東西約1.5m、南北約2.3mの方形の土壌である。深さは約0.2mである。平面は整った隅丸方形で、壁面は急な傾斜をもち底面は水平である。内部は地山礫礫である橙色細粒砂を含む黄褐色シルトで埋戻されており、土師器皿・瓦器碗・瓦の細片が出土した。

黄褐色シルトは橙色細粒砂の上部に堆積する地山層と考えられることから、この遺構の掘込み面は現状より上部にあったと想定される。したがって、土壌の上部は削平されており、本来は現状より深いものである。SK30の性格については、整った平面形や垂直に近い壁面、水平な底面という特徴から特別な用途の遺構とも考えられるが、明らかにできなかった。

SK01は調査地東側で検出した。上部では隣接するSK02と一体であったが、下部では分離した。埋土の上部は灰色シルト～粘土層で、下部は灰色粘土層となり、最下部は非常に粘性が強い。この土壌の下からSE14を検出した。埋土上部から石製五輪塔の水輪部が出土した(図版3上)。その大きさは直径約29cm、高さ約23cmである。

中層や下層からは土師器皿・羽釜、瓦質土器羽釜、輸入青磁・白磁、瓦などが出土した。特に多く出土したのは土師器皿で、完形で数個まとまって出土する状況が認められた。このような出土状態は、土壌の下部まで数回にわたってみられた。下面検出の井戸SE14では、このような遺物の出土状況はみられなかった。

図5の1～7は土師器皿で口径8.2cm～9.9cmで、外面はエビオサエで成形している。土師器羽釜12は、口径23.8cm、残存器高18.0cm、体部外面はケズリ、内面はハケおよびナデ調整している。また、体部外面の全体に煤が付着している。11は瓦質土器の片口鉢で口径26.0cm、器高9.9cmを測る。

SK02はSK01の東北部に接するかたちで検出した。埋土はSK01と同じく上部が灰色粘土～シルト層で、下部は灰色粘土層である。下部になるにしたがい粘性が強くなること、土師器皿が多く出土することもSK01と同様である。土師器皿は完形のものが多く、数面にわたって複数かたまって出土するという状況もまったく同様である。土師器皿以外の遺物としては、瓦器碗・瓦・瓦質土器羽釜などがある。

3) まとめ

SK01・02の埋土である灰色粘土は、人為的に埋戻したものでなく、自然に堆積したものと思われる。このことから、SK01・02は池状の施設で、徐々に泥が堆積して埋没したのではないかと推定される。先にSK30で述べたとおり、この池状の施設は上面を削平されており、築造当初は検出時より深かったと想定される。

今回の調査では、中世の井戸・土壌を検出したことが注目される。前にも述べたように、土壌SK01・02は池と想定されるが、この遺構を理解する上で、調査地周辺に四天王寺・一心寺が立地することが重要な意義をもつと考えられる。なぜなら、出土した土師器皿は、池が埋没していく過程で投棄または納められたと考えられるからである。

すなわち、この池は宗教儀礼を執り行う場所であり、土師器皿はその儀礼に使用されたと推定される。その当否については、今後の調査に期待するところ大である。

いずれにしても、今後、本調査地周辺での調査が注目されるところである。

(藤田幸夫)

第V章 細工谷遺跡の調査

第1節 SD01-3次調査(図版5・6)

1) 調査にいたる経緯と経過(図1・2)

当該地は、南北に延びる上町台地から東に張出した舌状尾根に位置する広大な敷地である。1997年、この尾根の南西の小谷にて古墳時代から平安時代にいたる遺構・遺物が多数発見され、特に飛鳥・奈良時代には和同開珎の枝銭や「百済尼寺」と復元される墨書土器が見つかり、注目を集めた[大阪市文化財協会1999]。

今回、当該地では大規模な開発が予定されたため、2001年10月11日、5箇所にて試掘を行い、同年11月1日には遺構の存在が予想された北東部にて、東西約20mのトレンチによる再試掘が実施された。その結果、遺構の存在が確認され、本調査を実施することとなった。調査開始後まもなく、試掘で確認された遺構が南北方向の溝であることが明らかとなり、道路側溝跡である可能性も想定されたため、関係者間の協議を経て、西側に調査範囲を拡張した。拡張部分の調査費用は当年度の市内埋蔵文化財緊急発掘調査経費を充てた。

なお、本調査の対象にならなかった敷地南半部については、2002年2月12日、あらためて6箇所にて試掘を実施し、遺構や遺物包含層はすでに失われていることが確認されている。

2) 調査の結果



図1 調査地位置図(1:10000)

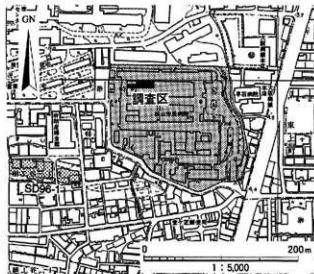


図2 調査区配置図

i) 層序

今回調査地では、古代・中世などの遺物包含層はほとんど残っておらず、重機で近現代の地層を除くすると、ただちに地山である上町層に達した。上町層は黄褐色系の砂礫・シルトであり、旧地表面はすでに一定の削平を受けたとみられる。

ii) 遺構と遺物(図3・4)

見つかった遺構は、調査地西部の南北溝SD01である。幅1.2~1.5m、深さ0.5m程度で、方向は北でやや東に傾いていた。溝底のレベルから水流は北向きであったことがわかる。この溝は少なくとも5時期に分層できたので、層位ごとに掘り分けて調査を進めた(図3)。SD01-d・eは溝内下層のe・d両層が堆積した時期であり、もとの溝の姿にもっとも近いものである。その後、c層からa層へと堆積が進み、次第に埋っていくようすがうかがえた。c層~a層は層相が非常に類似しており、さほど時間差はないとみられる。古代の須恵器1・土師器・格子タタキで整形した平瓦2・瓦器碗などの細片が各層から出土したほか、d層から中国製白磁3、c層から瓦質土器羽釜4などが出土している。白磁3は口縁の玉縁が小さく、11世紀前後のものとみられる。口縁が内傾して立上がる羽釜4は14世紀

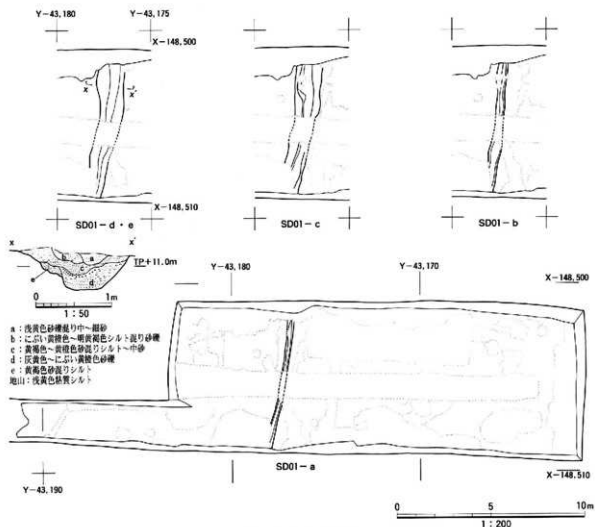


図3 遺構平・断面図

前後とみられる。

なお、SD01の西側で、並行する南北溝跡が見つかる可能性が考えられたが、精査の結果、そのような遺構は見つからなかった。

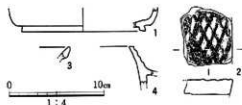


図4 出土遺物

3) まとめ

先述したように、細工谷遺跡は百済王氏に係わる飛鳥・奈良時代の遺跡[大阪市文化財協会1999]として知られており、今回の調査でも古代の遺物が少なからず出土した。よって細工谷を望む高台であるこの一帯にも、もとは柱穴などの遺構が存在したが、後世の削平で失われてしまったという可能性が想定される。そして平安時代後期頃から中世にかけて、南北溝がこの地に掘られ、次第に埋っていくようすが知れた。上町台地一帯の中世の遺跡としては四天王寺が著名であるが、ほかにも点々と瓦などの出土が知られている。細工谷遺跡が中世に及ぶ複合遺跡であることが明らかとなったことは、中世の上町台地の歴史を探る上で、新たな資料が得られたわけであり、その点が本調査の最大の成果であったといえる。

(積山洋)

引用・参考文献

大阪市文化財協会1999、『細工谷遺跡発掘調査報告』I

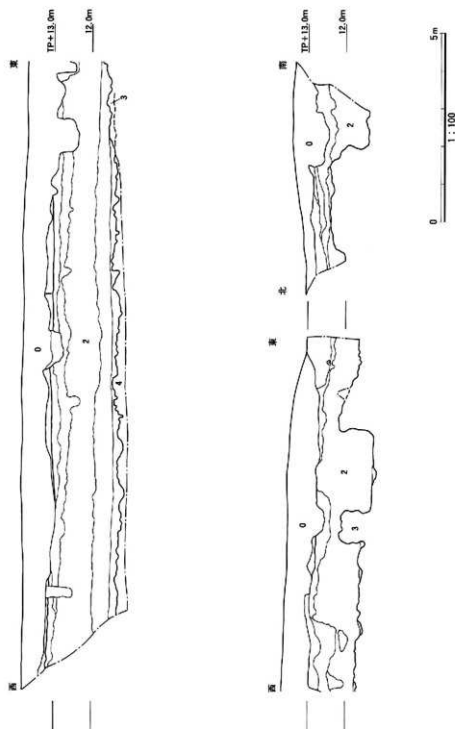


図2 調査区北壁・東壁断面図(番号は本文の第○層)

顕著なことから、現状では地層として存在しないが上位に水の溜まった状態が一定期間あったことが想定できる。出土遺物はきわめて少なく、土器の細片・加工木片・種が出土した。土器片は磨滅しており、古代以前のものとは思われるが、詳細な年代は不明である。

第3層：緑灰～明黄褐色の極細粒砂混り粗粒砂～粗粒砂混り細粒砂からなる地山層である。調査区東半部に存在し、第2遺構検出面を形成する。

第4層：灰～暗オリーブ灰色の貝化石を含む海成粘土層である。建設工事のためのボーリングデータによれば10m前後の層厚がある。Ma12の可能性がある。西半部では第3層が失われていたため、第2層の直下にある。東半部の第3層とともに第2遺構検出面を形成する。上面には生痕がみられる。

ii) 検出遺構(図3・4)

第2遺構検出面 東端部のみにおいて地山が高く残っており、それ以外の部分は約0.9mほど落込んでいた。落込みの埋土は第2層であり、西半部では第3層が失われて第4層が露出していた。この落込みがどのようにして形成されたかは不明であるが、人為的なものではなかろう。第3層の表面は風化して凹凸が顕著であり、一定期間この落込みの面が露出していたことを示している。落込みの埋没状況については、第2・3層の所見から以下のような解釈が可能である。

まず、第2層は粘土の偽礫を含みラミナがみえないものの、均質であり擾乱を受けた痕跡がないことから、人為的な客土ではないと考えられる。第3層は西半部では失われていたが、よく観察すると第2層の基部付近に偽礫があり、洪水などの急激な力によって削りとられた可能性が高い。その際に、より上流から運ばれて来た土砂の堆積が第2層と考えられる。

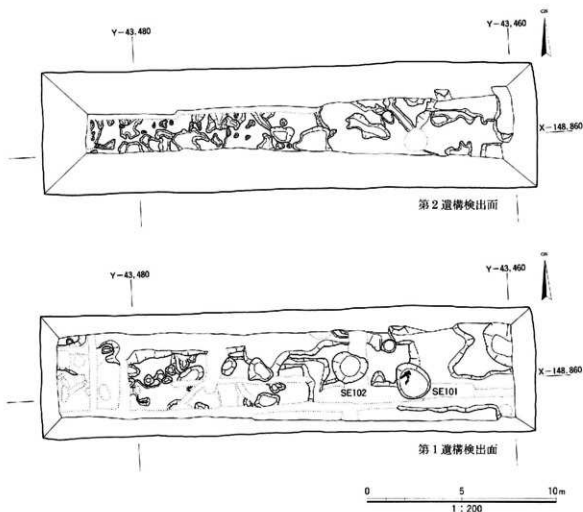


図3 遺構平面図

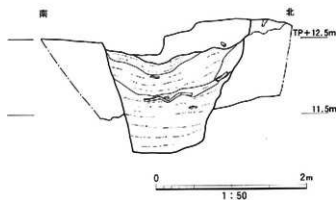


図4 SE101断面図

第1遺構検出面 井戸2基と土壌1基のほかに、全域において不整形の凹みが見られた。

井戸はSE101・102である。SE101は検出面で直径2.0mで、深さは1.8mである。埋土は最上部が客土で、以下は水成層である。井戸瓦が多く出土したため、井戸側として用いられていたと考えられる。遺物は井戸瓦のほかに陶磁器や丸平

瓦の細片などが出土した。詳細な年代は不明であるが、井戸瓦の凸面に刺突がなく、江戸時代末期には下らないものと考えられる。SE102は土師器細片がみられたのみで年代や井戸側の状況についての手がかりはほとんどなかった。

3) まとめ

今回の調査では、残念ながら期待された難波京朱雀大路の痕跡は検出できなかった。上述した第2遺構検出面の落込みについては、埋没の年代や状況については検討すべき課題を残している。第4層はMa12の可能性がある海成粘土であり、上町台地の形成を知る上での重要な資料となるであろう。サンプルとして持ち帰った土壌については貝類の同定も含めて目下分析中であり、その結果については機会をあらためて公表する予定である。

(佐藤隆)

第Ⅶ章 難波宮跡の調査

第1節 NW01-1次調査(図版10)

1) 調査にいたる経緯と経過(図1)

本調査地は難波宮跡公園の南方約200m、前期難波宮「朱雀門」の南西約150mに位置する(図1)。現在想定されている難波宮の中軸線は、本調査地の東約100mを通っている。

本調査地から道路を挟んだ南側のNW170次調査では、前期難波宮の時期と思われる南北棟の建物跡が見つかっており、その他にも周辺では難波宮期の建物跡が見つかっている。

調査は2001年4月20日から開始した。調査に先立って表土および近・現代層を重機により掘削し、地山上面で遺構検出を行った。5月8日にすべての作業を終了した。なお、本調査で使用した座標は日本測地系による国土平面直角座標第Ⅵ系に基づいている。

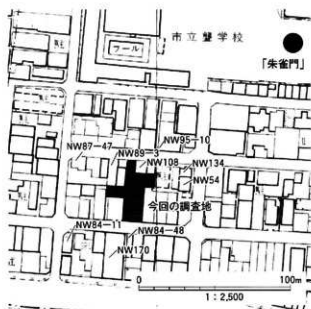


図1 調査地位置図

2) 調査の結果

i) 層序

近・現代層が地山上面まで達しており、かつ地山上面はその層による攪乱を著しく受けていたため、遺構の残存状況はよくなかった。また、近・現代以前の層は遺構内に遺存するのみであった。なお、現在の地表面は全体的に西に向って落ちてゆくが、地山上面で残りのよい部分の標高からすれば、現在の地表面ほどには傾斜がきつなく、より平らなものであったらしいことが見て取れた。

ii) 遺構と遺物(図2・3)

近世の溝2条SD01・02とビット2基SP01・02、井戸1基SE01、土壌1基SK01を検出した。

SD01は調査地中央付近を東西に横断するが、溝上部が攪乱によって破壊されていたため、遺構の残りはよくない。幅約1.1m、深さは残りの良い部分で約0.3mあり、埋土は黄褐色シルト混り中粒砂～粗粒砂を主体とする。埋土から瀬戸美濃焼の灰軸皿5、土師器皿6が出土した。

SD02は調査地南端部に位置する断面V字形の溝である。上端の幅約0.5m、下端の幅約0.1mであ

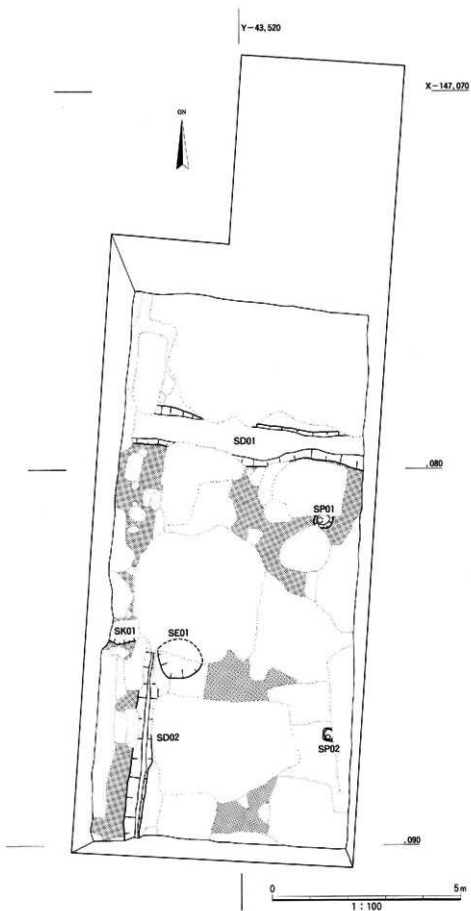


図2 地山上面検出遺構平面図(網掛け部分は地山が高いところ)

り、埋土は褐色粗粒砂混りシルトを主体とする。SD01と同時に存在していた可能性があるが、SD01とはつながっていない。

SP01はSD01の南側で見つかった柱穴で、掘形が一辺約0.5m、深さが約0.3m、柱痕跡は直径約0.18mである。埋土にはぶい褐色の地山偽礫を多く含む中粒砂～極粗粒砂混りのシルトである。

SP02はSP01のさらに南側で見つかった柱穴で、上部がかなり削平されている。掘形は一辺約0.35m、深さが約0.1m、柱痕跡は直径約0.12mである。埋土にはぶい黄褐色の地山偽礫を含む中粒砂～粗粒砂混りのシルトである。SP01・02が建物を構成するかどうかは不明である。

SE01はSD02の脇に位置する直径が約1.1mの素掘りの井戸である。埋土は明黄褐色の小礫を含むシルト混り細粒砂である。埋土から唐津焼皿1・折縁皿2・薬灰釉の鉢3、瀬戸美濃焼灰釉皿4が出土した。

SK01はSD02の西側で見つかった土壌であるが、主体部がほとんど攪乱されており、見つかったのは肩の一部である。瀬戸美濃焼の灰釉皿5が出土した。これはSD01出土の遺物と接合したため、同時期である可能性が高い。

遺物の年代観からすれば、以上に記した遺構群はすべて同じ時期、すなわち豊臣後期から江戸初期にかけてのものである可能性が考えられる。

3) まとめ

今回の調査は、後世の攪乱による地山の削平により、遺構の検出が困難な状況であった。そのような中で近世の溝と柱穴・井戸・土壌が検出された。溝の方位は正東西・南北方位からわずかに振れる現在の地割の方位に沿っている。また井戸・土壌が存在し、建物跡がはっきりと見つかっていないことから、この場所が建物間の空閑地、もしくは裏手に当る場所であったことが推測される。近世の遺構が見つかった反面、難波宮の時期の遺構は見つからなかったが、周辺の調査地での成果と照らし合わせてみると、本調査地が建物間の空閑地であった可能性を考えることができる。ただ、攪乱によって当該時期の遺構がすでに失われている可能性も高いため、今後の調査成果との対比から、さらにこの地域の性格を考えていきたい。

(李陽浩)

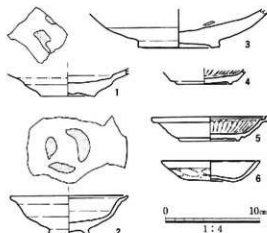


図3 出土遺物

第2節 NW01-3次調査(図版11)

1) 調査にいたる経緯と経過(図1・3)

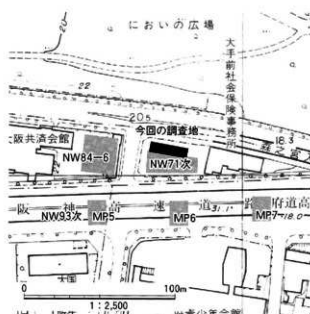


図1 調査地位図

本調査地は前期難波宮内裏の東方約350mに位置する(図1)。いま仮に難波宮西方官衙地域におけるNW89-1次他の調査で見つかった南北橋SA303を宮域の西端とし、難波宮中軸線で東に折り返すと、その線からは約60m東方になる。周辺では古代から近世にかけての遺構が多く見つかっている。1975年に同一敷地内南側で行った調査(NW71次)では、古代の総柱建物と難波宮下層の掘立柱建物などが検出された。また近世初頭の豊臣氏大坂城三ノ丸の一部と考えられる石垣と石段(「郭」遺構)を検出した。道路を挟んだ西側で行った調査(NW84-6次)では、前期難波宮に関連する掘立柱建物と下層の掘立柱建物が検出された。さらに道路を挟んだ

南側で行った調査(NW93次MP-5区)では、後期難波宮に関連する塀などが検出された。

本調査は2001年6月4日から開始した。調査区を設定するにおいて、NW71次として調査したトレンチと連続するように留意した。調査ではまず表土および近・現代層を重機により掘削し、その後は人力により掘削を行った。また6月26・27日には基準点測量を行なった。7月2日に埋戻しを含むすべての作業を終了した。なお、本調査で使用した座標は日本測地系による国土平面直角座標第Ⅵ系である。

2) 調査の結果

i) 層序と遺物(図2・6)

調査区北部・西部は、近代建物のレンガ基礎によって攪乱を受けており、また調査区南部は現代の土壌によって現地表下約2mまで攪乱されていたため、全体として調査範囲が大きく制限されることとなった。よって第1層から第3層にかけては、部分的に遺存している地層を調査することとなった。第4層以下は一連の盛土層と考えられるが、堆積が厚く、安全面を考慮して一部分を地表下約3.5mまで掘削し、断面観察による調査を行った。

第0層：近・現代層である。

第1層：小礫～粗粒砂の偽礫を含む黄褐色の極細粒砂～シルト層で、層厚は約0.3mである。調査区中央～西部に部分的にしか遺存していなかったが、本来は全面にあったものと思われる。本層上面

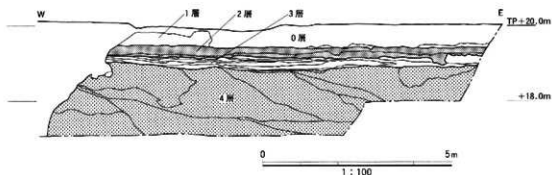


図2 調査区北壁東半断面図

では防空壕や土塹、近代における建物のレンガ基礎および杭跡などが見つかった。

第2層：灰オリーブ色の小礫混り中粒砂～細粒砂層で、層厚は約0.3mである。調査区東部では上下二層に分かれ、固く締まっている。西部にいくにつれて層中にシルトを含み、かつ柔らかくなる。層中からは丹波焼播鉢18・19、唐津焼、中国製陶磁器、瀬戸美濃焼志野、須恵器、土師器皿などの細片が出土した。出土遺物の年代観から、本層は徳川初期の頃に相当すると思われる。

第3層：灰オリーブ色小礫～粗粒砂を含む中粒砂～細粒砂層と、黄褐色細粒砂～極細粒砂層が互層となっている。層厚は約0.3～0.4mである。互層部分は調査区中央～東部付近で顕著であり、人為的な盛土である。本層上面では多くの土塹が見つかった。また、層中からは、唐津焼碗10・11・皿13、土師器皿12・15、青花皿14、備前焼播鉢16、産地不明の水滴17、瀬戸美濃焼志野、瓦器、須恵器などが出土した。出土遺物の年代観から、本層は豊臣後期に相当すると思われる。

第4層：偽礫を多く含む黄褐色のシルト混り粗粒砂～細粒砂層を主体とする盛土層で、盛土の単位が焼層にも分かれる。全体としてみた場合の層厚は、確認できたところで2.5m以上である。地層の堆積状況からは、調査区西部から東部に向かって埋められたことが見て取れる。本層上面ではいくつかの土塹を検出した。また層中からは、絶対量は少ないものの、青花碗1・瓦質土器火入2・丸瓦20・格子目のついた平瓦21・瀬戸美濃焼・土師器・須恵器のそれぞれ細片が出土した。唐津焼を含まないこと、および土器の年代観は本層が豊臣前期にさかのぼる可能性を示唆するが、出土した丸瓦は豊臣後期に主流となるコビキBであり、よって遺物の絶対量とも合わせて単純に豊臣前期と考えるには問題がある。

ii) 遺構と遺物(図4～6)

おもに第4層と第3層の各層上面で、近世の遺構を検出した。以下では主要な遺構について述べる。

第4層上面では土塹SK101～105、ピットSP101・102を検出した。SK105は平面形がほぼ円形の土塹で、直径約1.7m、深さ約0.2mである。埋土は暗灰黄色の粗粒砂を含むシルトで、埋土中から唐津焼碗3～5・皿7、焼塩壺8、土師器皿、大形土製品6などが出土した。遺物の年代観から、本土塹は豊臣後期に埋められたものと思われる。また、二つのピットSP101・102は建物を形成するものとは思われず、その用途は不明である。

第3層上面では土塹SK001～007、ピットSP001～004、溝SD001を検出した。SK004は直径約1mのほぼ円形で、深さは約0.25mである。埋土は灰オリーブ色の粗粒砂混りのシルトで、埋土中から

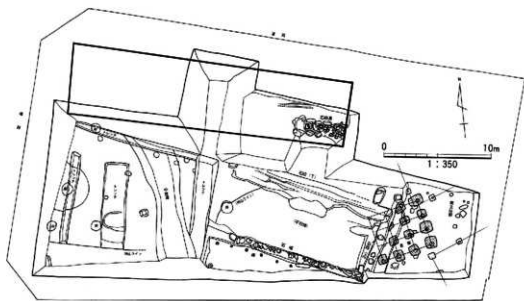


図3 NW71次調査区と今回の調査区

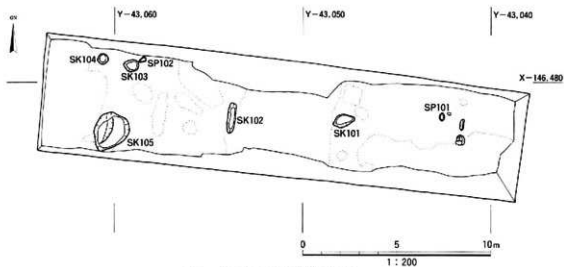


図4 第4層上面検出遺構平面図

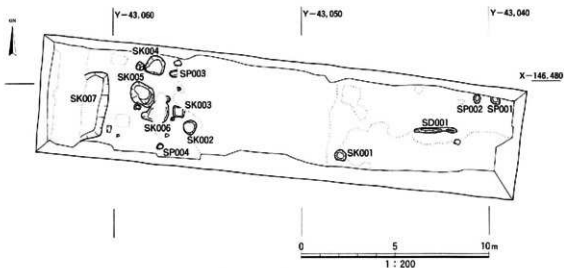


図5 第3層上面検出遺構平面図

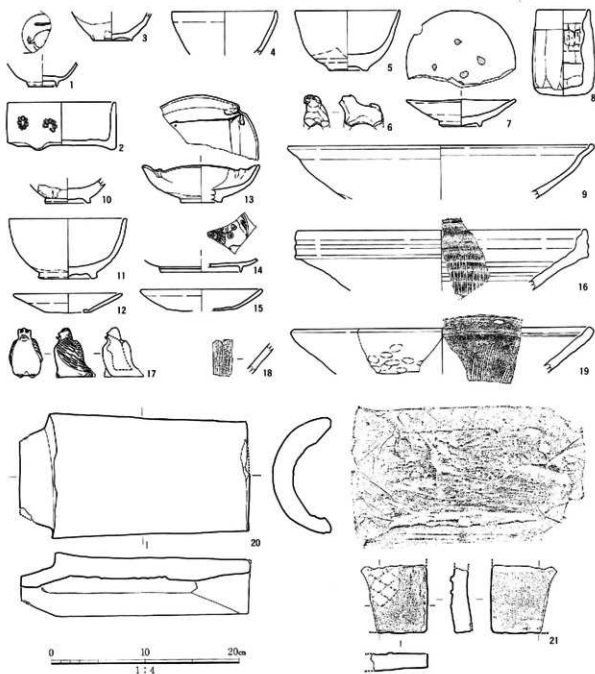


図6 出土遺物

土師器皿・焼締陶器・巴文軒丸瓦が出土した。SK005は長さ約1.5m、幅約1mの楕円形で、深さは約0.4mである。埋土は灰黄色の細かい偽礫を含む灰オリーブ色の粗粒砂混りシルトを主体とする。中から唐津焼皿・碗、土師器皿・焙烙、備前焼、瓦片などが出土した。SK007は長さが約3.5mの隅丸長方形と思われるが、一部をレンガ基礎によって破壊されているため、全体の形は不明である。深さは約0.4mで、埋土はにぶい黄褐色の砂礫を主体とする。埋土からは唐津焼碗・瓦質土器火入・備前焼甕・土師器皿・巴文軒丸瓦などが出土した。ビット群は第4層上面同様建物を構成するものではなく、その用途については不明である。また、SD001はNW71次調査で検出されたものである。検出した長さ約2m、深さは約0.15mである。埋土は中粒砂を含む灰オリーブ色の極細粒砂～シルトであ

る。埋土からは唐津焼が出土した。

以上、第4・3層上面で検出した遺構について述べたが、各遺構の埋土から検出された遺物の年代観からすれば、第4・3層上面ともに同じ豊臣後期に埋められた遺構として位置づけることができる。このことから、当該時代にこの地がゴミを廃棄する場などとして何度も利用されていたことが考えられる。

3) まとめ

今回の調査は、近・現代における攪乱で調査範囲が著しく限定されることになった。そのような中で、調査区西部の地層の遺存状況が比較的よいところで近世の土壌・ビット・小溝などを検出した。おもだった遺構はすべて豊臣後期のものと考えられ、このことから調査区付近は、当時はゴミ捨て場などに供され続けたであろうことが考えられる。次に、第4層以下の一連の盛土は、同じ敷地の南側で行なったNW71次調査で見つかった石垣・石段を埋めた土と同じものであると考えられる。断面観察の結果、この盛土はさらに北方に分布するものと思われ、よってそれら石垣・石段を含む「郭」遺構もさらに北方に広がる可能性が考えられる。また第4層中に含まれる遺物の年代観からは、いくぶん問題点があるものの、この盛土が豊臣前期にさかのぼる可能性が考えられ、「郭」遺構が豊臣前期あるいはそれ以前のものである可能性をも示唆する。今回の調査では、難波宮の時期の遺構は見つからなかったが、豊臣氏大板城に関連すると思われる盛土の存在は、この地における当時の土地利用の形態を考える上で重要であり、今後の調査成果との対比からさらにこの地域の性格を考えていきたい。

(李陽浩)

第3節 NW02-6次調査(図版12)

1) 調査にいたる経緯と経過(図1・2)

当該地は難波宮史跡公園の南西約400mに位置し、東方約60mの地点では、前期難波宮の西側を南北に走る堺跡が見つかっている。また調査地の南の道路が、近世の奈良街道に通じる内安堂寺通であり、その北側が豊臣氏大坂城跡の三ノ丸に当たると考えられている(図1)。

2002年4月11日、標題の工事に先立って試掘調査(OS02-1)が実施され、古代の柱穴が発見されたため、7月29日より本調査を行うこととなった。調査は敷地内に東西5m、南北10mの調査区を設けて(図2)開始し、その後一部を拡張して試掘時の柱穴などの検出を行ったうえ終了した。

2) 調査の結果

i) 層序

今回の調査ではブライマリーな地層の堆積はほとんど認められず、機械力で現代の攪乱層を除去すると、ただちに地山(上町層)に到達し、古代～近世の遺構はみなこの地山の上面で検出することとなった(図3)。

ii) 古代の遺構(図3・4)

柱穴

調査地の北部で3基の柱穴を検出したが、うまく組合って掘立柱建物を確認するにはいたっていない。SP104・105はいずれも北東の拡張トレンチの断面でのみ確認されたもので、掘形の規模は0.7～1.0m程度である。SP105では直径0.2m余の柱痕跡が認められた。これらの柱穴の南西でもSP106が見つかったが、ごく一部しか残っていなかった。以上の柱穴から遺物はほとんど出土せず、細かい年代は不明である。

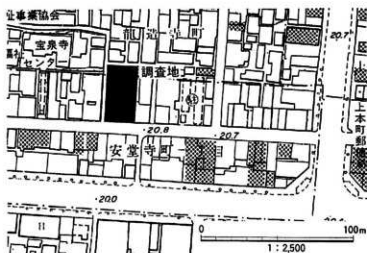


図1 調査地位置図

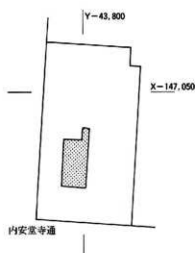


図2 調査区配置図(1:800)

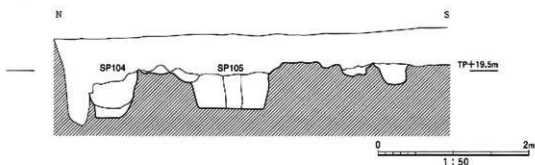


図3 地層断面図

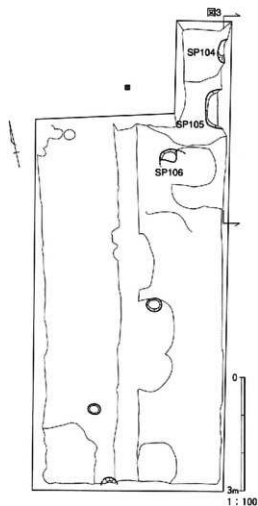


図4 古代遺構平面図

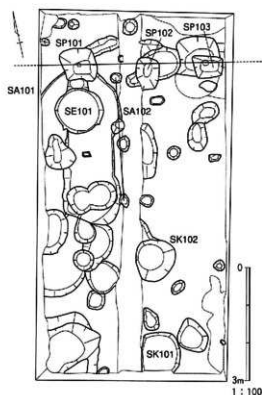


図5 近世遺構平面図

小ビット

調査地の中央から南部で3基の小ビットが見つかったが、これらも建物跡としてはまとまっていない。直径0.3～0.4mで、深さは0.2mも残っていないかった。また出土遺物がほとんどないため、埋土の特徴から古代のものであることは確かだが、年代の詳細はわからない。

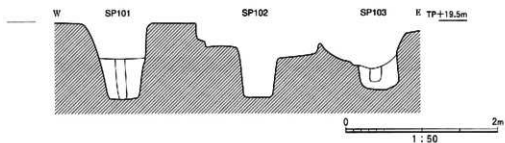


図6 SA101断面図

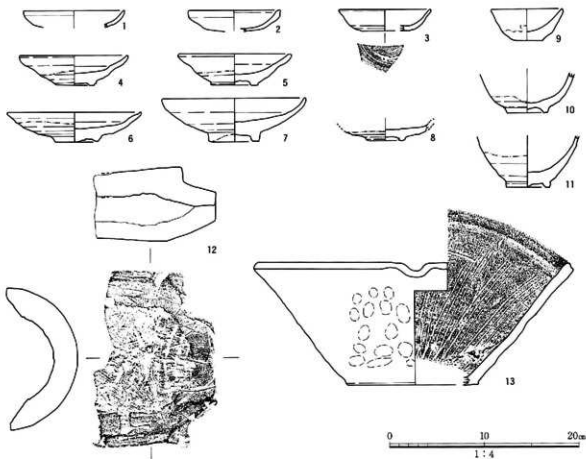


図7 SE101出土遺物

iii) 近世の遺構と遺物(図5～7)

今回の調査で見つかった遺構の大多数は近世のもので、井戸・柱穴のほか、多数の土壌などが複雑に重複して検出された。

井戸SE101は他の遺構との切合い関係から、古く位置づけられる遺構で、直径約1.2mを測る。深さは1.5m以上あるが、完掘はできず、井戸側の痕跡も確認できなかった。埋土からの出土遺物は図7のとおりである。1～3は土師器皿で、3は胎土が白っぽく、底部に糸切りの痕跡をとどめている。4～8は唐津焼皿で、目積み跡は4・6が胎土目、5・7が砂目で、8の高台にも砂目がついている。9～11も唐津焼で、9は小杯、10・11は碗である。12は丸瓦で、凹面に残るコビキ技法の痕跡はコビキA

である。13は丹波焼播鉢で、播目は櫛状の工具で施されている。以上の特徴から、この井戸の廃絶は1615(慶長20)年の大坂夏ノ陣より新しく、下限は1620年代頃とみられる。

1 本柱の堀SA101(図6)は東西2間(約3.4m)分の柱穴を検出した。2箇所を確認できた柱の直径は0.12~0.15mであった。東側の柱穴で柱痕跡から瀬戸美濃焼の灰釉丸碗、掘形から平瓦が出土したが、いずれも細片で、時期を特定するのは困難である。ただ、前者の灰釉碗は豊臣期に多いもののなので、そこまでさかのぼる可能性はあろう。

堀SA102は南北2間(約3.2m)を検出したが、時期は不明である。このほか、多数の土壌が検出された。SK101・102は唐津焼と土師器の特徴から豊臣後期、下っても17世紀第1四半期までの遺構とみられる。他の遺構の大半は17世紀第2四半期以後のものであった。

3) まとめ

今回の調査では、残りは悪かったものの、古代の柱穴と小ビットを検出することができた。その点が調査成果の第一である。

第二の成果は、近世の町屋の存在が確認できたことであろう。これらは内安堂寺通を表通りとして東西方向に町屋が並んでいたことをよく示すものである。一部に柱穴が並んで認められたことから、建物が存在していたこともうかがわれる。

だが、この一帯は小規模な調査が多く、未解明の部分がかなり多いので、今後に期待されるところが大である。

(積山洋)

第Ⅷ章 大坂城跡の調査

第1節 OS01-1次調査(図版13・14)

1)調査にいたる経緯と経過(図1～3)

調査地は大阪城天守閣から西へ約1km、大川から南へ約150mの地点で、上町台地西側の斜面上に位置し、西に向って急激に下がる。現地表の標高は約8mである。豊臣期大坂城三ノ丸の区画罫が検出された現在の谷町筋と、豊臣期大坂城の最外郭である惣構の西限となる東横堀川のほぼ中間地点に当たり、1615年の大坂夏の陣を境に大坂城惣構内から城下町となった場所である。また付近では豊臣・徳川期の豊富な遺構・遺物のほかにも、古代や中世の遺構・遺物が多く見つかっていて、本調査地でもこういった遺構・遺物の出土が見込まれた。2001年3月6日に行った試掘調査で、遺構が約0.5mの深度で見つかったため、協議を経て本調査を行うことになった。

調査は試掘結果に基づき重機掘削により現代の土を除去し、以下を人力で精査した。結果、試掘では予想しえなかった高さ2mを超える石垣が検出された。その構造は図面・写真で記録した。また石垣の石材鑑定を当協会調査研究部調査課小倉徹也が行った。

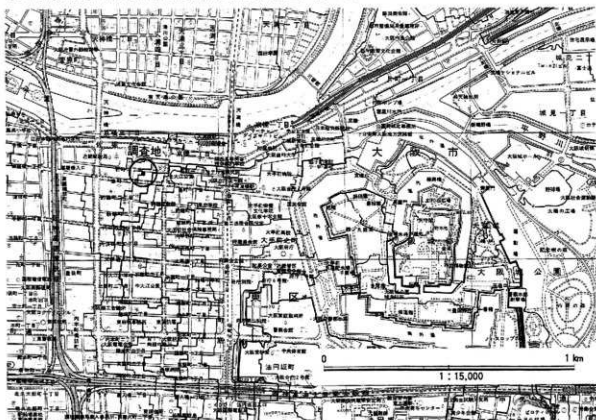


図1 調査地周辺図

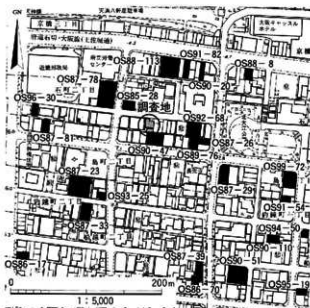


図2 調査地と周辺の調査

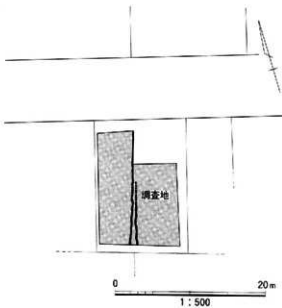


図3 調査地配置図

なお、ここで使用する方位は磁北である。

2) 調査の結果

i) 層序と遺物(図4・5・7・8)

本調査地では調査区中央部で南北方向の石垣を検出した。この石垣を境に、東側では後述の地山層である第5層が重機掘削の段階で検出されたのに対し、西側では深さ2mを越える盛土が堆積していた。これは少なくとも4回行われた石垣修復に伴う整地の結果で、石垣の構築以後、現代までの約400年の歴史をものがたる。石垣西側の基本的な層序は、以下のとおりである。なお、図4・7・8に示した南壁断面図は、調査区東半の南端がひどく攪乱されていたため、石垣より東側の地山の高さ以下の層序は、約1m北側で掘削した裏込め確認トレンチの断面で示している。

第0層：本層は暗茶褐～暗黄褐色を呈するシルトに瓦や漆喰・板ガラスなどが大量に混る近・現代の盛土で、上面は赤く焼け締まる。石垣西側では第0層の上に重機で除去した表土層があり、表土層は調査区全面に堆積する。また、石垣東側では表土層直下に石垣とは方向がやや異なる石列(図7・8の平面図の網掛けで示した部分)があるが、これは第0層と表土層の境界に築かれている。

遺物は図5の4・29が本層から出土したが、下位層に由来する遺物である。4は歯ブラシ形骨製櫛の柄の部分で18世紀代のもの、29は火を受けて表面の釉が銀色化しているが、16世紀末～17世紀代に招来された華南彩釉陶器の壺とみられる。

第1層：18世紀後半～19世紀初頭の遺物を多量に含む盛土で、崩落した石垣石とみられる大きな石も混る。上部に灰褐色シルト、下部に黄色細粒砂が堆積する。本層上面に石組構築物や漆喰溝、埋堯などが設置されていた。

本層から出土した遺物のうち、土師器の皿1・2と奈良焙烙5、棟込瓦3、瀬戸焼馬目皿7、肥前染付磁器の碗15・筒形碗19・香合18を図5に示した。香合18の高台裏の銘款は文字は読めないが、呉須

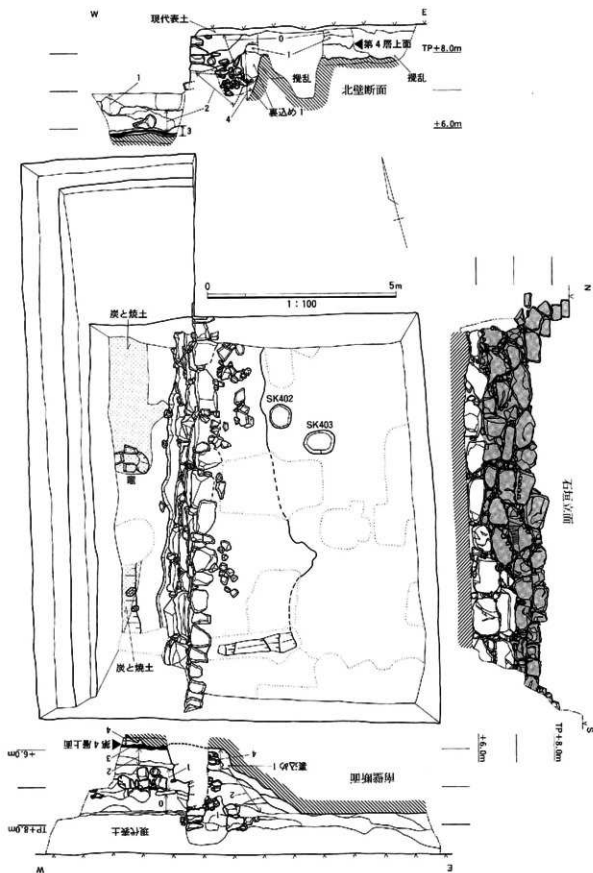


図4 第4層上面検出遺構実測図

(立面図の白抜き部分がこの時期の石垣、立面・断面の斜線は第5層の地山を示す。断面の数字は本文中の層名を示す。)

筆の運びで天地を推定した。

第2層：上部が炭を多く含む青灰色粘土質シルト、下部が暗黄褐色シルトの整地層である。本層にも石垣に使用されていた花崗岩が混っており、石垣の崩落と改修をうかがわせる。こういった石は第1層よりも多く、本層北半に集中していた。

遺物は図5に示した黄瀬戸大鉢6、唐津焼の碗9・皿10・小杯11、精製青花の小杯23・碗24・皿25、粗製青花多角形皿27、型押し成形の中国製白磁に上絵付で図柄を描いた色絵皿28などがあり、これらは17世紀半ばまでのものである。

第3層：1615年の大坂夏ノ陣の戦火による焼土と炭が大量に混る黄色細粒砂～シルトの層である。炭と焼土は図4の平面図に示した範囲に多く含まれ、北半部に分布する焼土中にはスサを含む焼壁がみられる。本層から、図化できないほどの細片であるが、唐津焼や瓦が出土した。

第4層：調査区南西端のみで検出された灰黄色細粒砂を主体とする整地層で、豊臣期か、それ以前の整地と考えられる。地山の傾斜にしたがい西側が厚くなっていて、調査区外にも堆積するものとみられる。本層の上面で最初の石垣が構築されている。本層からは土師器の細片が出土したが、時期の詳細は不明である。

第5層：黄褐色粘土質シルトで、遺物は出土しなかった。本層以下が地山と考えられる。

ii) 遺構と遺物

a. 第4層上面の遺構(図4～6)

石垣西側では石組の竈が検出された(図6)。石を2段ずつ積んで壁を作り、焚口を東側に設けていた。竈内部は、底面で幅0.25m、奥行0.40m、深さが0.35mの空間となり、内部一面に煤が付着していた。第3層の焼土が竈の上面に密着して堆積していた。遺物は出土していない。

石垣東側では長径0.80mの楕円形土壇SK403と、直径0.60mの円形土壇SK402の2基が検出された(図4)。深さはともに0.25m程度である。図5の青釉陶器26はSK402から出土したもので、豊臣後期に輸入された中国南方産の華南彩釉陶器とみられる。

石垣は北でやや東に振る南北方向のもので、基底面で長さ約8.5m検出したが、さらに南北に延びている。目地のとおり具合や石の配置からみて、図4の立面図の白抜き部分の石が第4層上面段階で積み重ねた設置当初の石で、これより上にある石はすべて後世に積み直されたものと考えられる。石垣に使用された石は、東側の地山よりも高いところに積み重ねたごく最近の石垣を除き、どの時期に積み重ねたものも、ほとんどが長辺が約1mもある加工を施さない切出したままの石塊で、長辺が石垣の方向になるように配置し、隙間を拳大程度の石で充填している。石材の詳細については後述するが、大半が花崗岩である。

この第4層上面の石垣は、石垣東側の高い地山を掘込んで設置されている。石垣西側と東側の地山の比高が約2mあるので、石垣は設置当初から少なくとも2mの高さがあったことになる。つまり現存する石垣とほぼ同じ高さということになる。3箇所の特長としてこの掘形に充填された裏込めの土を確認したところ、上からいぶき黄褐色粘土混り細粒砂、明黄褐色細粒砂～シルトの2種類が観察された(図4断面図の裏込め1)。遺物は少なく、土師器の細片が出土したにすぎないが、石垣の設置後

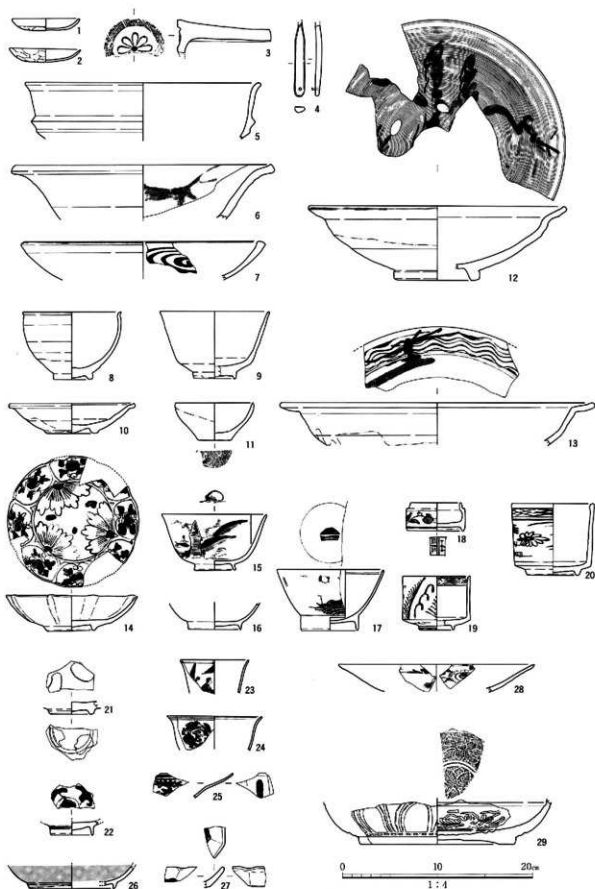


图5 出土遗物

SK402(26)、SK201(12)、SK205(14)、SE208(8·20·21)、SK101(17)、裏込め2(13·16)、
第2層(6·9~11·22~25·27·28)、第1層(1~3·5·7·15·18·19)、第0層(4·29)

に大坂夏ノ陣とみられる炭・焼土層の第3層が堆積していて、これが最初の被災によるものと考えられるので、石垣が最初に設置されたのは豊臣後期かそれ以前と考えられる。

b. 第2層上面の遺構(図5・7)

西側では素掘りの井戸SE208が検出された。平面が直径約1mの円形に掘られたもので、上部は南に広がって不整形になっていた。埋土は黄色砂である。壁面が崩落する危険があったため、検出面から約1mまでの掘削にとどまり、完掘できなかった。遺物は図5の唐津焼内野山系統8・初期伊万里筒形碗20・李朝白磁皿21など、17世紀前半のものが多い。しかし、基盤となる第2層が17世紀半ばであるので、井戸の時期も17世紀半ばまでは下るものと考えられる。

東側では土城が4基検出され、17世紀前半～半ば頃の遺物が出土した。SK201は上部が不整形で、下部で長径約1.2mの楕円形となる。検出面からの深さは約1.5mある。図5の絵唐津大皿12が出土した。SK205も長径約1.0mの楕円形の土城で、深さは約0.4mある。図5の初期伊万里染付型押し皿14が出土した。景德鎮窯万暦年間の輸出用青花である芙蓉手を写した優品である。SK206は直径約1.0mの円形を呈し、深さは約0.6mある。SK207は隅丸方形か隅丸長方形の土城とみられ、南北約0.7m、東西0.3m以上、深さ0.03mの規模である。

この時期に積まれた石垣は、図7の立面図の白抜き部分で、やはり東側の地山の高さから掘込んで積んでいる。したがって、やはりこの時期の石垣も東側地山の高さまで積まれていたことは間違いないだろう。しかし、第2・3層によって生活面が第4層上面より約0.6m高くなっているので、この時期に露出していた石垣は1.4m程度の高さであったと考えられる。この時期に積まれた石垣の裏込めの土(図7断面図の裏込め2)は、黄褐色砂礫・粘土混りシルトで、図5の唐津焼大皿13、肥前磁器白磁碗16など、17世紀半ばから後半の遺物が出土している。

c. 第1層上面の遺構(図5・8)

石垣より西側では石組・埋塞などが検出された。石組は石垣と平行に約0.8mの間隔をあけてL字形に配置されたもので、約0.7mの幅で人頭大の石を2段積み、漆喰で固めている。南北4.5m以上、東西1.7m以上あり、南側と西側は調査区外へと延びている。石組の上端は第1層上面とほぼ同じ高さになっている。蔵の基礎などの可能性が考えられる。のちに石組の東端から石垣までの間には漆喰で断面コの字形に作られた溝状の構築物が設置されている。漆喰溝の埋土から18世紀後半～19世紀初頭の遺物が出土しており、石組と漆喰溝の機能した時期にあまり差はみられない。また、漆喰溝の下に2個、北半部の石垣の西側に4個、埋塞が置かれていた。いずれも胴部を第1層中に埋込んでお

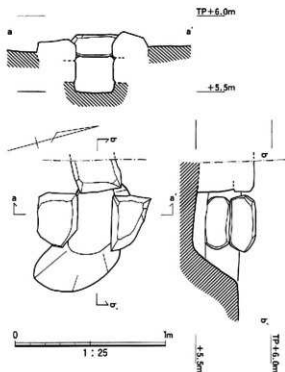


図6 第4層上面の竈平・断面図

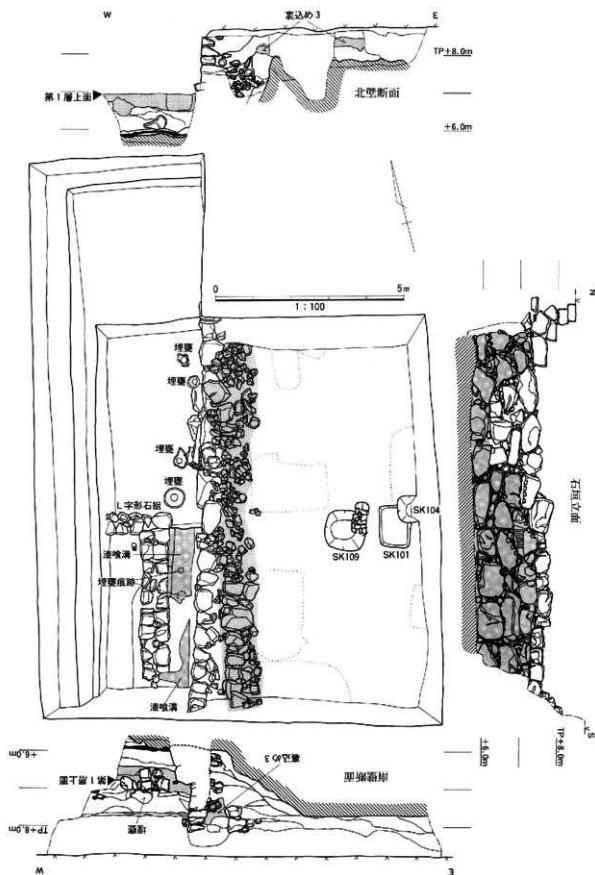


図8 第1層上面検出遺構実測図

〔立面図の網の掛らない部分がこの時期以後の石垣、斜線は第5層の地山、平面図の網掛けは第1層上面の石垣より新しい石組を示す。〕

り、口頸部が口縁部だけが地上に出ているものと推定される。2個ずつが比較的近くに配置されているので、2個が1組であったのかもしれない。

石垣より東側では土壌が3基検出された。いずれも18世紀後半～19世紀初頭の遺物が出土した。SK101は南北1.1m、東西0.8m、深さ約0.6mの土壌で、平面は長方形である。図5の17の肥前磁器染付広東碗が出土した。広東碗は19世紀初頭を中心に流通したもので、17は高台と碗の外面の接合部に金属製工具の痕跡が等間隔に残る。全体の作りはていねいで、川辺の夜景を描き、「月落烏啼霜滿天」と記している。これは唐代の詩人である張継の七言絶句「楓橋夜泊」の最初の一句で、寒山寺に近い蘇州楓江の秋夜を吟じたものである。ただ、呉須で描かれた図柄には月の表現があるが、張継の詩は月のない閑夜をうたったものである。これに図柄を描いた肥前の陶工はこの七言絶句の情景をあまり理解していなかったのかもしれない。この七言絶句「楓橋夜泊」は以下のとおりである。

月落烏啼霜滿天

江楓漁火對愁眠

姑蘇城外寒山寺

夜半鐘聲到客船

SK104は南北0.7m、東西0.6m以上の隅丸方形または長方形の土壌で、深さ約1.0mである。SK109は一辺が約1.1mの隅丸方形の土壌で、深さは0.6mある。SK109の上には瓦敷がみられた。

石垣はこの時期にも修復が行われ、第2層に相当する裏込め2を掘込んで積んでいる。この掘形に充填された土(図8断面図の裏込め3)は褐色系の砂礫混り粘土質シルトで、第1層と同様に18世紀末～19世紀初頭の遺物が出土した。この時期およびそれより後に積まれた石は、図8の立面図の白抜き部分の石である。そして立面図に示した第1層上面の高さより下が地中に埋まっていたことになる。この地中・地上の境界線から上の石は火災にあってひどく表面が焼けており、火災の後、前出の漆喰溝がここに設置されている。したがって、漆喰溝が設置されるまでの間、確実に地面に露出していた石垣は約0.7mと考えられる。その後も小振りの直方体の切石やレンガなどによって石垣は積み上げられたり、修復されたりしており、その結果、最上部は現地表とほとんど変わらない高さになっている。

iii) 石垣を構成する石材について(図9)

石垣に使用された石材の岩石鑑定を行った結果について以下に述べる。

a. 調査方法

石材の種類を判定するため、現地において肉眼および実体顕微鏡により石材表面および破断面を観察した。観察に際しては鉱物の種類、色とその特徴、形状や大きさに留意して行った。また、主たる石材についてはサンプリングし、室内で実体顕微鏡観察を行った。

b. 観察結果

石垣の石材の大半は花崗岩類である。花崗岩類にはその大半を占める黒雲母花崗岩と、角閃石黒雲母花崗岩・花崗閃緑岩・閃緑岩・マイロナイト化した花崗岩がある。花崗岩類以外の石材には斑礫岩・砂岩・泥岩・安山岩・片麻岩と石英がある。各石材の岩相の特徴について以下に述べる。

花崗岩類

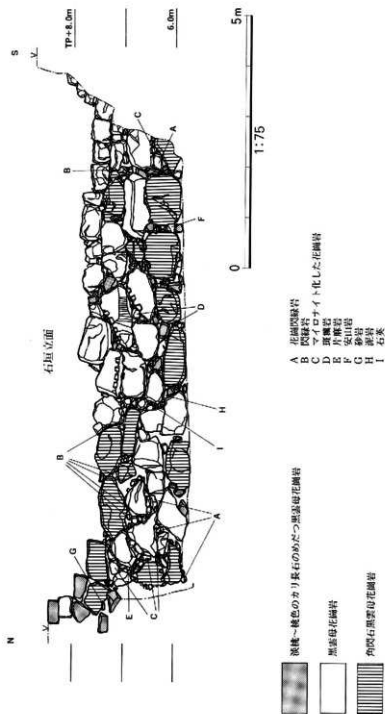


図9 石垣に使用された石材

黒雲母花崗岩：粗～中粒、ときに細粒(アブライト質)である。等粒状の組織を有するものや特徴的に淡桃～桃色のカリ長石がめだつものがある。

角閃石黒雲母花崗岩：粗～中粒で、角閃石がめだつ。片状構造が観察されるものもある。

花崗閃緑岩：中～粗粒で黒雲母や角閃石を含む。

閃緑岩：粗～細粒で、風化してややマサ化しているものもある。

マイロナイト化した花崗岩：細粒で片状構造(片理)が観察される。

花崗岩類以外の石材

斑禰岩：細～中粒で角閃石や輝石を含んでいる。

片麻岩：縞状の構造が観察される。

安山岩：無斑品質である。

石英：岩脈の一部であると考えられる。

次に、石垣の石材の構成であるが、石材243個体のうち、花崗岩類が227個体で、全体の93%を占め、残りの7%に当たる16個体は花崗岩類以外の石材であった。

花崗岩類については、227個体中196個体が黒雲母花崗岩で、花崗岩類の86%を占める。黒雲母花崗岩のうち20%(39個体)が淡桃～桃色のカリ長石がめだつ黒雲母花崗岩で、10%(20個体)が角閃石黒雲母花崗岩である。花崗岩類中、残りの14%に当たる31個体は、これら以外の花崗岩類である。

花崗岩類以外の石材(全個体の7%、16個体)については、そのうち約2/3を占めるのが輝石角閃石斑禰岩(10個体)である。

c. 小結

図9に示したとおり、石垣を構成する石材のうち、石垣の主体となる石材(大石)は黒雲母花崗岩と角閃石黒雲母花崗岩で占められ、目地部には多様な石材が使用されている。

これら石材のうち、今回の観察方法においてその特徴から産地を推定できるものは、黒雲母花崗岩の中でもっとも数が多い淡桃～桃色のカリ長石がめだつ黒雲母花崗岩で、ここの石垣では目地部に多く使われている。これは山陽帯に属する六甲花崗岩あるいは播磨花崗岩と推定される石材である。

3)まとめ

今回は比較的小規模の調査ではあったが、大きな成果をあげることができた。

まず、大坂夏ノ陣までに設置された大坂城惣構内のこれまで知られていなかった石垣を確認したことである。今までにも三ノ丸から惣構までの間では数箇所が同時期の石垣が確認されているが、今回の石垣はど各時期の状態を復元できるものはない。今回調査で設置当初から高さが2m以上もあったことが確認されたうえ、つい最近まで敷地を画する石垣として機能していたことなど、多くの歴史的情報を提供してくれている。

次に、この石垣が地山を掘込んで築かれていることに注目しよう。本調査地西半の豊臣期とみられる整地層の標高は約6mであり、東半は当該期の整地層がなく、地山で標高が約8mとなっている。今、大坂夏ノ陣直前の景観を復元するために周辺調査の豊臣後期の整地層上面の高さをみると、西側

の東横堀川までの間は標高4～6mであり、整地層の厚さも1m近くある。本調査地までの距離が約350mあるので、350m東へ行って2m上がるぐらいの傾斜の空間とみてよいだろう。本調査より東側は地山自体が高く、当該期の整地層が確認されていない場合がほとんどなので、地山の標高で調べてみると、約50m東の調査地で標高約12mとなり、もともと急激に高くなっていたことがわかる。つまり、本調査地以西は積極的に土を盛る整地であるが、本調査地では急な傾斜の地山を削込む整地を行っているのである。これは盛土をしたり、石垣を構築することにより、東横堀川までの間に比較的平坦な広い空間を確保しようとしたためと推測されるのである。

また、この石垣がどこまで続いていたのかであるが、現在、本調査地北側に接する東西方向の道路は調査地付近で傾斜が変化する(図版14の下段)。そして、この道路の北側の現在の敷地境が今回検出された石垣のほぼ延長線上にあって、その両側の敷地に高低差がある(図版14の中段)。これらは地中の段差によるものとみられ、この道路が従来からの道路を踏襲していたとしても、スロープ状の傾斜をもった道路ではなく、階段などで段差を解消していた道路であった可能性があり、石垣の北進を推測させる。しかし、北へ150mほどで大川に当るので、この間で石垣は収束することになろう。石垣の南側は、一筋南にある高麗橋筋が絵図にもみえる幹線道路で、おそらく豊臣期にもさほど位置を変えずに存在していたと考えられるので、今回の石垣は高麗橋筋で一旦収束すると考えられる。では、高麗橋筋より南はどうか。同様に南側の東西道路を順にみると、傾斜が急に变化する個所が認められるものがある。したがって、現状では石垣が積まれていたかどうかはわからないが、石垣かそれに替わる区画施設が存在した可能性は指摘できるのではないだろう。

最後に、石垣の築造・改修の時期と石材の配置との関係についてみてみよう。石垣の中で、角閃石黒雲母花崗岩は基底部分の石に多く使われ、黒雲母花崗岩はこれよりも上位の石に比較的多く使われている。個々の石の積まれた時期と合わせて考えると、豊臣後期の石材は角閃石黒雲母花崗岩が多く、それ以後の石材には黒雲母花崗岩が多いといった傾向があるようにみえる。一般的には内包物の異なる2種類の花崗岩があれば、それぞれの切出し場所が異なる可能性が考えられる。本調査地点の石垣についていえば、整地層に崩落した石垣の石材が混っていることから、石垣の修築時には再度積まれた石材以外に新たな石材も調達したのではないかと推測され、徳川期になると豊臣期とは違う場所から石材を調達したのではないかと推論も成り立つ。しかしながら、この石垣は本調査地点のみで完結しているものではないので、たまたま石材の配置がこうなった可能性もある。また、石材が切出し場所から直接ここに運ばれたのか、間に石材業者ともいえる人々や機構が介在したのかなどによっても状況は異なってくるので、いろいろな要素を加味して考える必要がある。ゆえに、本調査結果をもって即石材の違いが時期の差によるものとは断言できないのはあるが、今後、同様の視点で調査を行えば、時期差といえるのかどうか、また、各時期の石材の流通はどうなっていたのかなどを解明できる可能性がある。

本調査により、今後、調査していく上でのいくつかの観点を示せたいと思う。これらは考古学的なフィールドワークによってのみ確認できるものであるため、今後の調査に大いに期待したい。

(松本啓子)

第2節 OS02-8次調査(図版15~18)

1) 調査にいたる経緯と経過(図1・2)

調査地は上町台地の西斜面に位置する。調査地周辺は南および北側がやや高く、西側に緩やかに傾斜する地形を呈しており、台地を開削する谷の中に当る。また、当地は豊臣氏大坂城の三ノ丸の外側で、惣構堀の内側に当り、周辺ではOS89-40、90-27、93-2・6次調査が行われている(図1)。調査地東側のOS89-40次調査では17世紀中葉以降の土壌や18世紀代の石組遺構が、OS93-2次調査では17世紀中葉以降の鍛冶関連の遺物が確認されている。南西側のOS90-27次調査では、豊臣期と考えられる土壌・ビットや江戸時代の石組遺構・井戸・土壌が検出されている。しかし、豊臣期の遺構が検出されることは非常に少なく、付近の試掘調査でも大部分が中位段丘構成層まで攪乱されているか、あるいは江戸時代以降の盛土層しか見つからず、惣構内でありながら豊臣期の様相がよくわかっていない地域である。

2001年11月6日(OS01-30次)、2002年1月17日(OS01-42次)の2度の試掘調査を行った結果、豊臣期から江戸時代前半の遺物と江戸時代後半以前と考えられる遺構が確認された。この結果を受け、建物の建設される範囲内に調査区を設定し、2002年4月23日から発掘調査を実施することになった。調査はまず、重機によって現代盛土を除去した後、以下を人力によって掘下げた。調査を進めていく中で、調査区北部および中央部において、現代の攪乱部分の断面で豊臣期から江戸時代前半頃と考えられる焼土層が確認された。焼土層の上面の深さが建物の基礎深度以下であったため、大阪市教育委員会および大阪市住宅局と協議し、焼土層以下については調査範囲を縮小して調査を行うことになった。6月3日から縮小した範囲で調査を行った結果、大阪市内では初めてとなる達磨窯9基と桐文の木製瓦范など豊臣期に関連する遺構・遺物が検出された。6月28日に空中写真撮影を実施し、7月5日に達磨窯の保存を目的とした保護作業を行い、7月6日に埋戻し作業および器材類の撤収を含む現



図1 調査地位置図



図2 調査区配置図

地におけるすべての作業を完了した。なお、調査期間中に南大江小学校の全校生徒310名とPTA、地元町会に対し現場見学会を開いた。

本報告は小倉徹也を中心に田中清美、小田木富慈美が執筆を分担した。出土遺物のうち瓦については宮本佐知子と黒田慶一が検討に加わり、宮本が執筆した。動物遺体については池田研が執筆した。

なお、図中に記した座標値は世界測地系による国土平面直角座標第Ⅵ系に基づいている。

2) 調査の結果

i) 層序と出土遺物(図3～7、表1)

部分的な坪掘りを含め、現地地表下約6.3mまでの地層を観察した。以下に層序の概略を上位層から

表1 層序表

層序	岩相	層厚 (cm)	〈北側〉 遺構 〈南側〉	時代
第0層	(現代盛土)	160	→土蔵跡、月井	現代
第1層	a 含細礫 黄灰色 シルト混り粗～中粒砂(盛土)	30～40	→生活面	江戸時代 中～後期
	b 黄灰/黄褐色 シルト混り粗～中粒砂(盛土)	60		
	c 含細礫～粗粒砂 黄灰色 粗～中粒砂(盛土)	25	SK201,SD201L, →SP201,SK201	
第2層	含炭・焼土塊・シルト偽礫 灰色 シルト混り粗～中粒砂(盛土)	20	→土蔵(家型)	豊臣期
	z 含炭・黄灰色 シルト偽礫暗灰色 シルト混り粗～中粒砂(盛土)	5～25	→生活面 SD301	
	a 含褐色焼土・炭 黒褐色/赤褐色 シルト混り粗～中粒砂(焼土・炭層(盛土))	≦10	→1号溝 SD302-303,SA301 SK301-302,SK301	
	b 灰/黒灰色 炭・シルト混り粗～中粒砂(盛土)	5～15		
	c 含炭 灰/褐色/黄灰色 シルト混り粗～中粒砂(整地/盛土)	10～15	→2-3号溝 SP301-302 △SK302	
	d 含炭・焼土塊・赤褐色/灰色窯体 暗褐色・黒灰色 シルト混り粗～中粒砂	5～10	→5号溝 6-7号溝	
	e 含炭 黒灰色 シルト混り粗～中粒砂/シルトレンズ状含む黄灰・淡緑灰色 粗～中粒砂(盛土)	≦12		
	f 含炭・窯体 赤褐色 シルト混り中～粗粒砂(焼土層(盛土))	5～10	→9号溝	
	g 含炭 黄灰色 シルト混り粗～中粒砂(盛土)	≦10		
	h 灰/灰色 炭・シルト混り粗～中粒砂(灰層(盛土))	10～30		
	i 黒/灰/赤褐色/褐色 細礫混り粗～中粒砂(盛土)	2～8		
第3層	j 灰色 シルト混り中～粗粒砂/シルト質中～粗粒砂(整地/盛土)	30	→4号溝	
			→8号溝	
第4層	灰色 粗～中粒砂混りシルト(盛土)	50		
第5層	i 含細礫 黄灰色 粗～中粒砂(盛土)	70		
	ii 含中粒砂～粗礫 黄灰色 粗～中粒砂(盛土)	25		
	iii 青灰色 粘土偽礫混り砂礫(礫層～中粒砂)(盛土)	30		
第6層	灰色 砂礫(中礫～粗粒砂)	20≦	(宮内府遺物)	

凡例 → 上面検出遺物 △ 層内検出遺物

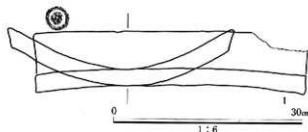


図4 第1a層出土遺物

一地点で2点出土した。1は長さが43.5cm、幅36.5cm、厚さ3.2cmで、もう1枚は長さ40.5cm、幅32.6cm、厚さ2.6cmと一回り小さい。1は凹面に、もう1枚は端面に刻印が施されていた(図版18-7)。これらと同文の刻印がある平瓦は豊臣氏大坂城惣構内の屋敷地や、四天王寺境内からも出土している。第1c層からは、見込みを蛇ノ目釉剥ぎする17世紀末から18世紀前半頃の肥前磁器の白磁皿5が出土した。

第2層は炭や焼土を含む盛土で、達磨窯の廃絶後の整地層である。本層からは調査地北部で巴文軒丸瓦2、唐草文軒平瓦3、鯉瓦の鱗の一部4が出土した。また、南部からは瀬戸美濃焼鉄釉天目碗6、青花



図5 第2層出土遺物(1)

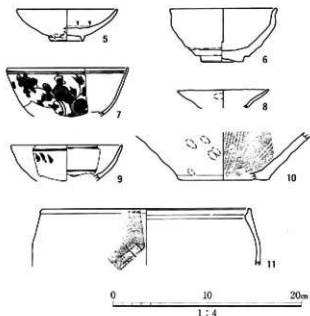


図6 第1c層～第3a層出土遺物

記し、各層の層相や特徴を表1に、模式断面図を図3に示す。

第0層は現代の盛土層や攪乱層である。

第1層は炭や焼土を含まない盛土層である。

1a～1c層の3層に細分される。第1a層からは丸の中に「大工」の刻印がある大型の平瓦が、同

花碗7、土師器皿8、瓦質土器搦鉢10のほか、軒丸・軒平・丸・平・雁振り・文字瓦、埴などの大量の瓦埴と、これまでに日本で出土例のない桐文の木製瓦範が出土した。瓦類については後述するが、その総重量は約240kgであった。6と7から、本層は豊臣前期に属するものと考えられる。

第3層は主として炭や焼土を含む盛土層で、3z層と3a～3j層の11層に細分される。主として、発見された達磨窯の灰原や瓦窯廃絶後の堆積層から構成される。

第3z層は炭を含む暗灰色シルト混り粗～中粒砂からなる1号窯の廃絶時の堆積層である。

第3a層は焼土塊や炭を含む黒褐色ないし赤褐色のシルト混り粗～中粒砂からなる。1号窯およびSK301、SA301、SD302・303、SX301・302は本層上面の遺構である。本層からは漳州窯産の青花碗9が、SA301からは焙烙11が出土した。9・11はともに豊臣前期の遺構から出土することが多く、下っても豊臣後期の17世紀初頭以前に属する可能性が高い。

第3b層は炭を含む灰色ないし黒灰色シルト混り粗～中粒砂からなる。2・3号窯の作業時および廃絶後の堆積層である。

第3c層は炭を含むシルト混り極粗～中粒砂か

らなる。2・3号窯、SP301・302は本層上面の遺構である。また、北西トレンチ断面(図12)ではSK302を確認した。

第3d層は炭や焼土塊、窯体片を含む暗褐色ないし黒灰色のシルト混り粗～中粒砂からなる。9号窯の廃絶後の堆積層である。調査区南部では、本層上面に5号窯および6・7号窯が構築されている。

第3e層は炭を含み、黒灰色シル

ト混り粗～中粒砂やシルトをレンズ状に挟む黄灰色ないし淡緑灰色粗～中粒砂からなる。9号窯の操業時の堆積層である。

第3f層は炭や窯体片を含む赤褐色シルト混り中～粗粒砂からなる焼土層である。第3e層と同様に9号窯の操業時の堆積層である。

第3g層は炭を含む黄灰色シルト混り粗～中粒砂からなる。本層上面に9号窯が構築されている。

第3h層は黒色ないし灰色のシルト混り極粗～中粒砂からなり、上半部と下半部に細分される。上半部は炭を多く含む、下半部は瓦と炭を大量に含む。調査区の北部から中央部にかけて分布する。4号窯廃絶後の堆積層である。本層からは3種類の軒丸瓦12～14と、軒平瓦15が出土した。これらは豊臣期に属するものと考えられる。

第3i層は細砂混り極粗～中粒砂からなる、4号窯の操業時の堆積層である。

第3j層は灰色シルト混り中～粗粒砂ないしシルト質中～粗粒砂からなる。4号窯は本層上面の遺構である。

第4層はシルトを主体とする盛土層である。層厚は調査地中央部で厚く、南北方向に薄くなる。調査地内でもっとも古い8号窯は本層上面の遺構である。

第5層は黄灰色ないし青灰色の砂礫～中粒砂からなり、本調査地全域に分布する盛土層である。調査区南側で行った深掘りで、その層相から5i～5iii層の3層に細分された。

第6層は灰色砂礫で、調査地およびその周辺の地下に存在する埋没谷の堆積層と考えられる。

ii) 遺構と遺物

平面的な調査は第1層上面から開始し、第2層上面と第3z層の基底面で行った。

a. 第3z層基底面検出遺構(図8～24、表1、写真1・2)

縮小した調査区内にて1～9号の達磨窯と、堺SA301、暗渠SD302、溝SD301・303、土塋SK301、ビットSP301・302、SX301・302を確認した。それぞれの遺構の新旧(上下)関係は、第3a～3j層の分布範囲が狭く限られていたため、第3z層基底面で一括して検出したのち、地層の対比を行い確認した。詳しくは層序表(表1)を参照されたい。

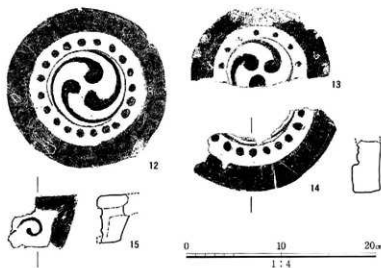


図7 第3h層出土遺物

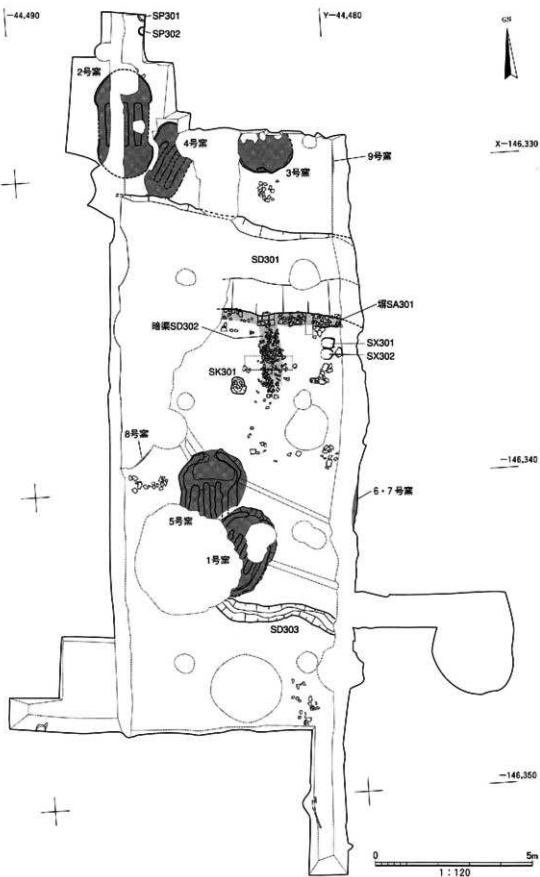


图8 第3层基底面检出遺構平面图

連磨窯は中央に焼成室を置き、両側に燃焼室、両端に焚口を配する瓦窯(図9)で、検出した連磨窯のうち1～5号窯は調査面で、6～9号窯は壁面および断面において確認した。

1号窯(第3a層上面遺構)(図8・10、写真1)

調査区の南側に検出された連磨窯のうち、もっとも南側に位置する。周囲に比べて0.25mほど高い場所に、5号窯の南東部分に重なって構築されていた。瓦窯の上部構造の大半は失われていたが、畦は上端まで、側壁はわずかではあるが下部が残存していた。検出された連磨窯の中でもっとも連磨窯の下部構造の立体的検討に良好なものであった。

瓦窯の主軸(両端の焚口を結ぶ方向)はほぼ北東-南西方向で、平面形は小判形を呈する。大きさは、南西および北東部分が深くまで攪乱されていたため、正確にわからない部分もあるが、連磨窯が主軸に対して左右対称形であると仮定すると、外寸で全長3.0m、中央幅2.1m、内寸で北側燃焼室幅1.4

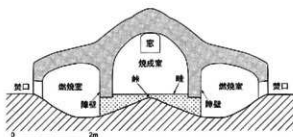


図9 連磨窯の構造(連磨窯の基本形[藤原学2001]に加筆)

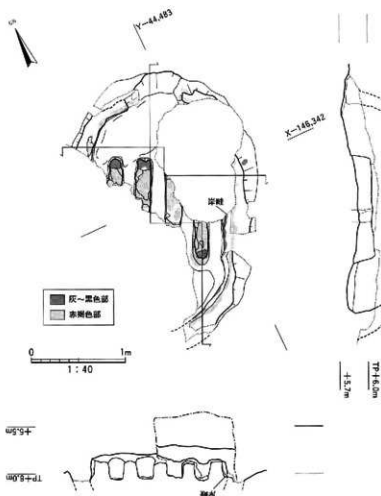


図10 1号窯平・断面図



写真1 1号窯跡の上面(北から)

m、焼成室幅1.5mと推定される。北側燃焼室長は内寸で0.70mであった。

燃焼室と焼成室は約10°の傾斜をもつ通焰溝によってつながり、通焰溝の峠部分は滑らかに連続していた。通焰溝の峠部分と北側燃焼室の床部との高低差は0.19mであった。攪乱部での断面観察から、本窯構築以前に他の瓦窯が廃絶する際に生じたものと考えられる炭や焼土・窯体・瓦などの破片を含むシルト混り細～中粒砂で盛土を行って

いることが明らかとなった。燃焼室の床はこの盛土層を掘り凹め、スサを含むシルト混り中～粗粒砂を貼付けて構築していた。燃焼室の床面および通焰溝は還元焼成によって黒色ないし灰色を呈する。床面には炭が厚さ約1mmの薄い層をなして付着していた。

畦は4本あり、スサを含むシルト混り中～粗粒砂で形成されていた。畦幅は上端で0.13～0.18m、畦高は0.15～0.24mであった。また、通焰溝の幅は中央の2本が0.20m、外側の2本が0.13～0.15mであった。攪乱のため全体の形の残る畦はなかったが、4本の畦から復元すると全長は1.1mと推定される。畦の上面は端から0.10～0.12mが平らに整形されており(写真1)、燃焼室と焼成室とを分ける障壁がのる部分と考えられる。南東の内側壁には、瓦がのる岸畦とよばれる窯壁から焼成室側へ突出したステップが残存していた。畦の断面観察から中央の2本の畦およびその畦間の通焰溝には還元焼成による黒色部が畦内部にもう1帯みられたことから、補修が加えられたことが明らかとなった。

窯壁は南側焚口付近で厚さ0.25mあり、内面から外面に向って黒色→黒灰色→灰白色→赤褐色→褐色→暗黄灰色に変色していた。黒色部から赤褐色部は燃焼室の貼付床と同質のスサを含むシルト混り中～粗粒砂からなり、堅く焼き締まっていた。褐色部から外側はスサをほとんど含まないシルト混り中～粗粒砂からなり、軟質で焼き締まっていなかった。

焚口は北側焚口の下部が残存していた。幅は下底部で0.37m、残存する高さは0.21mであった。焚口から燃焼室にかけての傾斜は約10°で、北側燃焼室の床部と北側焚口部との高低差は0.09mであった。焚口の一部にも、厚さ約1mm程度の薄い層をなした炭が付着していた。

瓦窯の南東側壁部では、窯壁が幅約0.2mにわたって途切れていた。連磨窯の側面には、窯詰め・窯出しの際に製品の出し入れを行うための窯口が設置されているが、この窯壁の途切れた部分が窯口に相当するものと推定される。

2号窯(第3c層上面遺構)(図11・12)

調査区の北西隅で検出した連磨窯で、4号窯の上位に構築されていた。焚口部分は南側の一部を除いて失われており、窯壁および畦の上部の大部分は削剥されていた。

瓦窯の主軸はほぼ南北方向で、平面形は瓢箪形を呈する。畦は3条ある。外寸で全長約3.7m、北側燃焼室幅約2.0m、南側燃焼室長0.95m、同幅約1.95m、焼成室幅は内寸で約1.5mであった。畦の長さはいくつも残りの良い中央畦で1.39m、幅は東側畦の下端で0.30m、残存高は中央畦南端部で

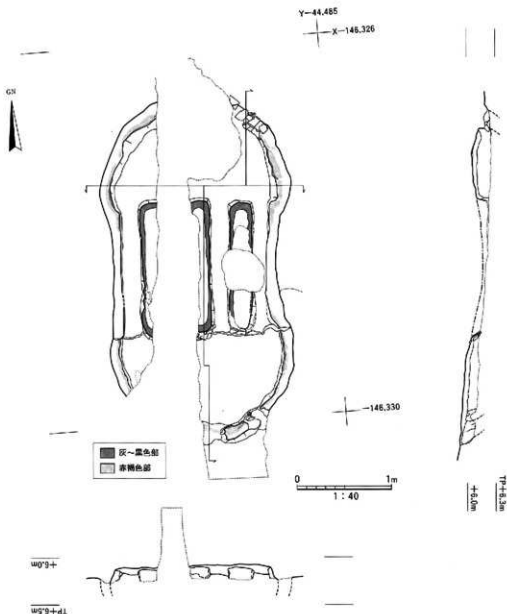


図11 2号窯平・断面図

0.28mであった。焼成室と燃焼室の床面はなだらかにつながっており、通焰溝の傾斜は北側で8～10°、南側で12～18°であった。焼成室の峠部分と南側焚口部の高低差は0.30mであった。なお、瓦窯自体は北側の燃焼室の床面が南の焚口付近よりも0.20m高い緩やかな傾斜をもつように築かれていた。窯壁はスサを含むシルト混り中～粗粒砂からなり、厚さは0.2m以上はあったものと推定される。窯壁の内面は還元焼成により黒色ないしは灰白色化しており、外側は赤褐色に変色していた。断面観察からは本窯の構築前に、ほかの瓦窯が廃絶する際に生じた炭や焼土・窯壁・瓦を多量に含むシルト混り粗～中粒砂で整地を行っていることが判明した。燃焼室はこの整地層を浅く掘り凹め、床面にスサを含むシルト混り中～粗粒砂を貼付けて作っていた。また、畔は挟雑物の比較的に少ない砂混りのシルト混り中～粗粒砂を積み上げたのち、床面と同様にシルト混り中～粗粒砂を貼付けて構築していた。

北東の窯壁には平瓦片が敷き並べられていた。これらは窯壁の一部として壁体に塗りこめられた可能性があり、同様の例は堺環濠都市遺跡でも認められている[堺市教育委員会1988]。

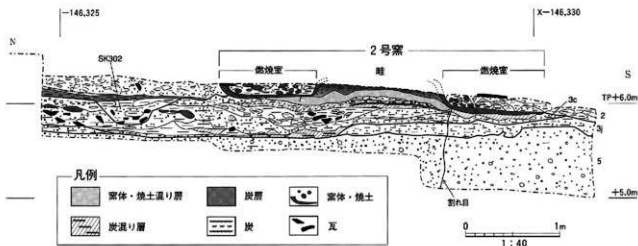


図12 北西トレンチ断面図

南側燃焼室の焚口は幅0.25mが残存しており、この部分の床は被熱により硬化していた。また、焚口の東脇では窯壁が幅約0.2mにわたって途切れていた。後述する3号窯の焚口の脇でこれと同じ状況が認められたことから、操業のある段階で、意図的に窯壁に穴を開けた可能性がある。

これらのほかに、南側燃焼室と焼成室の境には、幅約2～4cmの東西方向の直線的な開口割れ目が認められた。畦部南端では瓦片がこの中に入込んだ状態で検出された。また、東端に認められた逆「U」字状の凹みは、本来ここに存在した丸瓦が抜き去られた状況を示すものとも考えられる。割れ目は東西とも窯壁の外にまで及んでおり、このことから瓦窯の床面を作る際、人為的に東西方向に瓦を埋込んだ可能性が考えられる。この施設を焼成室と燃焼室を区切る障壁の痕跡とみることもできる。このばあい、これらの瓦は燃焼室から焼成室への火のあたりをやわらげるため置かれたと考えられる。ただし、上部の構造が不明であるうえ、北側燃焼室には同様の施設は認められなかったため断定はできない。なお、この割れ目上にあった瓦が割れており、割れ目内には砂が入っていたが、断面観察からは地震による噴砂とする確証は得られなかった。割れ目を生じた原因が地震であるなしに関係なく、南側に後述する深い溝SD301が存在することからみて、この溝側にずれた可能性もある。

3号窯(第3c層上面遺構)(図13・14)

調査区の北東部、4号窯の東側に位置する達磨窯で、遺構の北半部は調査範囲外である。2号窯の対となる瓦窯と考えている。燃焼室の南側には焚口が残っているが、窯壁および畦の大半は上位層により削られていた。

瓦窯の主軸は2号窯と同様にほぼ南北方向であった。燃焼室の平面形は半円形に近いが、北壁部で窯壁がやや内側に向く状況が観察されたことから、瓦窯全体の形状は瓢箪形を呈するものと考えられる。畦はその名残りと思われる痕跡から3条と推定された。燃焼室の幅は内寸で約1.85mと推定される。焚口は幅0.3m前後、高さ0.2m前後が残存し、この南側には焚口を閉塞した際に使われたと考えられる0.10～0.15m大の窯壁の破片の集積がみられた。また、焚口の西脇の窯壁が前述の2号窯と同様に途切れていた。窯壁内側が幅約0.15m、窯壁外側が幅約0.2mと外側が幅広いことから、操業のある段階で意図的に窯壁外側に穴を開けた可能性がある。燃焼室の窯壁は他の瓦窯のものと考えられる破片を多く含んでおり、その厚さは0.18m以上はあったものと推測され、内側から外側に向って

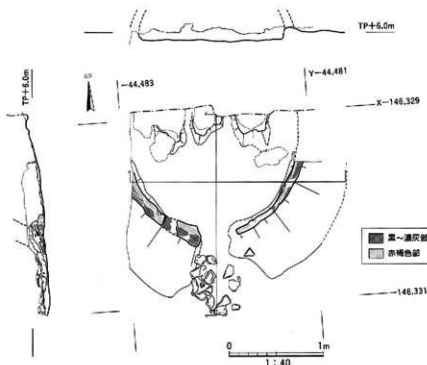


図13 3号窯平・断面図

灰色→淡紫色→黄色→赤～赤褐色へと変色していた。焚口から燃焼室床面への傾斜は $6\sim7^\circ$ あり、床面は灰色で、堅く焼き締まっていた。

3号窯周辺から中型の巴文軒丸瓦16と丸・平瓦が出土した。このほか、焚口からみて右端の畦の下位から鯉瓦の鱗17が出土した。

4号窯(第3層上面遺構)(図15・16)

調査区の北西部、2号窯の南東側に位置す

る達磨窯である。窯体および畦の大部分は第3層により削られ、西部分は2号窯の構築によって壊されており、畦の約半分と燃焼室の一部のみがかるうじて残存していた。

瓦窯の主軸は1号窯と同様にほぼ北東-南西方向で、瓢箪形の平面形を呈する。内寸で全長約2.5m、焼成室幅約1.3m、燃焼室幅約1.45mと推定される。畦は3条で、残存幅は0.18~0.20mであった。残存する畦から復元すると全長は約1.45mと推定される。燃焼室の床面は黒色ないし濃灰色を呈し、堅く焼き締まっていた。周辺からは、唐草文軒平瓦18の破片と丸・平瓦が出土した。

5号窯(第3層上面遺構)(図17)

調査区の南部、1号窯の北側に位置する達磨窯である。窯体および畦の大部分は第3層により削られ、南部分は1号窯の構築によって壊されており、北側燃焼室と畦がかるうじて残存していた。

瓦窯の主軸は2・3号窯と同様にほぼ南北方向で、瓢箪形の平面形を呈する。内寸で燃焼室幅は約1.7m、焼成室幅は約1.35mと推定される。畦

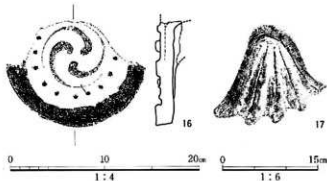


図14 3号窯周辺出土遺物



図15 4号窯周辺出土遺物

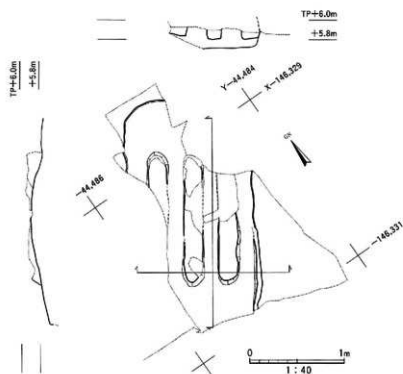


图16 4号窟平·断面图

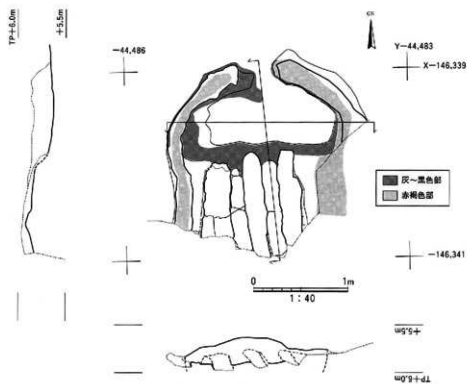


图17 5号窟平·断面图

は3条であった。焚口は北側焚口の下部が残存していた。幅は下底部で0.35m、残存高は0.14mであった。焚口から燃焼室にかけてはほとんど傾斜がなく、北側燃焼室の床部と北側焚口部との高低差は0.02mであった。燃焼室の床面は黒色ないし濃灰色を呈し、堅く焼き締まっていた。

6～9号窯(図8)

6・7号窯は調査区南側の東壁面において確認した瓦窯である。第3d層上面遺構で5号窯と同時期の瓦窯と考えられる。6号窯の北半部は上に凹の形状をもち、その上部から下部にかけて黒色→灰色→赤褐色→褐色と変色しており、南半部は緩い傾斜をもって南側へ上がっていた。このことから、瓦窯の燃焼室床部から通焰溝の一部である可能性がある。7号窯は6号窯のすぐ南側で接するように観察された。断面上部から下部にかけて6号窯とは逆に褐色→赤褐色→灰色と変色していたため、窯体の一部が崩れて落込んだものと考えられる。6号窯と近接していることから、一体の瓦窯の可能性もある。8号窯は調査区中央部西側の攪乱断面において確認した調査地内でもっとも古い瓦窯で、第4層上面の遺構である。畦の一部と考えられる窯体片が確認された。本瓦窯は断面観察のみであったが、他の瓦窯から推測される大きさ、残存していた畦の方向などから、5号窯の下位にあり、その大部分は5号窯に壊されているものと推測された。9号窯は調査区北側の東壁に沿う側溝において確認した瓦窯で、その大部分は調査範囲外である。第3g層上面の遺構である。燃焼室の一部と考えられ、3号窯の作業時の堆積層によって覆われていた。

堀SA301・暗渠SD302(第3a層上面遺構)(図18～21、写真2)

SA301は3号窯の南側に位置する。平瓦を小口積みにした東西方向の遺構で、その東側は調査範囲外、西側は攪乱によって失われていた。残存する長さは約4.0m、最大幅0.45mであった。瓦の小口面はSD301(後述)の側に揃え、瓦と瓦との間には約5～10cmの黄灰色シルト混り粗～中粒砂を挟んで、4段以上積み上げられていた(写真2)。**SA301**は瓦と土を交互に積み構造をもつことから、練堀と考えられる。第3a層上面に構築されているが、遺構の大半が第1層による盛土時に破壊されており、残りは悪かった。

SD302はSD301に向って排水するための暗渠で、SA301のほぼ中央部にある。その構築に当たっては、まず第3a層上面から幅約0.5m、SD301側へ傾斜した溝を掘削したのち、溝内に瓦片を詰めて、焼土・炭を含む暗褐色砂礫混りシルトで覆っていた。深さはB-B'断面(図20)で約0.2mであった。このSD302の構築後に、その上を立体交差してSA301が構築されていた。SD302の排水口は大振りの丸瓦を二枚合わせて作り、その周辺は排水によって侵食されていた。

SA301の南側には同じ第3a層上面遺構である1号窯と後述するSK301、SX301・302がある。SA301と1号窯との間の空間には、地表水の排水のための暗渠SD302が施されていることから作業スペースと考えられる。した



写真2 SA301瓦積み状況(北西から)

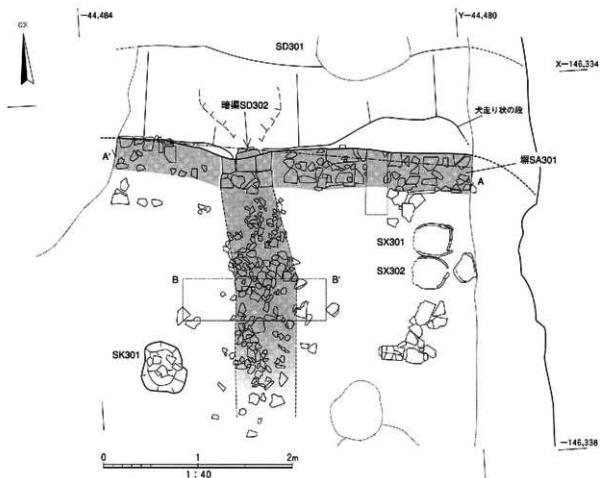


図18 棚SA301・暗渠SD302平面図

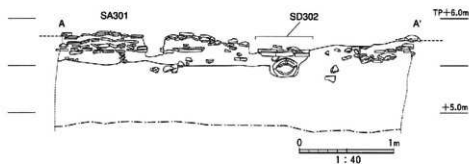


図19 棚SA301立面図

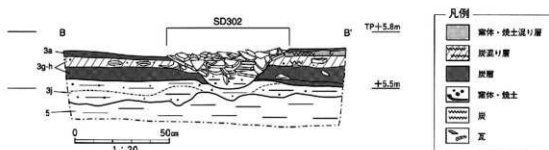


図20 暗渠SD302断面図



がって、SA301はこの作業スペースとSD301とを区画するため地境に造られた塀と推定される。

SD302から中型の丸瓦を使った巴文軒丸瓦19が、SA301の中から中心飾りが桐文で、3回転の唐草文を配す軒平瓦20が出土した。SA301の時期は、出土した軒平瓦から豊臣期と考えられる。

土壌SK301(第3a層上面遺構)(図18)

1号窯の北側、暗渠SD302の西側で確認された土壌である。南北長0.50m、東西長0.45m、残存する深さは最大0.19mで、ほぼ楕円形を呈する。埋土は主として淡緑灰色シルト質粘土で、下半部には瓦片が多く詰め込まれていた。

ビットSP301・302(第3c層上面遺構)(図8)

SP301は調査地の北西端の拡張区で確認された。ビットの北および東部分は調査範囲外であるため、その正確な大きさは不明である。底面に礎石が据えられていたが、柱痕跡は認められなかった。

SP302はSP301の南側に近接した小穴で、直径0.28m、深さ0.15mであった。埋土から瓦質の土能が出土した。

SX301・302(第3a層上面遺構)(図18)

塀SA301の南側で確認された遺構で、ともに南北長0.35m、東西長0.40m、深さ0.10～0.13m、ほぼ円形の平面形を呈する。平瓦の湾曲を利用して、掘形の東半部の壁面に4枚の瓦を組合わせたものである。排水用の施設の可能性もあるが、用途については不明である。

溝SD301(図22～24)

調査区北側で検出した東西方向の溝で、幅約2.5～2.9m、深さ約0.8～0.9mであった。SD301の南側斜面はなだらかで、SA301の北側には幅0.50m前後の犬走り状の段がみられた。SD301の北側斜面は急で一部オーバーハングし、鋤によると考えられる掘削痕が認められた。SD301が機能していたある段階で北側が掘込まれており、SD301の埋土に掘削された土が観察されなかったことを考慮すると、土取りまたは浚渫によって削られた可能性も考えられる。

埋土は上部層と下部層とに区分される。上部層は淡緑灰色炭混りシルトからなる盛土で、南側から埋戻されていった。上部層からは18世紀の塀

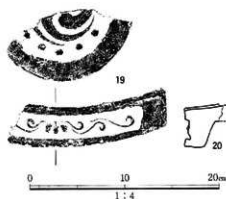


図21 SA301・SD302出土遺物

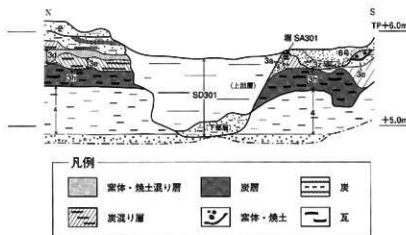


図22 SD301断面模式図

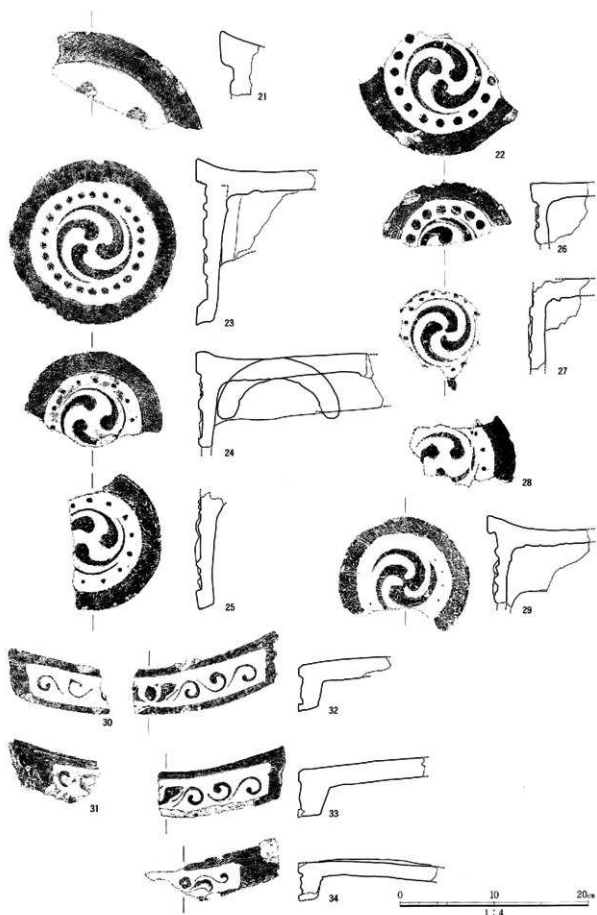


图23 SD301出土遗物(1)

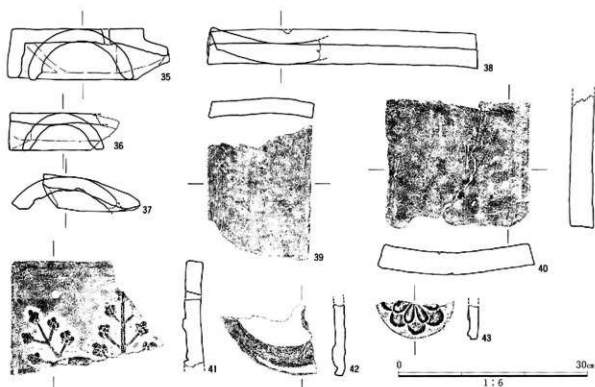


図24 SD301出土遺物(2)

摺鉢が出土した。下部層は炭や瓦を含む黒灰色ないし暗灰色シルト混り細～中粒砂からなる水漬かりの堆積物である。東壁断面で、南側に分布する第3h層が北へ落込むように傾斜することから、SD301は第4層堆積後に掘削されたと考えられた。したがって、第3h層堆積時から達磨窯が廃絶する第3z層堆積前までは溝として機能していたと推測され、18世紀に上部層によって埋戻されるまでの長期間、存在していたと考えられる。

出土した遺物の大半は下部層からで、瓦の種類は軒丸・軒平・丸・平、円形と方形の板状飾り瓦・菊丸・輪違い・鬘斗である。ほかに方形塼・三角塼と井戸瓦があり、出土した瓦塼の全重量は約186kgであった。

軒丸瓦は桐文1点21と巴文8点22～29を図示した(図23)。22はSD301の上部層、他の軒丸瓦21・23～29は下部層から出土した。21は瓦当の外縁部を磨いた瓦である。23は豊臣氏大坂城三ノ丸の武家屋敷[黒田慶一1992]と、豊臣秀吉が再興した有馬温泉御湯殿出土[神戸市教育委員会2000]のものと同范である。

丸瓦および軒丸瓦はその大きさから大型・中型・小型の3種に分類できる。大型の丸瓦は長さ45.1～47.0cm、幅21.0～22.0cm、厚さ2.4～3.4cmである。中型は長さを確定できるものはなく、29.3cm以上で、幅16.7～17.6cm、厚さ1.7～2.5cmである。小型は長さ27.0～28.0cm、幅12.9～14.0cm、厚さ1.3～2.1cmである。35は中型の隅丸瓦で、36は小型の丸瓦である。21に接合している丸瓦は大型の丸瓦で、22・23は中型、ほかの軒丸瓦はすべて小型の丸瓦に接合すると思われる。

瓦を作る時、粘土塊から粘土を切取るコビキ痕跡が丸瓦の凹面に残る。コビキ痕跡には丸瓦の長軸方向に対して斜め方向に残るコビキAと直交方向に残るコビキBがあるが、SD301から出土した軒丸

瓦のうち、コビキ痕跡のわかるものはすべてコビキBであった。

大型の丸瓦はコビキの痕跡が確定できない1点を除き、コビキBである。中型の丸瓦にはコビキAがあるが、長さ・幅のわかるものはコビキBである。小型の丸瓦で大きさのわかるものはすべてコビキBである。

SD301から出土した丸瓦のうち、コビキAとコビキBの重量は、コビキAが約10.9kg、コビキBが約62.0kgである。コビキBが全体の約85%を占めていた。

軒平瓦30～34は、中型の平瓦を使ったと考えられる。32・33の文様は、中心飾りが上向きの三葉に3回転の唐草文を配したもので、豊臣氏大坂城本丸で出土しているもの[大阪市文化財協会2002]と同文である。

平瓦も丸瓦同様、大型・中型・小型に分類でき、小型はさらに大・中・小に分かれる。大型の平瓦38は長さ43.3cm、幅16cm以上、厚さ2.7cmである。中型の平瓦は長さ15cm以上、幅29.6cm、厚さ1.7cmである。小型(大)は長さ29.3cm、幅23.3cm、厚さ1.7cm、小型(中)は長さ26.0cm、幅23.3cm、厚さ1.4cm、小型(小)は長さ25.2cm、幅19.7cm、厚さ1.8cmである。

飾り瓦は方形と円形の板状飾り瓦と、菊丸瓦が出土した。方形板状桐文飾り瓦41は五七の桐文で、釘孔があり、棟飾り瓦と思われる。円形板状巴文飾り瓦42は直径が26cmで、豊臣氏大坂城三ノ丸の武家屋敷で同文のものが出土している。菊丸瓦43は弁数が16枚の二重の菊文で、直径12cmに復元できる。

輪違い瓦37は大型の丸瓦を使って作られたもので、コビキBの痕跡が残る。端面は面取りをして、細くしている。

平瓦の側面に破面を残す破片が3点あり、鬘斗瓦と思われる。39の幅は16.5cmである。中型と思われる平瓦を、焼成前に凹面側からヘラで切って鬘斗瓦にしている。

井戸瓦は2点出土した。40の最大幅は25.6cm、厚さは3.2cmである。凹面や側面はていねいに削っているが、凸面は2点とも粗いケズリである。

塼は方形のものと三角形のものがあり、方形塼は焼成があまく、厚さは2.5cmである。後述の58(図25)と同様の八角形の中に「天」の刻印のある三角塼(図版18)はこの遺構から3点が出土している。

以上のように、SD301の出土遺物に大坂城三ノ丸で使われたものと同範・同文の瓦や大坂城本丸で出土しているものと同文の瓦があることから、SD301から出土した瓦は豊臣期に属すると考えられる。

溝SD303(第3a層上面遺構)(図8)

1号窯の東側、南焚口横付近から東方向へ延びる溝状の落込みで、幅約0.35～0.60m、深さ0.03～0.10mであった。1号窯がやや高い場所に構築されていることから排水用の溝とも考えられたが、水漬かりの堆積物は確認できなかった。

b. 第3a層出土遺物(図25)

文字が線刻された瓦50の種類は明らかではないが、釘孔のある瓦の表面に文字が3行彫られている。1行目は「寺(あるいは守)家次」、2行目は「藤兵衛」、3行目は縦に引いた線である。1行目の「家次」はよくみられる名で、名乗り名と考えられる。2行目の「藤兵衛」が個人の名前と思われる。西日本の

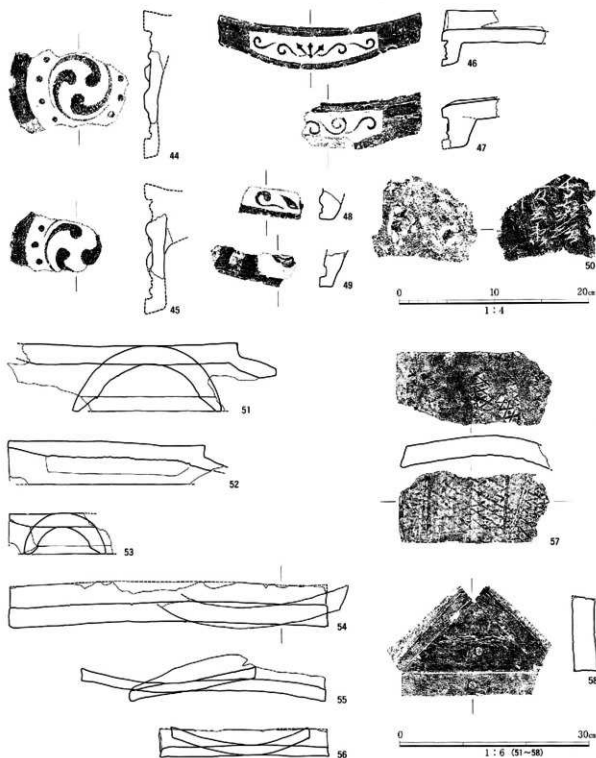


図25 第2層出土遺物(2)・第3a層出土遺物

寺院で16世紀後半～17世紀前半に作られた瓦に、「四天王寺住人」「藤原家次」の銘文の残るものがある(註)。四天王寺の瓦工人の棟梁も代々「家次」を名乗っており、「藤兵衛」も四天王寺の瓦工人の可能性もある。3行目の縦線は「年」などの文字が彫られていた可能性がある。また、この時期の大坂の瓦工人としては「寺島家」がよく知られている。寺島家は、豊臣家や徳川家などから瓦御用を命ぜられていたことが文献からわかっている。17世紀前半に調査地の南方約500m付近に寺島家の瓦土取場があっ

たことから、本瓦窯にもなんらかの関係があった可能性がある。現在のところまだ明らかではないが、四天王寺あるいは寺島家の瓦工人が本調査地で瓦を焼いていた可能性がある。

c. 第2層出土遺物(図25・26)

軒丸瓦・丸瓦はSD301と同様に、大きさから大型・中型・小型の3種に分類できる。軒丸瓦2点44・45は巴文で、中型の丸瓦を使っている。

大型の丸瓦51は長さ44cm以上、幅23.5～24.0cm、厚さ2.9～3.0cmである。中型の丸瓦52は長さ34.8cm、幅15.3～17.6cm、厚さ1.8～2.3cmである。小型の丸瓦は長さの確定できるものではなく、53は幅12.7～13.2cm、厚さ1.5～2.3cmである。出土した丸瓦のうち、コビキAとコビキBの重量は、Aが約3.2kg、Bが約22.2kg、不明が約4.8kgである。全体の約74%がコビキBであった。

軒平瓦・平瓦も丸瓦同様、大型・中型・小型に分けられ、このうちの小型はさらに大・中・小に分類できる。軒平瓦46～49は中型と小型の平瓦を使用している。46は中心飾りの先端が三角形を呈する上向きの三葉で、2回転の唐草文を配しており、小型の平瓦を使っている。

大型の平瓦54は長さ51.2cm、幅は30cm以上、厚さ3.3cmである。中型は全形のわかるものは焼け歪んだ1点55だけで、長さ31.8cm、幅27.3cm、厚さ2.1cmである。小型(大)は長さ27.0cmと28.0cm、幅21.3～22.0cm、厚さ1.4～1.6cm、小型(中)は長さ25.3～27.4cm、幅19.0～22.3cmで、そのうちの56は長さ27.4cm、幅22.3cmである。小型(小)は長さ25.8cm、幅19.2～20.0cm、厚さ1.4～1.5cmである。平瓦の小型と大型では厚さが2倍以上違っている。大型の平瓦の端面に、三角埴に押されている八角形の中に「天」の刻印が1点認められた。

雁振り瓦は2点出土しており、57は凹面に布目と格子タタキが残り、凸面に格子タタキが残る大型

の平瓦を使用している。幅は24.9cm以上、厚さ3.2cmである。

三角埴は大型58と小型があり、ともに焼成が堅緻で、厚さは2.8～4.4cmとばらつきがある。表面や側面の中央付近には、八角形の中に「天」の刻印が打たれていた。大型は1点を除いて両端面に破面が残り、ケズリ調整がみられる。両面に打刻をしているものが2点みられた。三角埴の長辺が一辺になる正方形の型に粘土を入れ、成形して、対角線上にヘラを入れ、切離

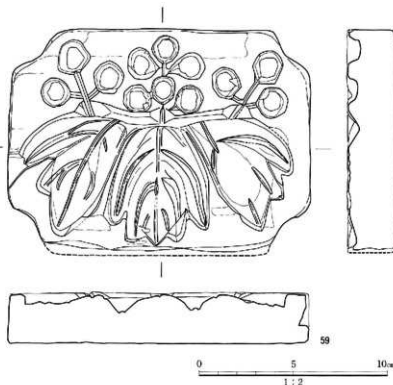


図26 第2層出土遺物(3)

して使用したのではないと思われる。小型は大型の半分の大きさで、大型を半分にした後、表面中央部に八角形の中に「天」の字を打刻している。

木製瓦⁵⁹は下端がやや失われていたが、ほぼ完形で出土した。縦11.6cm、横16.0cm、厚さ2.7cmで、ヒノキ科の樹木の柁目材が使用されていた。棟の飾り瓦を作るための範と考えられる。文様は桐文で、中央に6個、左右に3個ずつのつばみが、中央と左右に広がった細い茎の先に彫られ、三枚の葉は中央が正面形、左右はやや斜めに表現されている。つばみと葉の輪郭は深く彫込まれ、葉脈と茎は細く浅く表現されている。深く彫られたつばみの内側には、工具の跡が残っていた。範の四隅は「く」の字形に切取られていた。側面には長方形の浅い凹みが彫られており、粘土から範をはずす際に手をかけるためのものと考えられる。表面は木が痩せて木目が顕著である。一つの範から数多くの瓦を作られると、瓦の表面に木目がみられるようになるが、この範は地中に埋っていた時間が長いことから、使用によるものか、地中での長年の腐食によるものかは断定しがたい。

d. 第2層上面検出遺構(図27)

調査区内の北側において、柱穴SP201・SX201・土壇SK201・溝SD201を確認した。

柱穴SP201

2号窯の畦上で確認した柱穴で、長径0.43m、短径0.41m、深さ0.48mのはは隅丸方形を呈する。中央部に直径0.12mの柱痕跡が残っていた。

SX201

調査区の北端で確認した平面形が円形を呈する直径0.80m、深さ0.59mの遺構である。内部には底部の破損した甕が据えられており、排水用と考えられる。

土壇SK201

調査区北東端で確認した土壇である。北側は調査範囲外、東および西側は擾乱を受けていたため、大きさは不明であるが、残存する幅は0.67m、深さ0.12mであった。

溝SD201

調査区の北側で確認した東西方向の溝である。幅0.35～0.80m、深さ0.10～0.14mで

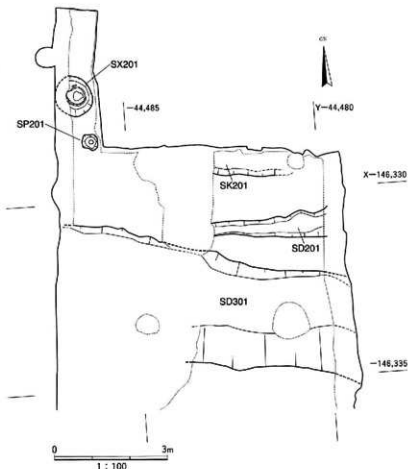


図27 第2層上面検出遺構平面図

あった。西側がやや高く、高低差は0.06mであった。

e. 第1層上面検出遺構(図28・表2～4)

調査区内において土壌SK001～043、ピットSP001～077、井戸SE001～007、SX001～007を確認した。表2に各遺構の大きさと深さを示す。

大半の遺構からはコンニャク印判のある肥前磁器が出土していることから、18世紀代に属するもの

表2 第1層上面検出遺構一覧表

遺構番号	南北長	東西長	深さ	備考
SK001	1.32	1.23	0.20	
SK002	0.82	1.53	0.30	
SK003	1.58	0.57	0.59	
SK004	0.73	0.86	0.15	
SK005	1.02	0.65	0.58	
SK006	1.45	0.43	0.32	
SK007	(1.15)	(0.75)	0.25	
SK008	1.92	(1.29)	0.30	
SK009	(2.44)	(1.90)	0.23	
SK010	1.84	(0.65)	0.51	
SK011	(2.37)	(0.68)	0.82	
SK012	1.34	0.49	0.29	
SK013	2.55	2.04	0.50	
SK014	(1.21)	1.22	0.54	
SK015	1.42	1.30	0.24	
SK016	0.52	0.42	0.28	
SK017	4.10	1.50	0.63	
SK018	1.13	0.65	0.12	
SK019	1.60	0.48	0.15	
SK020	2.21	4.20	0.41	
SK021	0.85	(1.41)	0.39	
SK022	1.31	1.05	0.39	
SK023	1.03	1.22	0.17	
SK024	1.10	(0.44)	0.83	
SK025	0.59-0.83	1.22	0.50-0.62	
SK026	(1.10)	(0.30)	0.66	
SK027	1.47	(1.04)	0.70	
SK028	(0.69)	0.74	0.37	
SK029	0.58	0.80	0.18	
SK030	(0.59)	0.74	0.23	高さみ0.15,0.14,0.18
SK031	(0.67)	0.68	0.68	
SK032	1.34	0.67	0.28	
SK033	1.49	(1.33)	0.70	
SK034	0.51	1.27	0.47	
SK035	0.69	0.72	0.21	
SK036	0.73	0.60	0.14	
SK037	0.70	0.44	0.36	
SK038	0.58	0.55	0.19	
SK039	1.12	0.87	0.30	
SK040	(0.55)	1.41	0.67	
SK041	0.49	(0.97)	0.68	
SK042	(2.27)	1.80	0.21	
SK043	(1.92)	1.61	0.70	

遺構番号	南北長	東西長	深さ	備考
SE001	1.91	1.97	1.91	
SE002	(1.84)	2.58	(0.97)	
SE003	1.29	1.29	1.91	内径:0.80,0.81
SE004	2.26	1.96	1.32	
SE005	2.36	2.32	1.54	内径:0.90,0.94
SE006	1.40	1.51	0.93	
SE007	2.73	(2.22)	2.46	内径:1.41,1.61

遺構番号	南北長	東西長	深さ	備考
SX001	2.32	0.39-0.25	0.10-0.13	
SX002	0.54	1.69	0.17	
SX003	1.33	0.34	0.32	
SX004	(1.19)	(0.91)	0.16	
SX005	1.81	1.99	0.32	
SX006	0.64	0.45	0.15	
SX007	0.79	0.44	0.23	

単位: m
(): 残存値を示す。

遺構番号	南北長	東西長	深さ	備考
SP001	(0.28)	(0.09)	0.06	
SP002	0.28	0.28	0.06	
SP003	0.24	0.25	0.05	
SP004	0.34	0.36	0.06	
SP005	0.26	0.26	0.27	
SP006	0.23	0.29	0.05	
SP007	(0.59)	0.54	0.16	
SP008	0.38	0.59	0.05	
SP009	0.35	0.64	0.09	
SP010	0.32	0.39	0.13	
SP011	0.26	0.29	0.09	
SP012	0.37	0.48	0.08	
SP013	0.20	0.41	0.27	
SP014	0.86	0.68	0.23	
SP015	(0.30)	0.83	0.32	
SP016	0.17	0.23	0.20	
SP017	(0.18)	0.18	0.07	
SP018	0.50	0.28	0.03	
SP019	(0.43)	0.36	0.07	
SP020	0.82	0.44	0.08	
SP021	0.22	0.42	0.05	
SP022	0.17	0.23	0.04	
SP023	0.23	0.28	0.03	
SP024	0.28	(0.13)	0.04	
SP025	0.43	0.38	0.08	
SP026	0.44	0.44	0.17	
SP027	0.81	0.70	0.30	高さみ:0.18,0.35,0.24
SP028	0.82	0.77	0.25	
SP029	0.73	0.61	0.34	
SP030	0.37	0.30	0.10	
SP031	0.36	0.27	0.17	
SP032	(0.25)	0.31	0.07	
SP033	0.47	0.61	0.19	
SP034	0.36	0.33	0.31	
SP035	0.79	(0.33)	0.14	
SP036	0.50	0.30	0.08	
SP037	0.50	0.41	0.35	
SP038	(0.43)	0.21	0.09	
SP039	0.39	0.29	0.12	
SP040	(0.60)	0.57	0.35	
SP041	0.33	0.37	0.11	
SP042	0.72	0.66	0.16	
SP043	(0.30)	0.60	0.13	
SP044	0.37	0.25	0.07	
SP045	0.16	0.16	0.19	
SP046	0.39	0.56	0.24	
SP047	0.39	(0.30)	0.03	
SP048	0.72	0.65	0.17	
SP049	0.30	(0.26)	0.26	
SP050	(0.49)	1.05	0.05	
SP051	(0.15)	(0.26)	0.10	
SP052	(0.28)	(0.24)	0.19	
SP053	(0.72)	(0.55)	0.12	
SP054	0.55	0.48	0.15	
SP055	(0.31)	0.59	0.13	
SP056	(0.39)	0.47	0.07	
SP057	(0.12)	(0.21)	0.38	
SP058	0.38	0.32	0.06	
SP059	0.42	0.43	0.04	
SP060	(0.30)	0.30	0.10	
SP061	(0.39)	0.29	0.11	
SP062	0.40	0.38	0.07	
SP063	0.16	0.18	0.10	
SP064	0.26	0.28	0.12	
SP065	(0.48)	0.46	0.20	
SP066	(0.32)	(0.27)	0.22	
SP067	(1.11)	(0.60)	0.09	
SP068	(0.23)	0.42	0.11	
SP069	0.19	0.17	0.14	
SP070	0.37	0.37	0.09	
SP071	0.40	(0.19)	0.54	
SP072	0.41	0.28	0.21	
SP073	(0.38)	(0.15)	0.59	
SP074	0.23	0.28	0.06	
SP075	0.25	0.23	0.09	
SP076	0.49	0.29	0.12	
SP077	0.51	0.25	0.06	

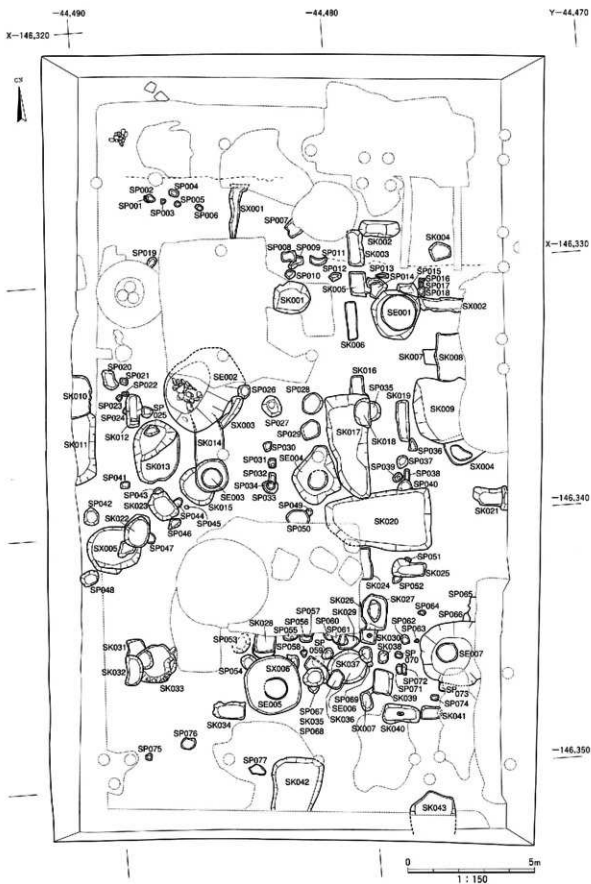


図28 第1層上面検出遺構平面図

と考えられる。

なお、第1層上面遺構からは遺物以外にも特徴的な動物遺体が出土した。その概要について、以下に記す。動物遺体としてはウシ・ウマが中心とみられる哺乳類骨とその加工品、魚骨とウロコ、貝類などが複数の遺構から出土している。

注目される遺構としては、まずウシの中手骨とみられる骨端がまとめて出土したSK013(図28の中央西)がある。SK013は蹄損など骨製品の製作過程で除去された骨端の廃棄土壌であると考えられる。16世紀末から17世紀初頭にかけて、多量の蹄損が専断的に作られていた大阪市住友銅吹所跡の資料を分析した久保和士氏は、時期によって骨細工職人の立地の外縁や開発の程度の低いところなど規制を受けていた可能性を指摘しており[久保和士1998]、本調査地の歴史的環境を検討する

表3 出土貝類種名一覧表

腹足綱 Gastropoda	
トコブシ	<i>Sulculus supertexta</i> (Lischke)
メカイアワビ	<i>Notohaliotis sieboldi</i> (Reeve)
サザエ	<i>Turbo (Batillus) cornutus</i> Solander
タマガイ科	Naticidae gen. et sp. indet.
アカニシ	<i>Rapana thomasi</i> (Crosse)
バイ	<i>Babyronia japonica</i> (Reeve)
カワニナ	<i>Semisulcospira bensoni</i> (Philippi)
二枚貝綱 Bivalvia	
サルボウ	<i>Anadara (Scapharca) subcrenata</i> (Lischke)
ハイガイ	<i>Anadara (Tegillarca) granosa bisenensis</i> Schenck et Reinhart
アカガイ	<i>Anadara (Scapharca) broughtonii</i> (Schrenck)
ハマグリ	<i>Meretrix lusoria</i> (Roeding)
カガミガイ	<i>Dosinia (Phacosoma) japonica</i> (Reeve)
オキシジミ	<i>Cyclina orientalis</i> Sowerby
シオフキ	<i>Mactra veneriformis</i> Reeve
マシジミ	<i>Corbicula (corbiculina) leana</i> Prime
ヤマトシジミ	<i>Corbicula japonica</i> Prime
シジミガイ科	Corbiculidae gen. et sp. indet.
トリガイ	<i>Fulvia mutica</i> (Reeve)

表4 SK015・034・SE003出土貝類一覧表(注1)

	ハタリ	カガミガイ	オキシジミ	トコブシ	ハイガイ	シオフキ	シジミ類	アカニシ	メカイアワビ	アサギ	トコブシ	ハイ	カワニナ
SK015	1						51			1	1?		
SK034	524	1	1	1	1	2	41	1		1		1	1
SE003	31						3		1	1			

(注1) 調査に当たっては発生地と同一産地(奈良県)を参照し、また、個体数については腹足綱が殻口数、二枚貝綱が左右殻数の多数の方を原則として採用している。

上で重要な資料であるといえよう。

一方、骨製品については、SK030(図28の南東部)から歯がなくなりヘラ状になったブラシ形(18世紀頃に主流となる)の櫛弘[久保1993]が出土しており、SK014(図28の中央西)・035(図28の中央南)、SE003(図28の中央西)などから棒状製品が出土している。

次に、SK034(図28の南西)は貝類が多く出土したことから、微細遺物の回収のため、体積にして埋土の約20%に当たる29.2kgをサンプル採取し、水洗選別を行った。その結果、哺乳類骨とその製品、イワシなどの魚骨やウロコ、スポンが検出された。

SK034を始め、貝類は18の遺構から計18種が出土しているが(表3)、まとまった量が出土したのはSK015(図28の中央西)・034、SE003の3遺構である(表4)。これら3遺構から出土した資料はいずれもハマグリおよびシジミ類を主体としている。SK034出土のハマグリは殻高平均値が25.3cm、殻長平均値が30.2cmときわめてサイズが小さく、殻表面の剥落や損傷がめだち、計測できたのは80個体にとどまる。シジミ類については表4では一括して報告しているが、ヤマトシジミとマシジミの2種が含まれているとみられる。

3) まとめ

今回見つかった9基の達磨窯から、構造上の多くの知見が得られた。特に、畦の3条から4条への変化および平面形の瓢箪型から小判型への変化に新旧関係が存在したこと、また、これまで明確ではなかった通焰溝の峠の形状が明らかとなったことがあげられる。しかし、その反面、瓦窯の上部構造が失われていたため、焚口付近の窯壁構造や、燃焼・焼成室の境界(障壁)の構造など、瓦窯本体の詳細な点については解明できなかった。これらは調査例の増加を待って検討すべき課題である。

本調査で出土した瓦の中には、大坂城三ノ丸で使われたものと同范・同文の瓦や大坂城本丸で出土しているものと同文の瓦があり、出土した陶磁器が豊臣前期の様相の強いことから、今回見つかった達磨窯は豊臣氏大坂城を建設していく過程で使われた瓦を供給した瓦窯であると考えられる。また、4・8号窯などの古い時期の瓦窯は、大坂城築城時にさかのぼる可能性もある。大坂城に係わる瓦の生産地が発見されたことは、今後の豊臣期の瓦の流通を考える上でも重要な成果といえる。

豊臣氏滅亡後の1619(元和5)年9月に大坂城再築の号令が発せられたことによって、調査地とその周辺に大坂城を再建するために京都伏見から職人や町人が移り住んだことが1699(元禄12)年の『大坂遺跡書』ほかの文献からわかっていた。今回の調査で伏見の職人や町人の住居に係わる遺構の発見が期待されたが、見つかることはできなかった。しかし、17世紀末から18世紀初め以降に第1層の厚い盛土がなされており、その後、町家になったことが明らかとなった。文献とは異なる新たな発見といえるが、17世紀初めから末に本調査地がどのような環境下にあったのか、今後の周辺地域の調査成果を含めて検討すべき新たな課題である。

以上、今回の調査では、達磨窯群と大坂城およびその城下町の開発に係わる貴重な資料を得ることができた。今後行われる調査の結果を合わせて、さらに検討していくことが重要である。

(小倉徹也・田中清美・小田木富慈美・宮本佐知子・池田研)

謝辞

発掘調査および報告書をまとめるに当たり、多くの方々にご助言、ご指導をいただいた。特に、達磨窯については吹田市立博物館の藤原孝氏に調査段階からまともにいたるまでご指導いただいた。瓦については、藤沢一夫四天王寺国際仏教大学名誉教授、渡辺武大阪城天守閣名誉館長、中村博司大阪城天守閣館長、同学芸員北川央氏・宮本裕次氏・跡部信氏、川口宏海大手前大学教授、堺市立埋蔵文化財センターの白神典之氏・横伸一郎氏・近藤康司氏・嶋谷和彦氏、小谷寛小谷城郷土館館長、同学芸員森村紀代氏にご助言をいただいた。遺跡の立地については、内田九州男愛媛大学教授にご助言をいただいた。木製瓦范については、上原真人京都大学教授、財団法人京都市埋蔵文化財研究所の中村敦氏に貴重なご意見をいただき、その樹種については独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所の光谷拓実氏に同定をしていただいた。ここに記して謝意を表する。

註) 播磨・仙正八幡神社所蔵の元斑鳩寺講堂の鬼瓦には、「弘治三年二月廿二日大工四天王寺源左衛門尉藤原家次」の銘がみられる。京都山城・京都市妙法院所蔵の妙法院大書院の鬼瓦には「慶長八年 瓦大工 四天王寺住人藤原朝臣宗左衛門 六月吉日 家次」の銘が、石山本願寺跡(大坂城跡)出土の丸瓦には「なんと之住人藤原家次」の銘がみられる。

参考文献

- 内田九州男1982、「大坂三郷の成立」：『大阪の歴史』7号、大阪市史編纂所、pp.38-63
- 大阪市文化財協会2002、「大阪城公園本丸地区の調査」：『大坂城跡』Ⅵ、pp.15-27
- 大阪城天守閣1993、「石山本願寺と寺内町」：『特別展 城下町大坂一地中より今聴く激動の歴史』
- 小倉徹也・宮本佐知子・田中清美2002、「大阪市内ではじめて発見!! 達磨窯」：大阪市文化財協会編『華火』100号
- 京都府教育委員会1953、「重要文化財妙法院大書院修理工事報告書」
- 吉良哲明1954、「原色日本貝類図鑑」、保育社
- 久保和士1993、「櫛形」：大阪市文化財協会編『華火』46号
- 1998、「住友銅吹所跡出土の動物遺体」：大阪市文化財協会編『住友銅吹所跡発掘調査報告』、pp.339-377
- 黒田慶一1992、「(2)瓦磚類」：大阪市文化財協会編『難波宮址の研究』第9号、pp.187-225
- 1995、「豊臣時代の羽瓦について」：『織豊城郭』第2号、織豊期城郭研究会、pp.187-217
- 1996、「瓦」：『豊臣秀長とその時代一城・瓦・やきもの』第2回こおりやま歴史フォーラム資料 大和郡山市教育委員会編、pp.15-31
- 神戸市教育委員会2000、『ゆの山御てんー有馬温泉・湯山遺跡発掘調査の記録ー』
- 堺市教育委員会1988、『堺堺漆都市遺跡(SKT79)発掘調査報告』
- 吹田市立博物館1997、『達磨窯一瓦匠のわざ400年ー』、平成9年度特別展図録
- 兵庫県教育委員会1997、『大釜瓦窯跡ー山陽自動車道開係埋蔵文化財調査報告XXIIIー』
- 藤原孝1998、「達磨窯の成立」：『綱干善教先生古希記念考古学論集下巻』 綱干善教先生古希記念論文集刊行会、pp.1277-1295
- 2000、「織豊期における達磨窯と瓦生産」：『織豊城郭』第7号、織豊期城郭研究会、pp.151-170
- 2001、『達磨窯の研究』、学生社
- 宮本佐知子・小倉徹也2002、「日本初!! 木製瓦范見つかる!!」：大阪市文化財協会編『華火』101号
- 森田克行1984、「屋瓦」：高槻市教育委員会編『摂津高槻城』、pp.129-142

第3節 OS02-12次調査(図版19)

1) 調査にいたる経緯と経過(図1・2)

調査地は大坂城跡の西北部に位置している。南面する高麗橋通は、大坂からの里程を測る起点であった高麗橋を経て船場につながっている。調査地は徳川期の史料に内阿替町の名が残されており、調査地の南向いには地名の由来のひとつである大坂銀座跡の顕彰碑がある。大坂銀座は慶長13(1608)年以降、産出した銀や紋り銀を京都の伏見銀座に回送したり、各地の灰吹銀を丁銀などに両替していたところで、調査地においてもその関連遺構の検出が期待された。また周辺では、豊臣氏大坂城期の大名家とされる武家屋敷跡や鑄造工房に係わる遺構や遺物が確認されていることから注目すべき地点となっている。

なお、図2で示した座標値は、大阪市総合計画局発行の大阪市地形図(1:2500)を拡大して調査地と照合したもので日本測地系による国土平面直角座標第Ⅵ系に基づく。

2) 調査の結果

i) 層序(図3)

調査地の大半が現代の攪乱で壊されており、断面や平面で大坂夏ノ陣の焼上層や惣構形成時の整地層の分布と地山層を明確に捉えることができなかったが、出土遺物の年代観などを参考に以下のように概要をまとめておく。なお、4層上面と9層下面で確認した遺構を、それぞれ1次調査面、2次調査面として表記した。

第0層：近現代の掘削埋土である。

第1層：暗褐色中～細粒砂で焼土を含む徳川期の整地層である。

第2-1層：黒褐色中～細粒砂で焼土を多く含む瓦の廃棄土壌SK03の埋土である。



図1 調査地位置図

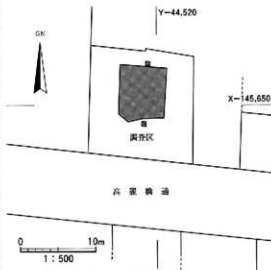


図2 調査区配置図

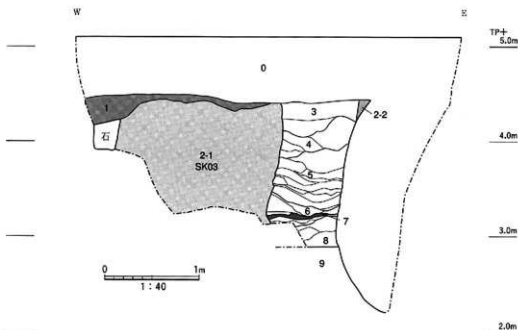


図3 北壁断面図

第2-2層：明赤褐色中～細粒砂で焼土を多く含む遺構埋土である。

第3～6層：にぶい黄褐色細～粗粒砂で徳川期の整地層や遺構の埋土で構成されている。第3層の形成過程で、西端部に石組とSK03が構築されたと考えられる。

第7層：青黒色粘土質細粒砂で炭化物を多く含む遺構埋土や黄褐～オリーブ褐色中粒砂で構成される遺構埋土であるが平面的に遺構と遺物を確認できなかった。周辺の調査ではこの層とほぼ同じ高さに大坂夏ノ陣の焼土層が広がっていることからこの層も夏ノ陣焼土層と考えられる。

第8層：暗灰黄色中粒砂を主体とする遺構埋土である。

第9層：黒色中粒砂質細粒砂で遺構の埋土であるが、平面的に遺構と遺物を確認できなかった。この遺構が形成された黄褐色粗粒砂層上面が2次調査面である。

ii) 遺構と遺物(図4～6)

ここで報告する遺構と遺物は徳川期が主体である。豊臣期以前の遺構と遺物については、今回の調査範囲内で明確に捉えることができなかった。なお、遺構の記述については、時期的に古いと考えられる遺構順に記述を行った。

SK01 上部を掘乱で壊された土壌で、掘削深度に制約があって完掘できなかった。長軸0.5m以上、短軸0.4m以上、深さ1.0m以上の円形の土壌である。出土遺物は土師器甕・皿、産地不明焼締陶器である。土師器甕の内面には有機質の付着物があり、便槽として使用されていたものと考えられる。

SK02 長さ0.5m以上、幅0.4m、深さ0.3mの不整形な土壌で、出土遺物は時期不明の陶磁器のみである。

埋壺 第4層上面で胴部径約0.8mの産地不明焼締陶器大甕を上下転位させてほぼ同じ径の掘形の土壌に埋めたものである。内部には0.2m大の碎石が詰められていた。

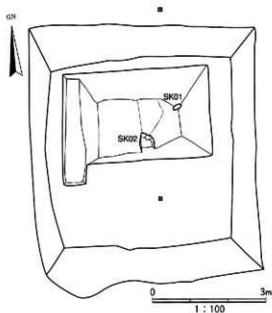


図4 2次調査面平面図

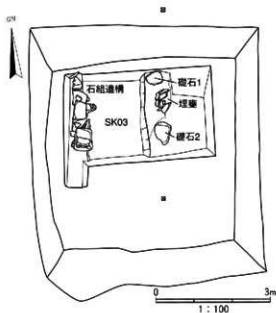


図5 1次調査面平面図

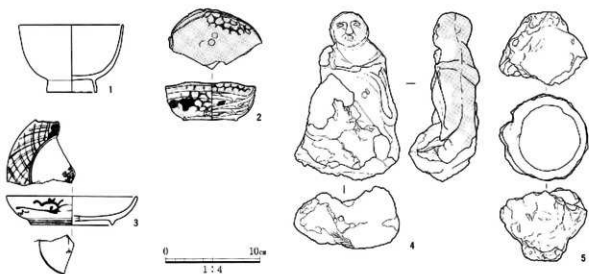


図6 出土遺物

SK03(1~3)、採集資料(4・5)

礎石 第4層上面で南北方向に並ぶ礎石である。礎石1の最大長は0.45m、礎石2の最大長は0.6mであるが、攪乱によって原位置を失っている。礎石1と関連があったものとして提示しておく。

石組遺構 西側に面をもつ南北方向の石組である。花崗岩を最大で、幅0.6m、厚さ0.5m、奥行き0.5mの方形に加工し、2段に組んだものである。平らに加工された面には、幅5cmほどの矢穴の痕跡が残されている。隙間に碎石を詰め、基礎敷きに0.3m大の自然石を含んだ埋土を使用している。石組遺構の掘形の東端部は、SK03の掘形に切られていることから、SK03より古い段階の遺構と考えられる。出土遺物は時期不明の肥前陶器碗破片のみである。この石組遺構は石組溝の一部や石組穴蔵の一部の可能性があるが、調査範囲の制約から確認できなかった。

SK03 長さ2.0m以上、幅約1.5m、深さ約2.0mの長方形の穴蔵で東側壁面には一部板を使用した痕跡が残されていた。また、西側壁面は石組遺構の掘形の東端部を掘込んで構築されている。埋土は焼土や焼け瓦で、妙知焼(1724年)による被災物を投棄したものと考えられる。出土遺物は肥前磁器白磁碗1・梅花文小皿2・網目文皿3などである。肥前磁器梅花文小皿4枚は被熱によって溶着しており、当時、同型式の皿をセットで保有していた状況がうかがわれる資料である。肥前磁器網目文皿は18世紀初頭以降にみられる五弁花のコンニャク印判を使用したものである。同じように、妙知焼による焼け瓦を廃棄した遺構は石組遺構をはさんで調査区西側壁面でも観察された。これらのことからSK03は妙知焼以前に構築された穴蔵の一部であり、妙知焼後、陥没地となった穴蔵に被災物を投棄して整地したことがうかがわれる。

調査地内で採集した遺物として西行人形と金属器生産に係わるものを取上げておく。西行人形4は、高さ18cmの大型品である。表面が被熱によって溶解した型押し貼合わせタイプの土人形である。西壁で観察された18世紀前半の焼け瓦廃棄土層と考えられる地点から採集された。5は外面が高熱を受け溶解しており、内面にも外面ほどではないが熱を受けた痕跡がある。残存部の最大長が約7.8cmある。埴塼と考えられる。

3) まとめ

今回の調査地では、期待された大坂銀座跡や武家屋敷との関連はつかめなかったものの、17世紀～18世紀初頭には屋敷地の一部であったことがわかった。SK03は当時の穴蔵で、妙知焼(1724年)で被災した瓦や陶磁器が被災後の整地の際に廃棄されたものと考えられる。陶磁器は積み重ねられた状態で被熱、溶着しており火災のすさまじさがうかがわれる。出土した遺物は18世紀代の陶磁器を中心にコンテナバット約7箱分である。

(平井和)

第4節 OS02-29次調査(図版20)

1) 調査にいたる経緯と経過(図1・2)

調査地は大坂城跡の南部に位置し、豊臣氏大坂城期に造られた大坂城惣構堀跡と考えられる空堀通から北へ約20mで、上町筋に東面している。また、前期難波宮朱雀門の南西約500mで、難波京域内における関連施設の形成を考える上で重要な地域である。地形的には上町台地の屋根部付近に位置しており、地山層の標高はTP+20.3m前後である。調査地周辺の発掘調査において、飛鳥時代から江戸時代の遺構や遺物が確認されている。特に、上町筋の東側一帯では、飛鳥時代の豪族居館を思わせる大型掘立柱建物や溝などが多数調査されており、前期難波宮の成立以前の歴史を考える上で重要な成果をあげている。

事前に行われた試掘調査において、地表下約1.0～1.1mで古代の溝が良好に残っていることが確認され、本調査を行うことになった。調査は重機によって近世から現代までの整地層や攪乱層を除去したものの、ほぼ一定の掘削深度をとったため、北東隅に残っていた古代の遺物包含層まで重機掘削が及んでしまった。重機掘削終了後、人力作業によって遺構の検出や層序の確認に努めた。

なお、図で使用した座標値は大阪市総合計画局発行(1984年)大阪市地形図(1:2500)を拡大して調査地と合成したもので、日本測地系に基づく国上平面直角座標第Ⅵ系による。

2) 調査の結果

i) 層序(図3)

各層の概要は以下のとおりである。地山である第5層上面は乾痕が顕著で、第5層上部は一部風化している。飛鳥時代の溝SD301は地山層を削込んでおり、この溝の上面を覆う第3層は出土遺物から



図1 調査地位置図

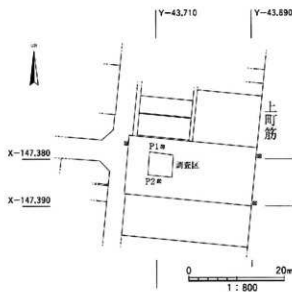


図2 調査区配置図

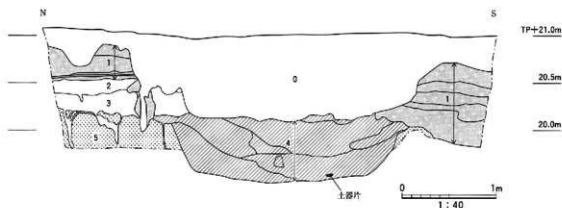


図3 東壁断面図

の時期決定ができないものの古代の整地層の可能性がある。

第0層：近現代の盛土である。

第1層：黄褐色中～粗粒砂を主体とする徳川期の整地層で、北端部と南端部で整地状況が異なることから、調査地内に東西方向の屋敷境があった可能性がある。SK01は1層上面から掘込まれており、図5で示した近世の遺物は、この遺構周辺を掘削中に採集した。

第2層：灰黄褐色シルト質細粒砂で、中世から近世の作土の可能性がある。

第3層：明褐色シルト～粘土質細粒砂で、層厚は約30cmである。出土遺物はない。自然堆積を示す漸移的なラミナの形成および、風化や生物擾乱による漸移的土壌化は認められず、地山である中位段丘構成層上部の風化帯の土壌化した地層に由来すること、またSD301の埋土に近似することから古代の整地層と考えられる。

第4層：橙色シルト質粘土～灰白色粘土を主体とするSD301の埋土である。飛鳥時代の土器が出土した。この埋土には水成堆積を示すラミナが認められず、地山の風化帯ないしは生物擾乱による土壌化した地層に由来する粘土層によってはほぼ一時期に埋められたと考えられる。

第5層：小礫を含む橙色細～中粒砂で、地山(洪積層)である。

ii) 遺構と遺物

a. 第5層上面検出の遺構と遺物(図4・5)

SD301 幅約2.5m、深さ0.7mの東西に延びる溝で、方位はほぼN70°Wを示している。溝底部の標高はほぼ一定で、一方への傾斜は認められなかった。出土遺物は、天井部にヘラ記号のある須恵器杯蓋1(難波Ⅲ古段階)、須恵器杯身2(難波Ⅲ古段階)、須恵器壺3・4のほ

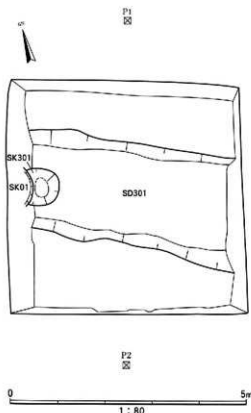


図4 遺構平面図

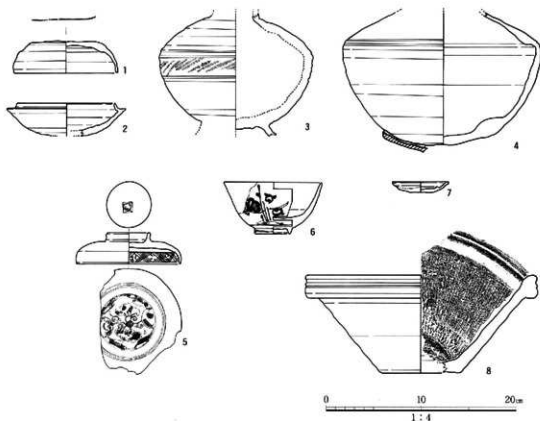


図5 出土遺物
SD301(1～4)、近世の遺物(5～8)

か、土師器甕・杯破片などが出土していることから、この溝が埋められた時期は7世紀前半と考えられる[佐藤隆2000]。

b. 第4層上面検出の遺構と遺物(図4)

SK301 直径約0.8m、深さ0.2mの円形をした土壌で、遺構としての輪郭はやや不明瞭である。埋土はSD301と類似した橙色シルト質粘土で、SD301の一部である可能性がある。遺物は須恵器破片、土師器杯破片などが出土した。

SK01 長軸0.8m以上、短軸0.2m以上、深さ0.9mの形状不明の土壌である。西壁際で平面の一部と断面によって確認した。出土遺物は肥前磁器破片・備前焼摺鉢などである。

SK01周辺で採集した近世の遺物はおおむね18世紀後葉のもので、肥前磁器青磁染付碗蓋5・肥前磁器染付碗6、軟質施釉陶器灯明皿7、産地不明焼締陶器摺鉢8である(図5)。

3) まとめ

今回出土した遺物は飛鳥～江戸時代の土器・陶磁器・瓦で、コンテナバット約2箱分である。出土遺物からSD301は飛鳥時代に造られた溝で、難波宮成立以前に埋められたものであることがわかった。周辺部の調査では、おおむね7世紀前葉と中葉の2時期の建物や溝が確認されており、7世紀前葉に比定される建物の中には大型掘立柱建物などが確認されている。これらは、豪族の居館やそれに付随する施設と考えられ、今回検出した溝もこのような調査成果との関連性を検討する上で重要である。

また、飛鳥時代の溝の上層では古代の整地層と考えられる地層が検出され、難波宮建設前後に居住域が整備された範囲や状況について検討する機会が得られた意義は大きい。

徳川期の遺構や遺物については18世紀後葉までの資料が主で、豊臣期の遺構や遺物については確認できなかった。中～近世の遺跡の形成過程についての成果も今後期待される。

(平井和)

引用・参考文献

- 佐藤隆2000、「古代難波地域の土器様相とその史的背景」：大阪市文化財協会編『難波宮址の研究』第十一、pp.253～265
- 九州近世陶磁学会2000、『九州陶磁の編年』

第Ⅸ章 大坂城下町跡の調査

第1節 OJ02-2次調査(図版21)

1) 調査にいたる経緯と経過(図1・2)

調査地は大坂城下町跡の南部に位置し、北面する本町通は豊臣秀吉による船場の開発以降、大坂城と城下町を結ぶ東西のメインストリートの一つとしての役割を担っていた(図1・2)。江戸時代の史料によると、本町の特長として織機関連業種や古着問屋が軒を連ねていたことが記されている。地形的には上町台地の西側に広がる海浜性の砂堆上に位置しており、豊臣期の生活面の標高はTP+1.5m前後で、上町台地上の生活面との比高は10m以上ある。調査地周辺の発掘調査において、弥生時代から室町時代の遺構や遺物が確認されており、砂堆上に形成される遺跡のあり方を考える上で重要な成果をあげている。また、近世の遺構や遺物からは、町割や町屋の変遷および陶磁器の流通などが明らかにされつつある。

事前に行われた試掘調査において、地表下約2.3mで豊臣期の遺構面を確認したことから本調査を行うこととなった。調査は重機によって表土層と攪乱層を除去しながら遺構面を検出し、以下人力作業によって遺構の検出や層序の確認に努めた。

なお、図2で示した座標値は大阪市総合計画局発行(1984年)の大阪市地形図(1:2500)を拡大して調査地と合成したもので、日本測地系に基づく国土平面直角座標第Ⅵ系のものである。

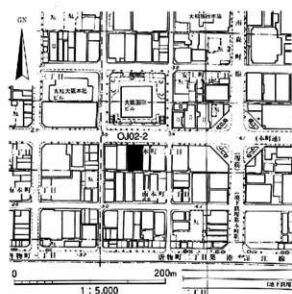


図1 調査地位概図

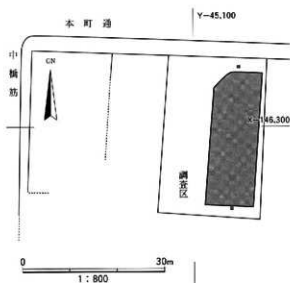


図2 調査区配置図

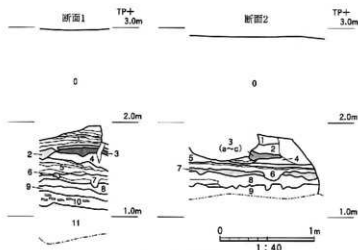


図3 東壁断面図

2) 調査の結果

i) 層序(図3)

調査地は現代の擾乱が多く、断面や平面において船場が焼けた大坂冬ノ陣の焼土層や、船場城下町造成時の整地層の分布と地山層を明確に捉えることができなかった。北半部では、断面での層序観察がcaろうじて可能だった範囲を断面1・断面2として示した(図3)。しかし、各層ごとの面的な調査にはいたらず、地山層上面で古代から近

世の遺構を検出した。一方、南半部では近世の遺構が重複して断面の層序観察ができず、断面2の5層(1次調査面)・6層上面(2次調査面)・9層上面(地山相当層上面)に対比できる各調査面において、複数の時期にわたる遺構を検出した。各遺構面の時期については、出土遺物の年代観などを参考に以下のように概要をまとめておく。

第5層：徳川期(18世紀代)

第6層上面：豊臣期～徳川期(17世紀初頭～18世紀中葉)

第9層上面：弥生時代後期～豊臣期(16世紀後葉～17世紀前葉)

地山層として記述した層の上部は、弥生土器や土師器・須恵器の細片を含んでおり、古代以降に人為的に擾乱された部分と考えられるが明確に細分できなかった。図3で示した層序は、遺構や擾乱が少ない北半部の東壁を断面1と断面2に分けて示したものである。調査地西方に位置するOJ99-2次調査地では、TP+0.3mで地山層となりTP+1.0mまでに中世整地層および近世整地層が形成されている。近世の整地層中に大坂冬ノ陣の焼土層は確認されず、1724年の妙知焼の焼土層がTP+1.0mで確認されていることなどを参考に、断面1の第2・3層(焼土層)および、断面2の第3層(焼土と炭層)・第7層(焼土層)の形成時期について検討する必要がある。

〈断面1〉

第0層：近現代の盛土である。

第1層：にぶい黄橙色細粒砂質シルト～オリーブ褐色細～中粒砂などを主体とする複数の薄層からなる徳川期の整地層である。

第2層：極暗赤褐色細～中粒砂で焼土層である。

第3層：暗赤褐色細～中粒砂で細礫を含む焼土層である。

第4層：褐色細～中粒砂で細礫を含む層である。

第5層：オリーブ褐色シルト質細粒砂である。

第6層：黄褐色粘土質シルトである。

第7層：褐色細～中粒砂である。

第8層：黄褐色細粒砂である。

第9層：黄褐色細～中粒砂で、上面は貼床状に固く締まっている。

第10層：褐色細～中粒砂で、大～巨礫・瓦片を含む層である。

第11層：黄褐色細～極細粒砂で、地山層である。断面2の9層に類似している。

〈断面2〉

第0層：近現代の盛土である。

第1層：暗褐色細～中粒砂である。

第2層：にぶい黄色細粒砂である。

第3a層：暗赤褐色細粒砂で、焼土層である。

第3b層：黒褐色シルト質細粒砂で、炭層である。

第3c層：オリーブ褐色シルト質細粒砂で、炭層である。

第4層：オリーブ褐色細～中粒砂である。第1層～本層は1つの遺構の埋土の可能性はある。

第5層：褐色細～中粒砂である。18世紀中頃の整地層である。

第6層：暗褐～褐色の細～中粒砂である。

第7層：にぶい褐色細～中粒砂で、大礫を含む。妙知焼の焼土層である。

第8層：黄褐色細～中粒砂で、大礫を含む。暗褐色細～中粒砂を含む。

第9層：にぶい黄褐色細粒砂で、大礫を含む。地山層である。断面1の第11層に類似している。

ii) 遺構と遺物

a. 地山層検出の遺構と遺物

①弥生時代後期(図4・7)

表面にタタキメのある畿内第V様式の弥生土器甕底部1で、地山層上部の人為的に擾乱された層から出土した。この時期の遺構は確認できなかった。

②古代(図4)

ここで古代と判断した遺構は、黒褐～灰黄褐色細砂を主体とした埋土(埋土1)の土壌で、いずれも須恵器・土師器細片を含むものである。出土遺物が細片のため、詳細な時期は特定できなかった。

SK301 長軸1.0m、短軸0.5m以上、深さ0.54mの楕円形をした土壌である。

SK302 長軸1.4m以上、短軸1.1m、深さ0.2mの不定形な土壌である。

SK303 長軸2.5m以上、短軸0.5m以上、深さ0.25mの不定形な土壌である。

SK304 長軸1.0m以上、短軸0.1m以上、深さ0.46mの不定形な土壌である。

SK305 長軸0.5m、短軸0.2m、深さ0.33mの円形土壌である。

③豊臣期(図4)

ここで豊臣期と判断した遺構は、黄褐色のシルト偽礫を含むにぶい黄褐色細粒砂を主体とした埋土(埋土2)の遺構で、豊臣期の瓦片や土師器羽釜片を含む一方、細片ながら土師器・須恵器を含んでいる。

SP201・202 直径0.35～0.45m、深さ0.16～0.18mの柱穴で、底部に10～20cm大の根石が置かれ

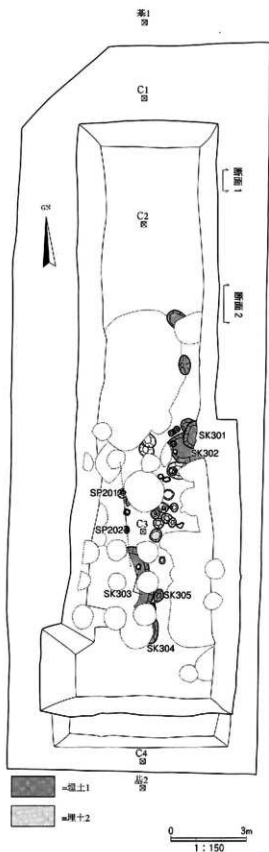


図4 地山層上面検出遺構平面図

ていた。根石上面のレベルと埋土から判断してSP201とSP202は南北方向の柱列の一部としたが、ほかの根石をもつ柱穴との関連性につかめず、建物の復元にはいかなかった。出土遺物は須恵器・土師器細片である。

b. 南半部第6層上面検出の遺構と遺物(図5・7)

南半部第6層上面では、出土遺物からおもに17世紀前半～18世紀前半の遺構を検出した。SK201～205は肥前磁器を含まず、豊臣後期から徳川期前半(17世紀前葉)に形成された遺構で、SK206～209は、徳川期(17世紀中葉)に形成された遺構である。

SK201 長軸0.8m以上、短軸0.7m以上、深さ0.55mの不定形な土壌で半分以上が東側断面にかかっている。青花碗・瀬戸美濃焼志野・備前焼などの破片と土師器皿4・5が出土した。

SK202 長軸1.0m、短軸0.4m、深さ0.51mの楕円形をした土壌である。青花碗10・唐津焼皿・備前焼播鉢・土師器皿7・8などが出土した。

SK203 長軸0.5m以上、短軸0.3m以上、深さ0.34mのほぼ円形と考えられる土壌で18世紀前半の肥前磁器を含む土壌に切られる。ロクロ成形された土師器皿3のほか土師器・須恵器の細片が出土した。

SK204 長軸1.0m以上、短軸0.4m以上、深さ0.46mの円形と考えられる土壌で、東半部が17世紀代の陶磁器を含む土壌SK206に切られている。土師器皿6・瀬戸美濃焼志野向付9・青花碗などの破片が出土した。

SK205 長軸0.7m以上、短軸0.6m以上、深さ0.45mの形状不明な土壌で、大半が工事基礎や東側断面にかかっている。青花碗11・皿、唐津焼砂目皿、土師器羽釜・火入などが出土した。

SK206 長辺1.9m以上、短辺0.9m以上、深さ0.59mの長方形を呈する土壌で、数種類の肥前磁器小杯15～19が5点以上、口径10cmの同型式土師器皿が6点以上まとまって出土した。13は口径2.3cm、高さ2.7cmの手づくねのミニチュア土器である。14は口径8.6cm、高

さ4.8cmの手づくねの碗形土器である。ほかには17世紀中頃の肥前磁器碗・備前焼壺・信楽焼播鉢などが出土している。

SK207 長軸0.9m以上、短軸0.6m以上、深さ0.7mの楕円形と考えられる土壌で、北半部を17世紀中頃の土壌SK206により切られている。17世紀中頃の肥前磁器碗22・17世紀中頃の唐津焼皿(二彩唐津)25・土師器焙烙などが出土した。

SK208 長軸1.9m以上、短軸1.8m以上、深さ0.35mの不定形な土壌で、西半部が西壁断面にかかっている。17世紀中頃の唐津焼砂目皿12・21、肥前磁器碗などが出土した。12は佐賀県小溝中窯跡や白木原1号窯跡出土の溝縁皿に類似しており、九州陶磁の編年Ⅱ期[九州近世陶磁学会2000]に相当するものである。

SK209 長軸2.0m以上、短軸1.2m以上、深さ0.4mの楕円形と考えられる土壌で、北半部を17世紀中頃の遺構に切られている。17世紀中頃の唐津焼砂目皿・肥前磁器碗・瀬戸美濃焼志野向付・焼塩壺20などが出土した。

埋壺 土師器大型甕の口縁部と底部を転位して埋めたもので、用途は不明である。

c. 第5層検出の遺構と遺物(図6・7)

SK101 長辺1.0m、短辺0.8m以上、深さ0.63mの方形土壌である。18世紀代の肥前磁器碗・唐津焼碗・土師器灯明皿24・同焙烙・産地不明型物容器28・土製玩具29などが出土した。24は精製の土師器皿で内面に若松文を描いた痕跡が残されている。28は蓮弁を模した精巧なもので鉄軸が施されている。性質不明の内容物が充填していた。29は俵を背負った馬で、左後足付け根部分に穿孔がある。

d. その他の遺物(図7)

2は地山層上部から出土した中国青磁碗で、時期は不明である。23は南半部東側断面の精査中に出土した李朝白磁鉢で、豊臣期に輸入された可能性がある(註1)。26は攪乱層出土の備前焼掛け花生けで、意匠が珍

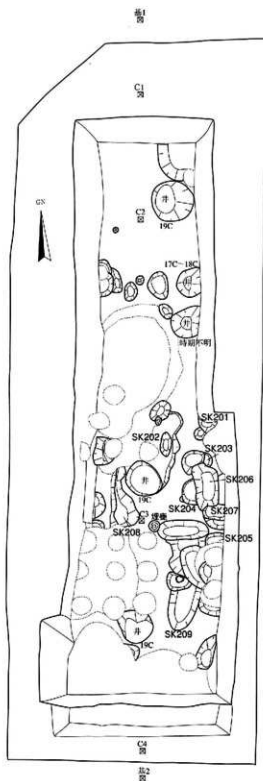


図5 第6層上面検出遺構平面図

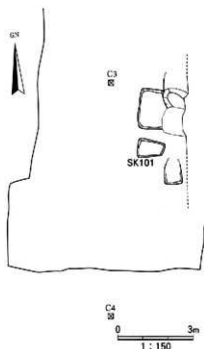


図6 第5層層内検出遺構平面図

しい作品である。16世紀末から17世紀初頭のいわゆる茶陶盛行期のものと考えられる。

3) まとめ

今回出土した遺物は弥生～江戸時代の土器や陶磁器で、コンテナバット約21箱分である。調査地では、攪乱された範囲が広く南半部と北半部の遺構のつながりを捉えることが十分にできなかった。出土した遺物から弥生時代後期以降における人の活動がうかがわれ、古代以降から土壌などが明瞭に残されるようになる。中世と断定できる遺構はなかったが、瓦器片が出土したことから、人の活動がうかがわれる。豊臣秀吉による船場城下町造成以降に、町屋としての整備がすすんだ船場の状況をうかがえる遺構は第6層上面の土壌群であるが、予想外に豊臣期の遺構や遺物は少なく、大半が17世紀中葉以降の廃棄土壌であった。南半部には井戸も見つかってい

るが、ゴミ穴が繰り返し掘られる町屋の裏庭に当たると考えられる。近隣地では、今回の調査では希薄であった中世以前の遺構が確認されており、今後の調査における中世の遺構の検出が望まれる。また、本町通以南での大坂冬ノ陣に伴う焼土層の分布状況についても検討が必要であろう。

(平井和)

(註1) 韓国全羅南道松廣寺聖寶博物館学芸研究室長韓盛旭氏より、慶尚南道山淸産の白磁に類似しているとのご教示を賜った。

引用・参考文献

九州近世陶磁学会2000、『九州陶磁の編年』

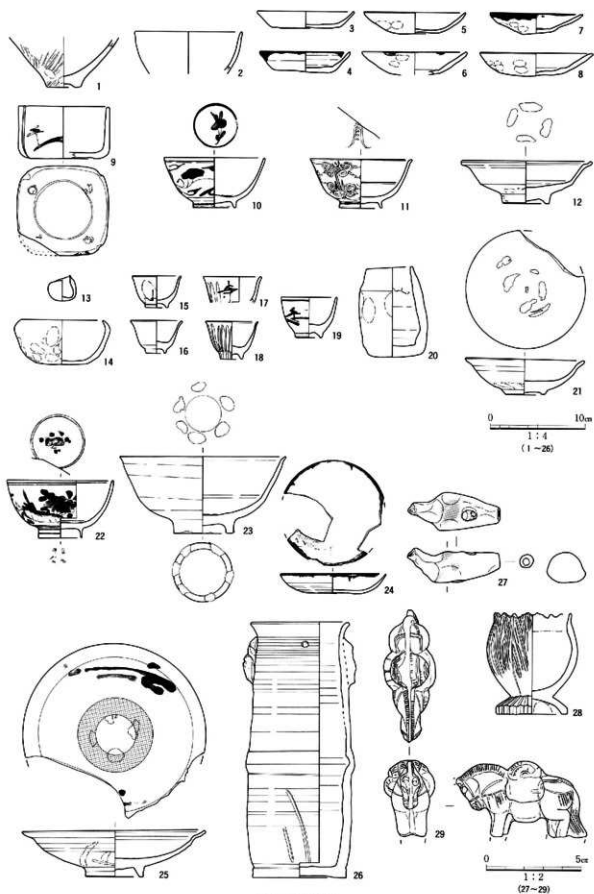


図7 出土遺物

地山相堂層(1・2)、SK201(4・5)、SK202(7・8・10)、SK203(3)、SK204(6・9)、SK205(11)、SK206(13~19)、SK207(22・25)、SK208(12・21)、SK209(20)、SK101(24・28・29)、その他(23・26・27)

第2節 OJ02-3 次調査(図版22～24)

1) 調査にいたる経緯と経過(図1・2)

調査地は大坂城下町跡の中央部に位置し、瓦町通から伏見町通にかけての発掘調査では豊臣秀吉による船場の開発以降の遺構や遺物が多数発見されており、当時の歴史を具体的に明らかにする上で重要な地域となっている(図1・2)。江戸時代の史料によると、瓦町1丁目の特色として肥前・紀伊・関東などの諸藩の御用問や問屋が軒を連ね、豪商炭屋善五郎が居宅していたことが記されている(註1)。

事前に行われた試掘調査において、地表下約2.4mで大坂冬ノ陣(1614年)の焼土層が良好に残っていることを確認したことから本調査を行うこととなった。調査は重機によって大坂冬ノ陣の焼土層上面および石組溝を検出した徳川期の整地層上面まで慎重に除去し、以下人力作業によって遺構の検出や層序の確認に努めた。

なお、図で使用した座標値は世界測地系による国土平面直角座標第Ⅵ系に基づいている。

2) 調査の結果

i) 層序(図3・4)

各層の概要は以下のとおりである。ただし、第3層のうち第3-1層は第3-2層に比べて焼土の含有がやや少なく、前者が焼土を含んだ整地層で、後者は大坂冬ノ陣の焼土層と考えられる。第5層の分布範囲は調査区南端部に限られていた。北半部では約14cm、南半部では約30cmの厚さで部分的に堆積していたところがあった。また、第6-1層の上部では一部で土師器や須恵器の細片が含まれており、古代以降に人為的に擾乱された地層と考えられたが層理面が不明瞭で分層できなかった。

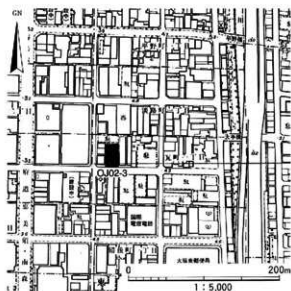


図1 調査地位置図

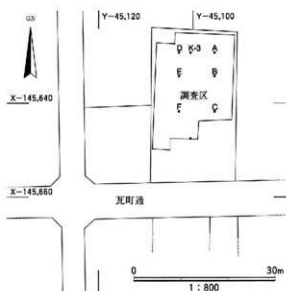


図2 調査区配置図

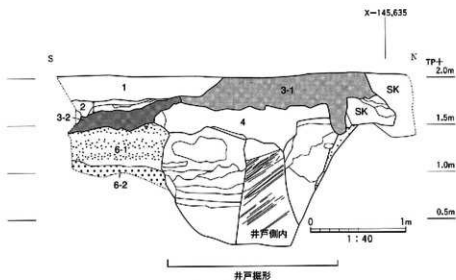


図3 西壁断面図

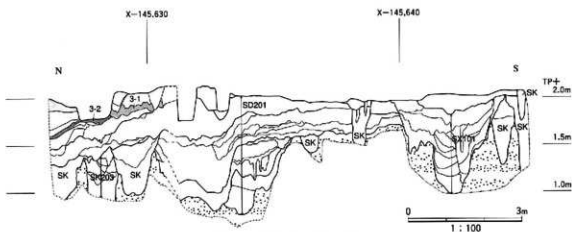


図4 中央南北部東壁断面図

第0層：近世～近現代の盛土である。

第1層：にぶい黄褐色粗粒砂で、徳川期の整地層である。

第2層：灰黄褐色シルト質細粒砂である。

第3-1層：褐色中粒砂で細礫・焼土・炭を含む整地層である。

第3-2層：暗赤褐色中粒砂で細礫・焼土・炭を多く含む大坂冬ノ陣の焼土層である。

第4層：オリーブ褐色シルト質細粒砂である。

第5層：黒褐色細粒砂で、古代の堆積層である。

第6-1層：明黄褐色極細粒砂～細粒砂で、海浜性砂堆積成層である。

第6-2層：明黄褐色細粒砂～中礫で、海浜性砂堆積成層である。

ii) 遺構と遺物

a. 第5層下面検出の遺構と遺物(図5・6)

第5層が分布したのは調査地の南端部で約20m²程の範囲であったが、第6層上面において、黒褐色

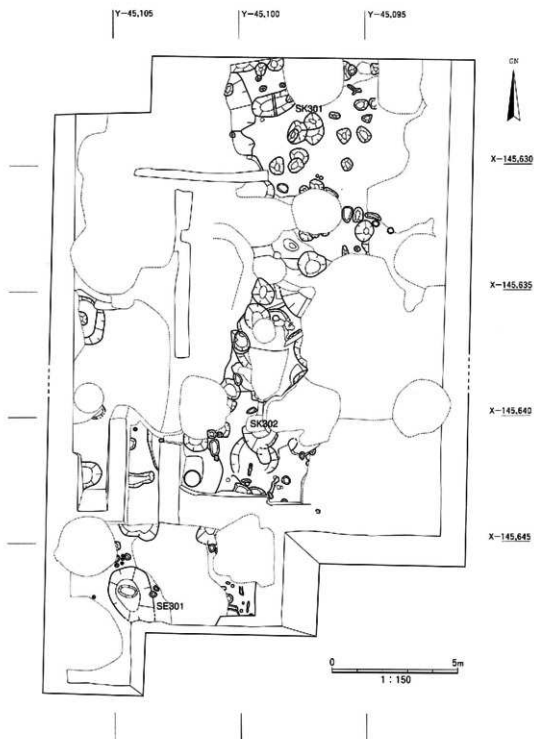


図5 第6層上面検出遺構平面図

細粒砂を主体とする第5層下面の遺構が調査地のほぼ全域で検出された。図5で示した遺構は古代～中世の時期が考えられるものであるが、ここではこれらのうち古代のおもな遺構と遺物について述べる。

SK301 長軸1.0m、短軸0.7m、深さ0.26mの楕円形をした土壇で、埋土は黒褐色細粒砂である。遺物は須恵器杯B4、土師器杯などが出土した。

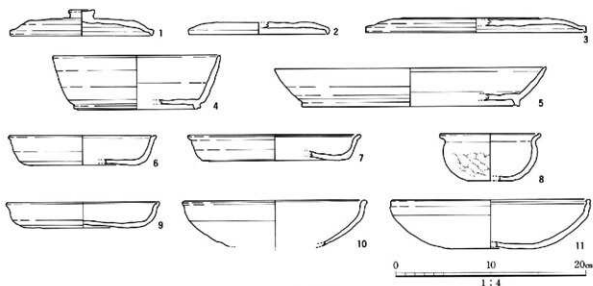


図6 出土遺物

SK301(4)、SK302(9・10)、SE301(1～3・5～8・11)

SK302 長軸1.0m以上、短軸0.5m、深さ0.45mの不定形な土壌で、埋土は黒褐色細粒砂とにぶい褐色細粒砂の互層である。遺物は土師器杯A9・碗X10、須恵器杯身などが出土した。難波V古～新段階(8世紀前～後葉)に相当する遺構である[佐藤隆2000]。

SE301 長軸2.2m以上、短軸1.6m、深さ0.99mの楕円形の掘形をもつ井戸である。底面には長軸0.8m、短軸0.5mの楕円形の凹みがあった。水溜の痕跡であろう。掘形の埋土からは多量の土師器・須恵器が出土した。1・2は須恵器杯B蓋、3は須恵器皿B蓋、5は須恵器皿B、8は土師器壺B、6・7は土師器杯A、11は土師器碗で、おおむね難波V中段階(8世紀後葉)に相当する[佐藤隆2000]。この時期の井戸は大坂城下町跡の範囲内では貴重な資料である。

b. 第4層上面検出の遺構と遺物(図4・7・8)

第4層が分布していた範囲は南半部で、中世から豊臣期の遺構と遺物を検出した。ここでは第4層上面および、第4層内検出遺構と遺物のおもなものについて述べる。第4層上面は大坂冬ノ陣の焼土直下に当り、南半部では赤く焼けた礎石や炭化した床面が残っていた。

SD201 長さ9m以上、幅約2.8m、深さ約0.7mの南北方向に延びる溝で、南から北へ傾斜している。埋土は褐～オリブ褐色の細～中粒砂である。最初に造られた溝が埋って以降、同じ方向で何度も造り直されていたことがうかがえる(図4)。この過程で幅の変化があったと思われるが、現状では最新段階の溝の規模を示した。この溝の埋土には焼土が含まれず、大坂冬ノ陣までにはその機能を失い整地された遺構である。今回は溝としての機能が休止していた時期に構築された土壌SK203から出土した遺物を、溝の時期を検討するための一つの手がかりとした。この土壌から16世紀末～17世紀初頭の唐津焼が出土していることから、豊臣期段階に埋められた遺構である。

SD202 長さ0.5m以上、幅約0.3m、深さ約0.8mの南北方向に延びる溝で、南から北へ傾斜している。埋土は褐色中粒砂(焼土)で、内面は黒く炭化していた。

SX201 長軸9m以上、短軸約5m、深さ約1.08mの大きな不定形の土壌で、埋土は明黄褐色の極

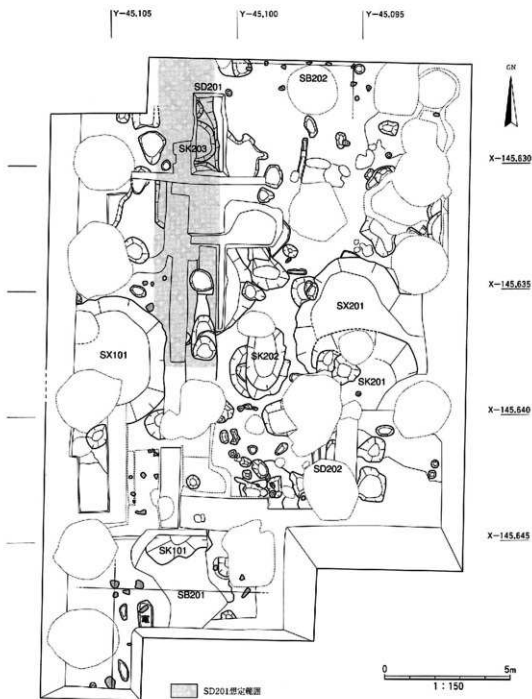


図7 第3～4層上面および同層内検出遺構平面図

粗粒砂層とオリブ褐色細～中粒砂である。遺物は土師器皿19、瀬戸美濃焼灰釉折縁ソギ皿20・志野菊皿21・22、志野向付23・24・26、青花皿25、大型の犬形土製品27などが出土している。

SK201 長軸4.2m以上、短軸3.0m以上、深さ0.2mの楕円形をした土壇で、SX201の底部で検出した遺構である。埋土は暗赤褐色細～中粒砂(焼土)で多くの遺物が出土した。遺物は唐津焼皿28、瀬戸美濃焼天目碗29、中国白磁端反皿30・輪花皿31などが出土している。そのほか、鋳造関係遺物が出土していることから、埋土の成因は鋳造に関する焼土や排土であったと考えられる。

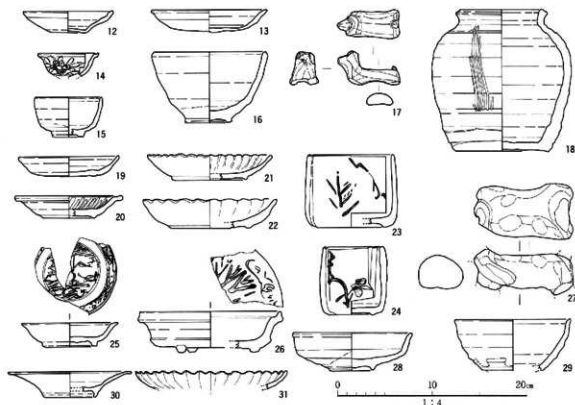


図8 出土遺物

SK203(12~18)、SX201(19~27)、SK201(28~31)

SK202 長軸2.5m以上、短軸1.5m以上、深さ0.54mの楕円形をした土壇である。埋土は黄褐～明黄褐色粗粒砂で、底部から草食哺乳類の頭部骨が出土した。

SK203 長軸約1.0m、短軸約0.8m、深さ約0.3mの楕円形をした土壇で、SD201上で検出したものである。埋土はオリブ褐色細～中粒砂である。遺物は土師器皿12・13、唐津焼小杯15・碗16、備前焼小壺18、中国赤絵小杯14、犬形土製品17などが出土した。16世紀末～17世紀初頭の時期が考えられる。

SB201 東西5m以上、南北4m以上の礎石建物で、推定される柱間は約1mである。礎石として使用された石は、長軸約30～50cmの大きなものである。

SB202 東西4m以上、南北1m以上の礎石建物で、推定される柱間は約0.8～1mである。礎石として使用された石は、長軸約20cm大のものである。

竈 長軸0.6m以上、短軸0.5m以上、深さ0.34mの楕円形をした竈で上部は削平されて失われている。

b. 第3層上面および下面検出の遺構と遺物(図7・10)

大坂冬ノ陣の焼土層を含む整地層を埋土とする遺構である。

SK101 長軸約2.4m、短軸約0.9m、深さ約1.17mの不定形な土壇で、埋土は焼け瓦を多量に含む褐色中粒砂(焼土)である。遺物は瀬戸美濃焼志野丸皿32・天目碗34、唐津焼皿33・輪花深鉢36、中国製色絵皿35、産地不明筒形向付37などが出土した。

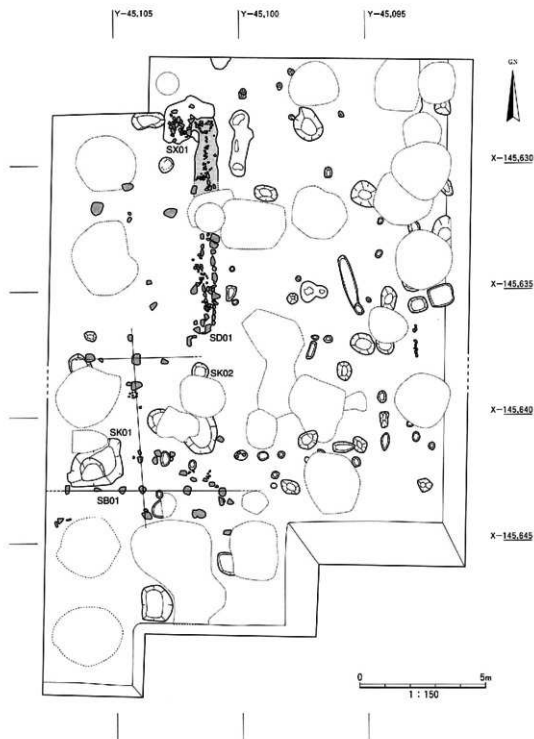


図9 第1層～2層上面検出遺構平面図

SX101 直径約5m、深さは1.06mのほぼ円形をした規模の大きな土坑で、埋土は褐色中粒砂(焼土)とにぶい黄褐色細～中粒砂などの互層である。遺物は土師器皿38～41・焙烙46、唐津焼碗42・43、中国製青磁皿44、瀬戸美濃焼志野織部丸皿45・鉄釉播鉢47などが出土した。

c. 第2層上面検出の遺構と遺物(図9・10)

SK01 長軸約2.4m、短軸約0.9m、深さ約0.35mの不定形な土坑で、埋土は灰白色中粒砂である。遺構の東辺から南辺にかけて20～30cm大の石と塚が並べられていた。遺物は肥前磁器白磁碗54・草

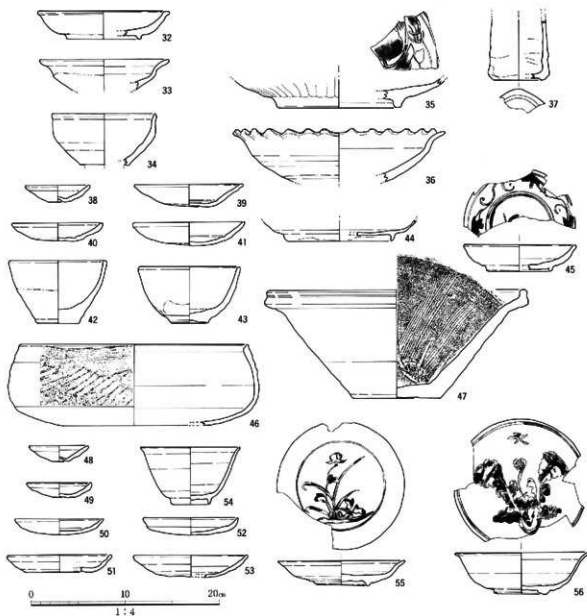


図10 出土遺物

SK101(32~37)、SX101(38~47)、SK01(54・55)、SK02(48~50・56)、SD01(51~53)

花文皿55などが出土した。肥前磁器の編年観から17世紀中頃の時期が考えられる。

SK02 直径約0.5m以上、深さ約0.24mのほぼ円形をした土壇で、内部には桶杵の痕跡が残っていた。埋土にはぶい黄色細～中粒砂および赤褐色小礫(焼礫)で、便槽の可能性がある遺構である。遺物は土師器皿48~50、青花皿56などが出土した。

SB01 東西6m以上、南北6m以上の礎石建物で、推定される柱間は約0.8~1.8mである。礎石として使用された石は、長軸約30~50cmの大きなものである。

d. 第1層上面検出の遺構と遺物(図9・10)

SD01 長さ6m以上、幅0.3m、深さ約0.4mの南北方向に延びる溝で、南から北へ傾斜している。溝の両側は20~40cm大の石を2段に積んでおり、明確な境界をもたずSX01につながっている。遺

物は土師器Ⅲ51～53などが出土した。

SX01 長さ約3m、幅約0.9m、深さ約0.1mの南北方向に延びる溝状の遺構で、北端部で西方にL字状に曲がっている。埋土は1～5cm大の中礫で埋められていた。

3) まとめ

今回出土した遺物は弥生～江戸時代の上器・陶磁器・瓦・銭・金属器・鋳造関係遺物で、コンテナバット約43箱分である。奈良時代には井戸が造られていたことなどから、居住域であった可能性の高いことがわかった。今後類例の増えることが期待される。豊臣期から徳川期の遺構や遺物では、溝や大型土塙・礎石建物など当時の町割や町屋の形成について新たな資料を提示することができた。徳川期の遺構や遺物については17世紀中葉までの資料にとどまったものの、大坂冬ノ陣以降の復興の過程を検討する上で貴重な資料を得ることができた。以上のように、古代から近世にいたる多数の遺構や遺物を検出したものの、豊臣期における町屋の変遷や徳川期(17世紀中葉)の町屋の構造については今後の課題としておきたい。

(平井和)

(註1) [平凡社1986]によると、「瓦町一丁目」の項目に、江戸時代の町組織や問屋の内容、炭屋善五郎について史料名とともに詳しく紹介されている。

引用・参考文献

佐藤隆2000、「古代難波地域の土器様相とその史的背景」：大阪市文化財協会編『難波宮址の研究』第十一、pp.253-265

九州近世陶磁学会2000、『九州陶磁の編年』

平凡社1986、『大阪府の地名Ⅰ』、p.449

第X章 中之島6丁目所在遺跡の調査

第1節 NX02-1次調査(図版25~27)

1) 調査にいたる経緯と経過(図1・2)

本調査地は堂島川と土佐堀川に挟まれた中之島の西端近くに位置する。江戸時代、中之島界限には諸藩の大坂蔵屋敷が建ち並んでいたことで知られており、これまでに周辺では東から佐賀藩・大村藩・長岡藩・鳥取藩・広島藩・久留米藩・高松藩・萩藩の蔵屋敷の調査が行われている。この中で広島藩の調査では、船入や御殿・米蔵・蔵役人長屋・中仕小屋などの建物のほか、排水施設としての石組の暗渠や敷地境の塀、井戸など多くの遺構・遺物が確認されている。高松藩や佐賀藩でも船入が見つかり、鳥取藩では貸家として使われた長屋や石組の溝や塀が、久留米藩では礎石建物や塀・溝・敷地境・井戸などが、萩藩では石垣・石列・礎石列が、大村藩では塀や礎石、長岡藩では礎石建物のほか塀・石列などが見つかった。蔵屋敷の建物配置や敷地の利用方法などを考える上で重要な成果をあげてきている。

2002年6月18日と6月20日に試掘調査(02-106次)を行った結果、現地表下約2mに、前述の蔵屋敷の時代に当る江戸時代前半の地層が良好に残されていた。この結果を受けて、2002年8月1日から発掘調査を実施することになった。調査はまず、重機によって現代盛土を除去した後、以下を人力で掘下げた。調査区内の北東側は攪乱が地下深くまで及んでおり、南西側と地層の残り方が大きく違っていたため、北東側を東区、南西側を西区として分け、地層の残存状況の良い西区から調査を開

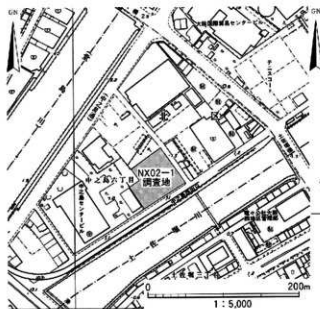


図1 調査地位位置

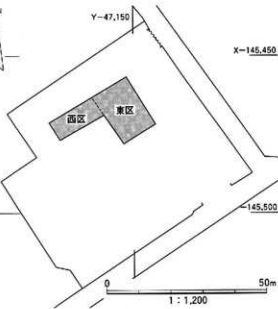


図2 調査区配置図

始した。その結果、17世紀後半から18世紀中頃の石垣や基壇と19世紀前半の火事の痕跡のほか、多数の土壇や柱穴・溝・ピットが確認された。2002年10月4日に現場における調査を終了し、器材類の撤収を含め現地におけるすべての作業を完了した。

本報告中、包含層・遺構出土の貝類については池田研が執筆した。

2) 調査の結果

i) 層序と出土遺物(図3・4、表1)

部分的な坪掘りを含め、現地表下約4.6mまでの地層を観察した。以下に層序の概略を上位層から記し、各層の層相や特徴を表1に、北壁断面図を図3、各層の出土遺物を図4に示す。

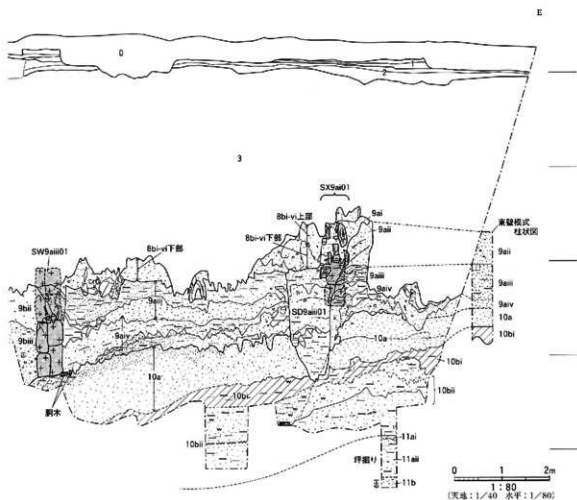
第0層から第8層まではすべて盛土層である。

第0層は現代盛土および攪乱層で、第1層および第2層も現代の盛土である。

第3層は焼土・炭を含む暗灰色の細～中粒砂からなる。

第3層より上位層は全域に分布し、第4層から第7層にかけては西区にのみ分布する。

第4層から第6層までは明治時代以降の近代の盛土である。



第4層は層相から4i・4ii層に細分される。4ii層は炭・貝殻を含む黄灰白色の粗粒砂混り中～細粒砂からなり、4i層は炭・貝殻を含む黄灰白色の細礫～粗粒砂からなる。

第5層は炭を含む暗灰～黄灰色のシルト混り中～細粒砂からなる。

第6層は黄灰色の極粗～中粒砂からなり、西区南側にのみ分布する。

第7層は西区にのみ分布し、層相から7i～7v層に細分される。7i層は漆喰・瓦・焼土を多く含む暗灰色のシルト混り極粗～中粒砂からなり、主として西区東半部に分布する。7ii層は炭・貝殻を含む明赤褐色の焼土混り粗～中粒砂からなり、西区東半部にのみ分布する。7iii層は下部が細礫を含む褐黄灰色のシルト混り粗～中粒砂、上部が黄灰色のシルト質細粒砂からなる。7iv層は下部が褐灰色のシルト混り極粗～中粒砂、上部が黄灰色のシルト質細粒砂からなる。7v層は下部が暗灰色のシルト混り極粗～中粒砂、上部が黄灰色のシルト混り極粗～中粒砂からなり、最上部の厚さ約0.5cmは黄褐色のシルト混り極粗～中粒砂からなる。7iii～7v層は西区西半部に分布する。

7i・7ii層からは肥前磁器広東碗1・端反碗2、丹波焼徳利12、7i層からは琉球の壺屋焼8(容量1650ml)、7ii層では瀬戸美濃焼陶器碗3が出土している。7iii層上面遺構のSK7iii01からは焼継の施された肥前磁器鉢9や瀬戸美濃焼磁器端反碗5が出土した。後述する7v層上面遺構のSK7v02からは広東碗4、

表1 層序表

NX02-1 層序		時期	厚さ (m)	自然露出 地点	産物	おもな産物	時代・年代
第0層	a	現代土 土および礫層	(15)			—	現代
	b	現代土 (埋没層、砂(シルト)層、砂(シルト)層、砂(シルト)層)	10~15			—	
	i	埋没土 (埋没層、砂(シルト)層、砂(シルト)層)				—	
	ii	埋没土 (埋没層、砂(シルト)層、砂(シルト)層)				—	
第1層	i	埋没土 (埋没層、砂(シルト)層、砂(シルト)層)	45.10			—	現代
	ii	埋没土 (埋没層、砂(シルト)層、砂(シルト)層)				—	
第2層	i	埋没土 (埋没層、砂(シルト)層、砂(シルト)層)	10~20			—	現代
	ii	埋没土 (埋没層、砂(シルト)層、砂(シルト)層)				—	
第3層	i	埋没土 (埋没層、砂(シルト)層、砂(シルト)層)	10~15			—	現代
	ii	埋没土 (埋没層、砂(シルト)層、砂(シルト)層)				—	
第4層	i	埋没土 (埋没層、砂(シルト)層、砂(シルト)層)	10~15			—	現代
	ii	埋没土 (埋没層、砂(シルト)層、砂(シルト)層)				—	
第5層	i	埋没土 (埋没層、砂(シルト)層、砂(シルト)層)	10~15			—	現代
	ii	埋没土 (埋没層、砂(シルト)層、砂(シルト)層)				—	
第6層	i	埋没土 (埋没層、砂(シルト)層、砂(シルト)層)	10~15			—	現代
	ii	埋没土 (埋没層、砂(シルト)層、砂(シルト)層)				—	
第7層	i	埋没土 (埋没層、砂(シルト)層、砂(シルト)層)	10~15			—	現代
	ii	埋没土 (埋没層、砂(シルト)層、砂(シルト)層)				—	
第8層	i	埋没土 (埋没層、砂(シルト)層、砂(シルト)層)	10~15			—	現代
	ii	埋没土 (埋没層、砂(シルト)層、砂(シルト)層)				—	
第9層	i	埋没土 (埋没層、砂(シルト)層、砂(シルト)層)	10~15			—	現代
	ii	埋没土 (埋没層、砂(シルト)層、砂(シルト)層)				—	
第10層	i	埋没土 (埋没層、砂(シルト)層、砂(シルト)層)	10~15			—	現代
	ii	埋没土 (埋没層、砂(シルト)層、砂(シルト)層)				—	
第11層	i	埋没土 (埋没層、砂(シルト)層、砂(シルト)層)	10~15			—	現代
	ii	埋没土 (埋没層、砂(シルト)層、砂(シルト)層)				—	

—上層露出地点 i 下層露出地点 Δ層内露出地点

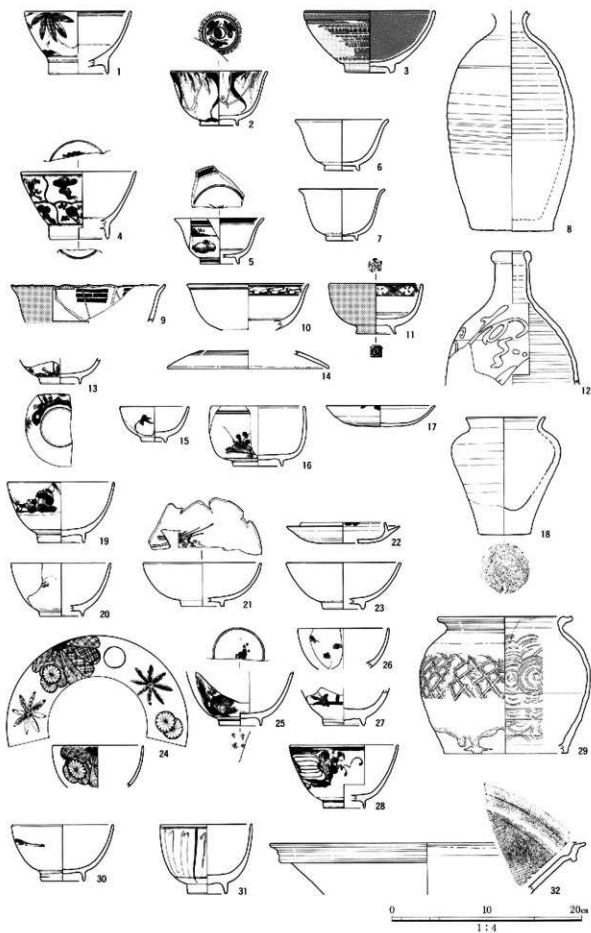


圖4 出土遺物実測図

7i層(8)、7ii層(3)、7i-ii層(1・2・12)、SK7ii01(5・9)、SK7v02(4)、7v層(6)、SK8ai06(10)、SK8ai07(7・11)、8ai層(18)、8ai-ii層(14)、8a-bi層(29)、8biii層(15)、8biv-vi層(16)、8bi-vi層(17)、9aiv層(13・19・20)、9bi層(24・30)、10a層(21~23、25~28)、10bi層(31・32)

7v層からは京・信楽系陶器端反碗6が出土した。7iii層上面遺構埋土と7i層・7ii層からは瀬戸美濃焼磁器が出土するのに対して、7iii層から7v層にはそれが入らないが、後述する8層の出土遺物からみると、いずれも19世紀代と考えられる。

第8層は層相から8a・8b層に区分される。8a層は西区に分布し、8ai・8aii層に細分される。8ai層は貝殻を含む黄灰白色の細礫～粗粒砂からなる。上部10～15cmは焼けて赤褐色に変色しており、下半部にはシルト～極細粒砂の偽礫を含む。西区東半部でのみ8ai層の最上部に厚さ約5cmの炭を含むシルト混り細～中粒砂がみられた。8aii層は黄灰白色の極粗～中粒砂からなる。8b層は西区に分布する8bi～8bvi層と東区に分布する8bi～8bvi層に分けられる。8bi層は下半部が黄褐～褐色のシルト混り細～中粒砂、上半部が細粒砂質シルト、8bii層は暗灰黄色の細粒砂質シルト、8biii層はシルト偽礫を含む黄灰色のシルト混り粗～中粒砂ないし中～細粒砂、8biv層は炭・細礫・シルト偽礫を含むシルト混り粗～中粒砂、8bv層は炭・細礫～中礫を含むシルト混り極粗～中粒砂、8bvi層は暗黄灰色の粗～中粒砂からなる。8bi～8bvi層は8bi～8bvi層に相当する盛土層で、東区東半部にのみ分布する。下部が灰白色の細礫～中粒砂、上部が灰色のシルト混り極粗～中粒砂からなる。

後述する8ai層上面遺構のSK8ai06・07から京・信楽系陶器端反碗7や肥前磁器碗10・11が出土した。10は19世紀に下る波佐見系の碗である。8ai・aii層からは19世紀に属すると考えられる行平の蓋14が出土した。このほか8ai層から九州小倉産の飴壺18(容量420ml)や8a・8bi層から唐津焼壺29が出土している。また、8biii層からは肥前磁器小碗15、8biv～8bvi層からは肥前磁器碗16が出土した。18世紀後半に属するものと考えられる。なお、8bi～8bvi層からは備前焼の灯明皿17が出土している。

第9層は盛土層と後述する石垣SW9aiii01の機能時堆積層からなる9a層と、粗粒な盛土層の9b層とに区分される。9a層は東区に分布し、さらに9ai～9aiv層に細分される。9ai層は灰褐色のシルト混り粗～中粒砂からなる盛土層で、9aii層はシルト偽礫を含む黄灰色の極粗～粗粒砂からなる盛土層である。9aiii層は石垣SW9aiii01を埋立てる堆積層で、下半部はシルト偽礫・炭を含む黄褐色の細礫～粗粒砂、上半部は灰色のシルト混り粗～中粒砂からなる。9aiv層は石垣SW9aiii01の機能時堆積層で、下半部はシルト偽礫をまれに含む灰色のシルト混り中～粗粒砂、上半部は炭・シルト～細粒砂を含む灰色の極粗～中粒砂からなる。ラミナが観察されることから、停滞水域の堆積層である。9b層は西区に分布し、9bi～9biii層に細分される。9bi層はシルト偽礫を含む極粗～中粒砂、9bii層は中礫を含む黄褐色の細礫～中粒砂、9biii層は黄褐色のシルト偽礫混り粗～中粒砂からなる。

9aiv層からは肥前磁器碗13・19・20が出土した。9bi層からは肥前磁器碗24・30が出土した。高台径が不明の24を除くと、いずれも17世紀末頃までの遺物である。

第10層は主としてシルト～砂からなり、層相から10a・10b層に区分される。10a層は炭やシルト偽礫を含む灰色ないし灰白色の細礫～中粒砂からなる。10b層は停滞水域の堆積物で、10bi・bii層に細分される。10bi層は貝殻を含む褐灰色ないし暗黒灰色の細粒砂混り極細粒砂質シルト～粘土からなる流れのほとんどない停滞水域の水底の堆積物である。10bii層は上・中・下部にさらに細分され、下部はシルト偽礫を含む黄灰色の粗～中粒砂、中部は炭・シルト偽礫を含む黄灰色のシルト混り中～細粒砂ないし細粒砂質シルト、上部は黄灰色の極細粒砂質シルト～粘土からなる。中部に植物遺体の

薄層を挟む。

10a層からは京焼風肥前陶器平碗21・23、肥前磁器碗25～28が出土した。大半は17世紀末頃までの遺物である。このほかに備前焼の灯明皿22が出土している。10bi層からは、肥前磁器には碗31のほか一重網目の碗など17世紀中頃～後半までに収まると考えられる遺物が出土している。同層からはこのほかに口縁部に鉄軸を施した唐津焼の播鉢32が出土した。

第11層は坪掘りで確認した層準で、主として細粒な盛土層からなる11a層と、粗粒堆積物からなる11b層とに区分される。11a層は層相からai・aII層に細分される。11ai層は植物遺体を含む暗灰褐色のシルトからなる停滞水域における堆積物と考えられる。11aII層はシルトの偽礫を含む灰色ないし暗灰色を呈するシルト～極細粒砂からなる盛土層である。11b層は青灰色の極粗～中粒砂からなる。坪掘りの掘削途中に多量の湧水があったため、作業の安全を考慮して即座に埋戻した。十分な観察は行えなかったが、炭や偽礫などを含まないこと、比較的淘汰の良い岩相を示していたことから盛土ではなく、砂州の堆積層と思われた。

以上の各層準の出土遺物から、年代は表1に示すように考えた。詳しくは表1を参照されたい。

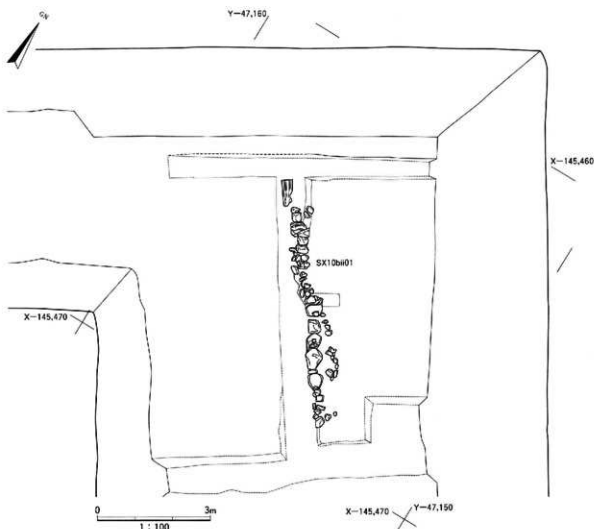


図5 SX10bii01平面図

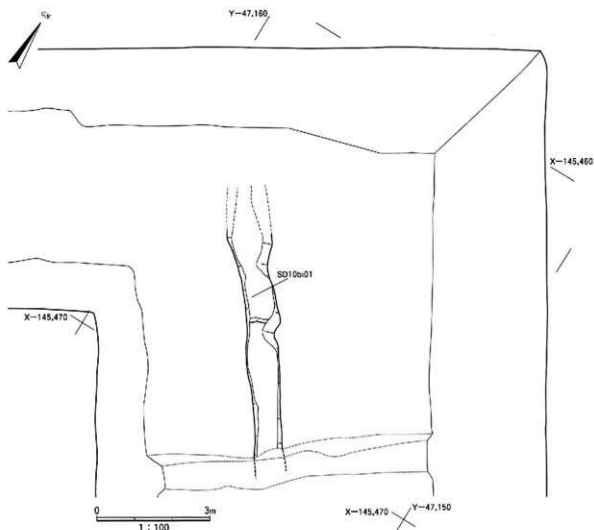


図6 SD10bi01平面図

ii) 遺構

a. 第10bii層内検出遺構(図5・10)

東区において、ほぼ北西-南東方向の石列SX10bii01を検出した。延長約6m、北壁側には石は分布せず、南壁側は第3層によって攪乱されていた。石列中央部には胴木が敷かれており、この部分にのみ石が西に面をもって2段積まれていた。他の部分は後述の溝SD9ai01がSX10bii01の上部付近にまで達していたため、石列は壊され、ずれ落ちていた。このため高さは不明である。

SX10bii01の性格については、①停滞水域の堆積層である第10bii層内から、流れのほとんどない底質な堆積層の第10bi層にかけて積まれており、掘形や裏込めが認められないこと、②SX10bii01を境にして、東側に比べて西側の第10bi層上面が明瞭な層理面をもち、堆積深度が深いことより、西側で浚渫が行われたと考えられたこと、等から西側の水深を確保するために施された護岸と考えた。

b. 第10bi層上面検出遺構(図6)

東区において、ほぼ北西-南東方向の溝SD10bi01を検出した。北壁側は途切れ、南壁側は第3層によって攪乱されていた。延長約6m、幅0.70~1.20m、深さ0.05~0.20mであった。北壁側が落込んでおり、中央部付近がやや高く、南壁側に向かって徐々に深くなる。中央部と南壁側の高低差は約

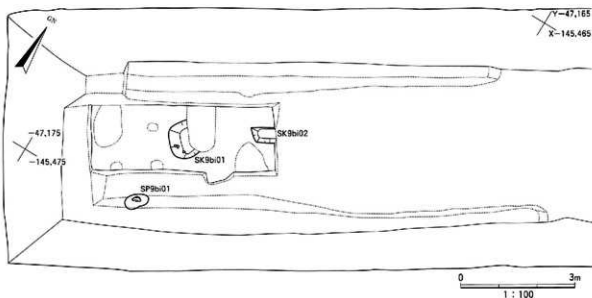


図7 第9bi層上面遺構平面図

0.10mであった。SD10bi01はSX10bi01の西側に近接し、同一の方向をもつことから、なんらかの関係があると思われたが、その性格については不明である。

c. 第9bi層上面検出遺構(図7)

西区において土壌SK9bi01・02、柱穴SP9bi01を検出した。

土壌SK9bi01 北側が上位のSK8bv01によって攪乱されていた。残存する幅は1.02m、深さ0.38m、埋土は細礫を含むシルト混り粗～中粒砂であった。

土壌SK9bi02 東側は攪乱されており、残存する幅は0.48m、深さ0.71mであった。埋土は黄灰色のシルト偽礫と細礫を含む粗～細粒砂であった。

柱穴SP9bi01 南壁断面において確認した柱穴である。大きさは不明であるが、深さは0.55mであった。埋土は土壌SK9bi02と同質の、シルト偽礫と細礫を含む黄灰色粗～細粒砂であった。底部には大きさ約0.20mの礎石が置かれていた。礎石はカリ長石がめだつ六甲花崗岩である。周辺でこれに組合う柱穴は確認できなかった。

d. 第9aiii層上面検出遺構(図8・9)

東区において石垣SW9aiii01、溝SD9aiii01、竈状遺構SD9aiii01を検出した。

石垣SW9aiii01 はほぼ北西～南東方向の石垣で、4段が残っていた。高さ約1.20m、裏込めを含めた幅は約0.65mであった。延長約3.8mを検出し、両端は調査区外に続いていた。石垣は東に面をもち、下底には胴木が敷かれていた。石垣石は桃色のカリ長石のめだつ六甲花崗岩が用いられており、矢穴のあるものがあった。

SW9aiii01は、①東側にのみ、滞水域の機能時堆積層である第9aiv層が分布すること、②目地部には漏水を防止するためと考えられる暗灰色シルト質粘土が詰込まれていたことから、東側に常時滞水していた水域の存在が考えられ、船入あるいは水路などのために築かれた石垣と考えられる。

SW9aiii01を境にした東西の地層状況から、西側に分布する9bi～9biii層は構築時の盛土で、9bi層上面が生活面に相当すると考えられる。SW9aiii01の構築年代については、前述のように9bi層出土の

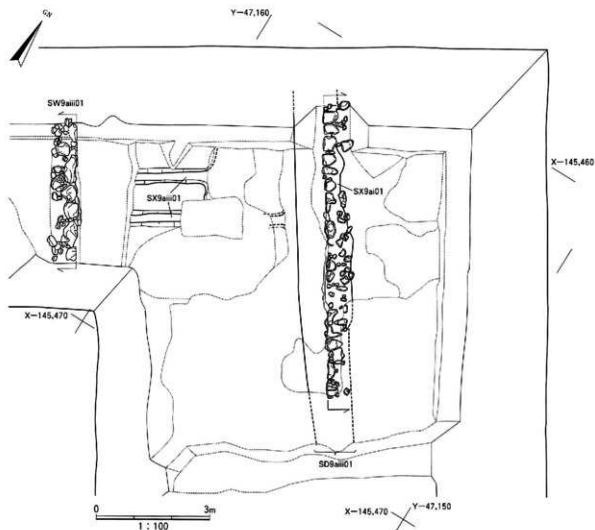


図8 第9ai・aiii層上面遺構平面図

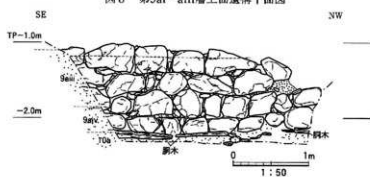


図9 SW9aiii01立面図

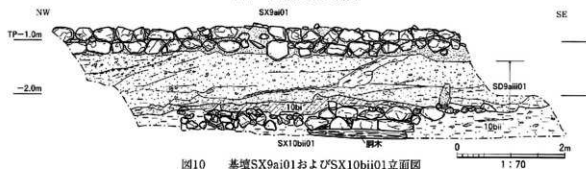


図10 基壇SX9ai01およびSX10bii01立面図

肥前磁器24・30が17世紀末以前に属するものの、10a層出土の京焼肥前陶器が17世紀末から18世紀初頭に属するものと考えられたこと、機能時堆積層の9aiv層出土の肥前磁器13・19・20が17世紀末以前に属するものであることから、17世紀末か、遅くとも18世紀初頭であると考えられる。

SW9aiii01の最上段には、当時の水位を示すものとみられる直線状の痕跡がみられた(図9)。その高さはTP-1.20mであった。石垣石はこのラインを境に、上方では白味を帯びた風化を受けていたが、下部では同様の風化がみられず比較的新鮮な岩相を示していた。当時の満潮時の水位を示している可能性がある。なお、当時の大阪湾の干満差が現在と同じと仮定して、調査地付近の地盤沈下累積変動量が約-1.9mと見積もられている[林田精郎・三田村宗樹・中川康一1987]ことから計算すると、当時の満潮時の水面高さはTP+0.70mということになる。

溝SD9aiii01 はほぼ北西-南東方向の溝である。北壁側は調査区外、南壁側は第3層によって攪乱されており、延長7.5m、幅1.30~1.50m、深さ1.20mであった。埋土は下部が黄灰色のシルト質細粒砂の偽礫を含むシルト混り中-粗粒砂で、中部がシルト偽礫を含む黄褐灰色細礫-中粒砂、上部が暗黄灰色のシルト混り極粗-中粒砂であった。SD9aiii01は後述の基壇SK9ai01に沿ってその直下に掘られていることから、基壇の沈下を防ぐことを目的とした地盤改良の掘形と考えた。

畝状遺構SX9aii01 はほぼ北東-南西方向の畝を2条と畝間を検出した。第3層による攪乱が遺構上面にまで達していたため残存状況は良くなかったが、残存する畝幅は0.30~0.40m、高さはもっとも残りのいい部分で0.10m、畝間の幅は0.65~0.75mであった。作土の層相は細礫-極粗粒砂を含む淡褐色のシルト混り粗-中粒砂であった。SW9aii01を埋立てた盛土(9aiii層)上面に形成されていた。

e. 第9ai層上面検出遺構(図8・10)

東区において石組基壇SK9ai01を検出した。北壁側は調査区外、南壁側は第3層によって攪乱され、延長7.90m、幅は最大で0.75mであった。基壇は西に面をもち、その石組は2段残っていたが、北壁断面でもう1段上にのる石が認められた。基壇の石材は桃色のカリ長石がめだつ六甲花崗岩とめだたない黒雲母花崗岩であった。前述のSD9aiii01を掘削したのち、埋戻す過程で石の背面に当たる9aiii層と9aiv層を整形しつつ積み上げ、9aiii層と9ai層を盛上している。9ai層の上位には8bi-vi層の盛土層がみられるが、9ai-aii層とはまったく岩相が違うこと、9ai層と明瞭な層界面で境されていることから、8bi-vi層と9ai-aii層とは盛上の時期が違うと考えられた。前述のように第3層による攪乱が深くまで達しており、9ai層は北壁東端でしか観察されなかったため、基壇面の高さは不明である。なお、9ai層上面の高さはTP-0.60~0.65mであった。

f. 第8bvi層上面検出遺構(図11)

西区において土壇SK8bvi01とピットSP8bvi01・02を検出した。

土壇SK8bvi01 上位の土壇SK8bv01によって攪乱され、西南部分のみ残っている。ほぼ方形の平面形を呈すると考えられ

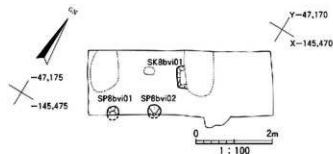


図11 第8bvi層上面遺構平面図

る土壌で、長さ0.63m、残存する幅は0.24m、深さ0.24mであった。上位の8bv層で埋積されていた。

ビットSP8bv01・02ともにほぼ円形の平面形をもち、直径は0.32mであった。深さはSP8bv01が0.65m、SP8bv02が0.63mであった。SK8bv01と同様に8bv層で埋積していた。柱痕跡は認められなかった。

g. 第8bv層上面検出遺構(図12)

西区において土壌SK8bv01・02とビットSP8bv01～03を検出した。

土壌SK8bv01 ほぼ隅丸方形の平面形を呈し、長さ1.22m、幅0.79m、深さ0.74mであった。

土壌SK8bv02 南側が側溝によって攪乱されていたが、かろうじて南壁断面に遺構の南端部がかかっていたため、遺構の大きさを確認できた。楕円形の平面形を呈し、長径約1.70m、短径約0.80m、深さ0.44mであった。

ビットSP8bv01 ほぼ円形の平面形を呈し、長径0.28m、短径0.24m、深さ0.03mであった。

ビットSP8bv02 ほぼ円形の平面形を呈し、長径0.23m、短径0.19m、深さ0.07mであった。

ビットSP8bv03 ほぼ円形の平面形を呈し、長径0.28m、短径0.17m、深さ0.29mであった。

8bv層上面で検出した遺構はすべて8biv層で埋められていた。

h. 第8biv層上面検出遺構(図13)

西区においてビットSP8biv01・02を検出した。

ビットSP8biv01 南側が側溝によって攪乱されていたため、大きさや平面形は不明である。残存する幅は0.33m、深さ0.18mであった。

ビットSP8biv02 ほぼ円形の平面形を呈し、直径0.32～0.34m、深さ0.06mであった。

SP8biv01・02はともに上位の8biii層で埋められていた。

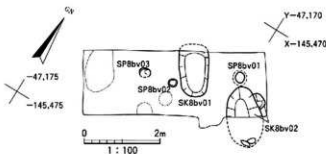


図12 第8bv層上面遺構平面図

i. 第8biii層上面検出遺構(図13)

西区において土壌SK8biii01を検出した。隅丸方形の平面形で、北西側の長辺がやや張出した形を呈している。長軸長1.13m、幅0.83m、深さ0.68mであった。

j. 第8bii層上面検出遺構(図14)

西区において溝SD8bii01・02とビットSP8bii01を検出した。

溝SD8bii01 ほぼ北西～南東方向の溝で、調査区外に延びる。幅0.10～0.20m、深さ0.02～0.05mであった。埋土は黄灰色のシルト混り極粗～粗粒砂である。

溝SD8bii02 直角に折れ曲がり、溝SD8bii01に取付く溝である。幅0.25～0.35m、深さ0.04～0.15mであった。埋土は溝

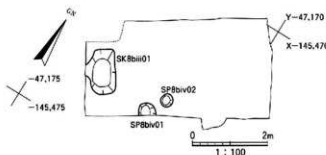


図13 第8biv・8biii層上面遺構平面図

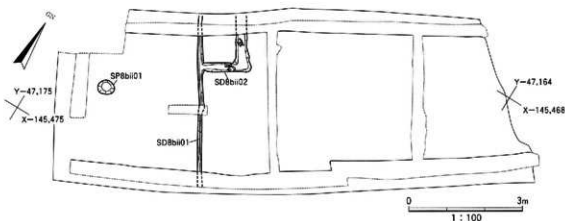


図14 第8bii層上面遺構平面図

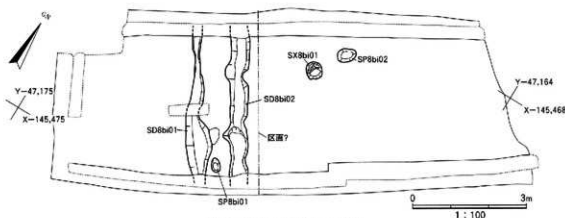


図15 第8bi層上面遺構平面図

SD8bi01と同様に黄灰色のシルト混り極粗～粗粒砂であった。溝の中には、排水管に転用したと考えられる瓦が凹面を上にして2つ前後に並べられていた。また、溝SD8bi01に取付く部分の底には樹皮がみられた。これは、排水に用いられた木材が腐って樹皮の部分のみが残されたものとも思われる。

ピットSP8bi01 楕円形の平面形を呈し、長径0.45m、短径0.38m、深さ0.16mで、埋土は黄灰色のシルト混り極粗～粗粒砂であった。

k. 第8bi層上面検出遺構(図15)

西区において、溝SD8bi01・02と焼け跡SX8bi01、ピットSP8bi01を検出した。

溝SD8bi01 ほぼ北西～南東方向の溝で、調査区外に延びる。幅0.10～0.67m、深さ0.03～0.09mであった。南東に向かって幅が広く深くなる。埋土は暗褐色のシルト混り粗～中粒砂であった。

溝SD8bi02 溝SD8bi01に平行するほぼ北西～南東方向の溝で、調査区外に延びる。幅0.35～0.50m、深さ0.08～0.11mであった。埋土は溝SD8bi01と同様に暗褐色のシルト混り粗～中粒砂であった。

焼け跡SX8bi01 炭と焼上が埋められていた、深さ0.08m、直径0.42～0.43mのほぼ円形の遺構である。さらに内側には、鐏の形を残す長楕円形に掘込みがみられた。遺構底部は火を受けて褐色～赤褐色に変色していた。この場で火を使ったようである。

図15に示す北西～南東方向の一点破線を境にして、西側では8biから8bi層まででいねいな盛土・整地が繰返されているのに対して、東側では粗雑な盛土がなされていた(図3)。ここになんらかの区

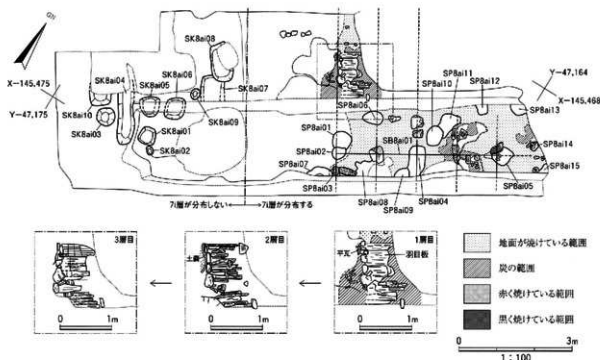


図16 第8ai層上面遺構平面図

画の境が存在したと推測される。

1. 第8ai層上面検出遺構(図16)

西区東半部において火災で焼失した礎石建物SB8ai01、ピットSP8ai01～15を、西区西半部において土壌SK8ai01～10を検出した。

礎石建物SB8ai01 東半部北側において、火災によって東側に焼けて倒れた建物の羽目板部とその礎石を良好な状態で検出した。羽目板の礎石の延長線上にはSP8ai01～03が並び、これに直交するライン上にSP8ai02・04・05とその間の礎石、SP8ai06やSP8ai04北側の礎石がのること、東半部の地面(8ai層上面)全体が赤色ないし黒色に焼けていたことから、一連の礎石建物が存在したと考えられた。以下、北側と南側に分けて記述する。

北側の羽目板は長さ1.2m、幅0.8mの範囲にみられ、図16下図のように3層構造を成していた。1層目は幅0.10～0.15mの縦板が多く使用されており、横板はみられなかった。2層目には幅0.05m前後の縦板や竹、枝木が使用されており、横板もみられた。1層目と2層目の間には淡赤褐色の焼土を含む黒色ないし灰色の極細～粗粒砂が観察され、羽目板の内部に使用された壁土と考えられた。3層目は幅0.10～0.15mの縦板が多く使用されていた。羽目板の基礎には長さ0.10～0.30mの礎石が使用されており、その礎石は赤褐色に焼けたものと煤の付着したものとがみられた。礎石の外側には瓦が縦に地面に立てられており、その外側には土囊が埋められていた。礎石を固定し、羽目板のずれを防ぐためのものと考えられた。なお、羽目板の礎石を境に、東側の地面(8ai層上面)は焼けて赤褐色を帯びていたが、西側は煤の付着はみられたものの赤褐色に変色はしていないことから、SB8ai01は東側に存在したと考えられる。

南側において、礎石建物が北西～東西方向に4間以上であったことを確認した。柱間は直線上に並

ぶSP8ai02・04・05とその間の礎石の間隔から、3尺5寸(約1.06m)であった。北東-南西の柱筋の方位はN59°Eであった。SP8ai02・04・05は礎石掘形と考えられる。いずれも不定形な平面形を示し、長径0.33~0.58m、深さ0.17~0.25mであった。埋土はシルト質細~中粒砂の偽礫を含む黄灰色粗~中粒砂であった。礎石の大きさは0.30~0.45mで、赤褐色ないし黒色に焼けていた。

SP8ai02の南側で羽目板の礎石の延長線上に、建物に使用された柱材と考えられる炭化した角材がみられた。角材は2本あり、1本は一辺約0.20m、もう1本は約0.10mであった。角材の周辺には赤褐色ないし褐黄灰色の細礫・シルト混り粗~中粒砂からなる焼土が観察され、角材の直下にはSP8ai03が認められた。SP8ai03は側溝によって攪乱されていたために正確な大きさは不明であるが、深さは0.06mであった。また、SP8ai04と05の間には、炭化した角材や板材、焼土、および灰となって同定はできなかったが、植物繊維がみられた。

SP8ai02・04・05より東側にも地面(8ai層)の焼けた跡や炭が分布することから、周辺に組合う礎石やその掘形の検出を試みたが確認できなかった。なお、本層上面で検出した火災の時期については、焼土層である7ii層に瀬戸焼磁器がみられることから19世紀第1四半期以降と考えられる。

ビットSP8ai07~15 前述のビットのほかに9基のビットを検出した。大きさのわかるSP8ai10・11・14はほぼ楕円形から円形に近い平面形を示し、長軸長0.28~0.62m、幅0.24~0.60m、残存する深さ0.06~0.18mであった。いずれの埋土もSP8ai02・04・05と同質のシルト質細~中粒砂の偽礫を含む黄灰色粗~中粒砂であった。

土壌SK8ai01 はほぼ方形の平面形を呈し、南北長0.46m、東西長0.44m、深さ0.43mであった。埋土は貝殻を含む暗黄灰色のシルト混り極粗~中粒砂であった。

土壌SK8ai02 はほぼ楕円形の平面形を示し、長軸長0.20m、幅0.16m、深さ0.04mであった。埋土は灰褐色の焼土混り極粗~中粒砂であった。

土壌SK8ai03 円形の平面形を示し、直径0.45~0.46m、深さ0.26mであった。埋土は貝殻を含む暗黄灰色のシルト混り極粗~中粒砂であった。

土壌SK8ai04 上位の土壌SK7v02によって攪乱されていたため、南西部分のみ残っていた。長楕円形の平面形を呈すると考えられる土壌で、残存する長さは1.32m、幅0.40m、深さ0.30mであった。埋土は貝殻を含む暗褐色のシルト混り極粗~中粒砂であった。

土壌SK8ai05 はほぼ方形の平面形を示し、縦0.54m、横0.52m、深さ約0.40mであった。埋土は暗黄灰色のシルト混り極粗~中粒砂であった。

土壌SK8ai06 はほぼ方形の平面形を示し、縦0.56m、横0.50m、深さ約0.40mであった。埋土は暗黄灰色のシルト混り極粗~中粒砂であった。

土壌SK8ai07 上位の土壌SK7v01によって攪乱されていたため、北西部分のみ残っていた。ほぼ隅丸長方形の平面形を呈すると考えられる土壌で、残存する長さは0.61m、幅0.43m、深さ0.35mであった。埋土は貝殻を含む暗褐色のシルト混り極粗~中粒砂であった。

土壌SK8ai08 上位の土壌SK7v04によって北側を攪乱されていた。隅丸長方形の平面形を呈し、長さは0.98m、幅0.56m、深さ0.29mであった。埋土は暗褐色のシルト混り極粗~中粒砂であった。

土壌SK8ai09 楕円形の平面形を呈し、長軸長0.28m、幅0.22m、深さ0.03mであった。埋土は暗褐色のシルト混り極粗～中粒砂であった。

土壌SK8ai10 上位の土壌SK7v03によって攪乱されていたため、南西部のみ残っていた。平面形は不明である。残存する幅は0.57m、深さ0.27mであった。埋土は貝殻を含む暗褐色のシルト混り極粗～中粒砂であった。

以上の土壌群はゴミ穴と考えられ、西区西半部は建物の存在しない空地であったと推定される。

m. 第7v層上面検出遺構(図17)

西区西半において土壌SK7v01～04を検出した。

土壌SK7v01 南北長2.1m、幅1.7m、深さ0.6mの不定形な土壌で、埋土は貝殻とシルト偽礫を含む黄灰色の極粗～中粒砂であった。

土壌SK7v02 側溝によって攪乱されていたため、全体の規模は不明である。埋土は炭・貝殻を含む暗黄灰色ないし黄灰色の粗～中粒砂で、大量の瓦が出土した。

土壌SK7v03 土壌SK7v02と同様に側溝によって攪乱されていたため、全体の規模は不明である。埋土は炭・貝殻を含む暗黄灰色ないし黄灰色の粗～中粒砂で、大量の瓦が出土した。

土壌SK7v04 上位の落込みSX7iii01によって北東側が攪乱されていた。ほぼ楕円形の平面形を呈すると考えられる土壌で、長軸長0.68m、幅0.50m、深さ0.64mであった。埋土は炭を含む暗黄灰色ないし黄灰色の粗～中粒砂であった。

n. 第7iii層上面検出遺構(図18)

西区西半において落込みSX7iii01、土壌SK7iii01、ピットSP7iii01～03を検出した。

落込みSX7iii01 ほぼ中央部から東側へ落込む遺構で、東肩は不明瞭となる。上位の漆喰・瓦・焼土を多く含む7i層によって埋められていた。焼土層である7ii層がSX7iii01より東半部だけにのみ分布することから、前述の8ai層上面の火災は東半部で起こったと考えられる。SX7iii01西肩付近を境にして、西半部では8ai層の上位に7iii～7v層が盛土されているのに対して、東半部では7iii～7v層が分布しないことから、SX7iii01西肩付近に区画の境が存在したと考えられる。

土壌SK7iii01 楕円形の平面形を呈し、長軸長1.15m、幅0.64m、深さ0.23mであった。埋土は炭を含む暗黄灰色のシルト混り極粗～中粒砂であった。

ピットSP7iii01 側溝により攪乱されていたため、全体の規模は不明である。深さは0.49mであった。埋土は焼土を含む黄灰色のシルト混り粗～中粒砂であった。ピット上に礎石がのることから、礎石掘形と考えられる。

ピットSP7iii02 ピットSP7iii01と同様に側溝により攪乱されていたため、全体の規模は不明である。深さは約0.25mであった。

ピットSP7iii03 ピットSP7iii01・02と同様に側溝により攪乱されていたため、全体の規模は不明である。深さは約0.40mであった。

o. 第7i層上面検出遺構(図19)

西区において塼SA7i01、SX7i01・02、溝SD7i01、ピットSP7i01を検出した。

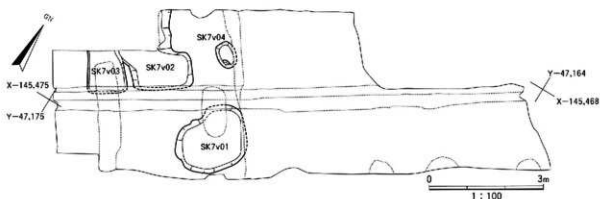


図17 第7v層上面遺構平面図

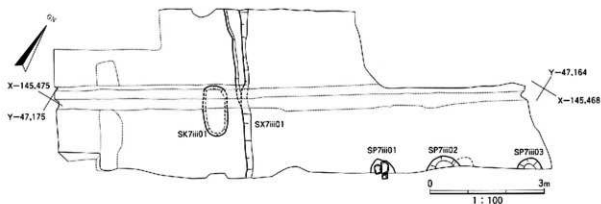


図18 第7iii層上面遺構平面図

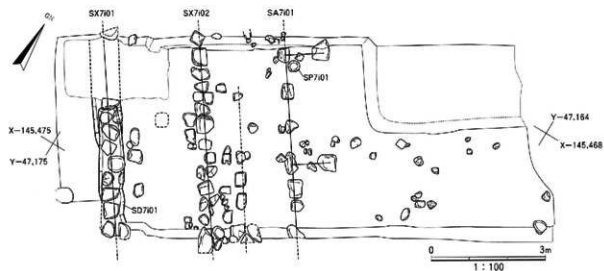


図19 第7i層上面遺構平面図

塀SA7i01 ほぼ中央部で検出した北西－南東方向の塀である。礎石が3尺5寸(約1.06m)間隔で据えられており、その東側3尺5寸横にも3柱間空けて礎石が据えられていた。礎石には大きさ0.30～0.55mの花崗岩が使われていた。前述した8bi～8bvi層の区画の境と同じ位置にあることから、8bvi層から7i層の時期にかけて同位置に区画境が存在したと考えられ、火災の時期にも区画境が同位置に存在したと推察されるが、前述のSX7iii01によって攪乱を受けていたため確認できなかった。

SX7i01・02 北西－南東方向に平行にならぶ礎石を検出した。幅は共に約0.60～0.80mで、礎石

には大きさ0.30～0.50mの黒雲母花崗岩とホルンフェルスが使われていた。ホルンフェルスが使用された遺構はSX7I01・02のみであったため、一連の遺構と考えられた。礎石の配置は密ではなく、少し間隔が空いており、小さめの礎石の場合は2個を横に並べて据えられていた。SX7I01と02との間隔は約2.5mであった。

上位の近代に属する4層上面には、SX7I01および02にはほぼ重なって礎石と漆喰が平行にならび、その間に漆喰が敷かれた通路がみられた。幅や方向がSX7I01・02とはほぼ同じであったことから、4層上面にみられた通路は前の時期を踏襲したものと考えられ、SX7I01・02も通路の一部と思われたが、その性格については不明である。

溝SD7I01 SX7I01に沿って直下に掘られた北西－南東方向の溝で、幅0.65～0.80m、深さ約0.10mであった。上下に2つの溝が重なっていた。

ビットSP7I01 SA7I01の東脇にあり、円形の平面形を呈する。直径0.29～0.30m、深さ0.07mであった。埋土は上部が灰色シルト混り粗～中粒砂、下部が黄澄色のシルト偽礫混り粗～細粒砂であった。底部に平瓦が置かれていた。

iii) 調査地に所在した蔵屋敷について(図20)

本調査地所在の蔵屋敷の藩名の変遷について、絵図などから判明したことを年代ごとに以下に述べる。明暦元(1655)年の「大坂三郷町絵図」、元禄元(1688)年の「辰蔵増補大坂図」では、調査地に相当する区画には町人と中津藩(小笠原氏)の名がみられる。元禄16(1703)年の「公私要覧」には町人の名はなくなり、実栗藩(本多氏)と中津藩がみられる。1749年頃(寛延年間)の「摂州大坂画図」では、龍野藩(脇坂氏)と安志藩(元中津藩小笠原氏)がみられるようになり、宝暦2(1752)年以后とされる「改正懐宝大坂図」では、調査地のある区画に龍野藩、安志藩に加えて延岡藩(内藤氏)、笠間藩(牧野氏)の名がみられる。18世紀末から19世紀中頃にかけての、寛政9(1797)年の「増修大坂指掌図」、文化3(1806)年の「増修改正摂州大坂地図」、文政8(1825)年の「文政新改摂州大坂地図」、弘化2(1845)年の「弘化改正大坂細見図」では、延岡藩、笠間藩の名はみられなくなり、龍野藩、安志藩に加えて福岡藩の下屋敷がみられる。文久3(1863)年の「改正増補国宝大坂全図」では、福岡藩の下屋敷がみられなくなり、龍野藩のみとなる。絵図の精度では調査地の区画まで確定することはできなかったが、



図20 絵図にみられた調査地付近の屋敷地(蔵屋敷)変遷

以上のように、調査地に相当する区画では藩替えが、特に18世紀代に行われていたことが明らかになった。この時期は8b層層準に当り、頻繁に盛土と整地が繰り返された時期に一致した。

iv) 包含層・遺構出土の貝類(表2・3)

包含層・遺構より出土した貝類は、総数約300点、25種である(表2)。層・遺構別に整理した結果は表3のとおりである(出土層・遺構が不明確な資料、第

表2 出土貝類種名一覽

腹足綱 Gastropoda	
メカイアワビ	<i>Notohaliotis sieboldi</i> (Reeve)
クロアワビ	<i>Notohaliotis discus</i> (Reeve)
マダカアワビ	<i>Notohaliotis gigantea</i> (Gmelin)
キサゴ	<i>Umbonium (Suchium) costatum</i> (Kiener)
ササエ	<i>Turbo (Batillus) cornutus</i> Solander
ツメガタイ	<i>Neverita (Glossaulax) didyma</i> (Roeding)
アカニシ	<i>Rapana thomasi</i> (Crosse)
テングニシ	<i>Pugilina (Hemifusus) tematana</i> (Gmelin)
バビ	<i>Babyronia japonica</i> (Reeve)
カワニナ	<i>Semisulcospira bensoni</i> (Philippi)
二枚貝綱 Bivalvia	
アカガイ	<i>Anadara (Scapharca) broughtonii</i> (Schrenck)
イタヤガイ	<i>Pecten (Notovola) albicans</i> (Schroeter)
ホタテガイ	<i>Patinopecten yessoensis</i> (Jay)
シャコガキ	<i>Dendostrea hyotis</i> (Linnaeus)
ハマグリ	<i>Meretrix lusoria</i> (Roeding)
カガミガイ	<i>Dosinia (Phacosoma) japonica</i> (Reeve)
シオフキ	<i>Mectra veneriformis</i> Reeve
ヒメマスオガイ	<i>Crytomya busoensis</i> Yokoyama
オオノガイ	<i>Mya (Arenomya) arenaria oonogai</i> Makiyama
マシジミ	<i>Corbicula (corbiculina) leana</i> Prime
ヤマトシジミ	<i>Corbicula japonica</i> Prime
セタシジミ	<i>Corbicula sandai</i> Reinhardt
イシガイ	<i>Unio douglasiae nipponensis</i> (v. Martens)
オトコテボシガイ	<i>Inversidens reiniana</i> (Kobelt)
トリガイ	<i>Fulvia mutica</i> (Reeve)

表3 出土層・遺構別貝類一覽

[illegible]

0・1層出土資料を除く)。同定作業には現生標本と図鑑[吉良哲明1954、波部忠重・奥谷喬司1983]を利用し、個体数については、二枚貝綱は左右殻数の多数の方を、腹足綱は殻口数を原則として採用した。

3) まとめ

中之島の西端で行った今回の調査では、以下のことが明らかとなった。

17世紀中頃から後半にかけて、ほとんど流れのない停滞水域の堆積物である10bi層が東区に広く分布することから、今回検出した石垣SW9aiii01の構築以前にも船入あるいは水路といった構築物の存在が推測された。また、10bi層が西側に向かって厚く深くなること、その上面に明瞭な層理面をもつことから、浚渫による堆積土砂の取除き作業が行われていたと考えられた。なお、本調査地における蔵屋敷の始まりの時期については、11a層から遺物が見つかっていないため明らかではないが、上位の10bi層の出土遺物からみて17世紀中頃かそれ以前と思われる。

17世紀末か、下っても18世紀初頭に構築されたと考えられる石垣SW9aiii01が確認されたことによって、船入あるいは水路の存在が明らかとなった。その規模については今回の調査では確認できなかったが、石垣の機能時堆積層である9aiv層の分布状況から、東区に広く船入などのあったことが推測された。これに基づいて絵図を調査したが、蔵屋敷の内部まで描かれたものはなく、船入の存在を明らかにできなかった。

石垣はその後埋立てられるが、盛土の上面は島に利用され、その東側ではやがて基壇が作られるようになる。基壇上の状況については、上位からの攪乱により確認できなかった。

18世紀には、西区で盛土・整地が繰返されている。盛土の層厚が薄いことから、大規模なものではなく小規模な工事が繰返されたと考えられた。

19世紀第1四半期以降には、火災のあったことが明らかとなった。当時の地面に当る8ai層上部が赤褐色に変色しており、大きな火事であったと推察された。

以上のように、本調査では蔵屋敷の土地利用状況に係わる年代ごとの貴重な情報が得られたことは大きな成果であったといえる。しかし、本調査地に所在した蔵屋敷の藩名および船入の存在を確定できなかったことは今後の課題である。

(小倉徹也)

註) 本調査地所在の蔵屋敷の変遷については、大阪歴史博物館の豆谷浩之学芸員、八木滋学芸員の考察による。

引用・参考文献

小倉徹也2002、「中之島西端で見つかった蔵屋敷」：大阪市文化財協会編『華火』102号

吉良哲明1954、『原色日本貝類図鑑』保育社

波部忠重・奥谷喬司1983、『学研生物図鑑 貝』Ⅱ、学研研究社

林田精郎・三田村宗樹・中川康一1987、「地盤沈下累積変動量のブロックダイアグラム化の試み」：『情報地質』第12号、

日本情報地質学会、pp.177-185

第 XI 章 森小路遺跡の調査

第 1 節 MS01-26 次調査(図版28-31)

1) 調査にいたる経緯と経過(図1・2)

森小路遺跡は大阪市の北東部に位置し、かつて存在した河内潟・湖に、淀川の営力によって搬出された土砂で半島状に形成された自然堤防上に立地する。本遺跡は弥生時代中期から江戸時代にかけての複合遺跡で、旭区新森中央公園の北東隅を中心とした直径約800mがその範囲とされていたが、最近の調査で、主要地方道大阪内環状線の東側にも遺跡が拡がるのがわかってきた。すなわち当地の北方約60mのMS89-50次地点では、弥生時代中期後葉の遺構・遺物と古墳時代中期後葉の遺物が検出され、当地の東方約50mにあるMS01-4次地点では、弥生時代中期の遺構・遺物が見つかった(図1)。

調査は2002年3月1日より、近世以降の堆積土を機械掘削したのちに開始し、以下の地層は人力で掘削した。調査では南から北へ3mごとに測量杭を打設し(P1~P22)、杭より南3mの範囲に杭と同じ番号を与えた。すなわちP3とP2に挟まれた南北3m区間を「3区」と呼称した(図2)。基準点測量を4月18日に行い、19日に器材類・プレハブを撤収し、現場におけるすべての作業を完了した。

なお、調査に使用した基準点は世界測地系に基づく国土平面直角座標第Ⅵ系である。



図1 調査地位置図

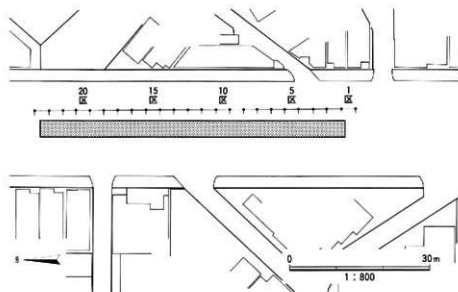


図2 調査区配置図

2) 調査の結果

i) 層序と遺物(図

3・4・10)

無遺物層である第3a層以下は、堆積と削剥を繰り返しながらも南から徐々に北に向って埋没し、弥生時代中期にはTP±0m以上の高さになっていたと考えられる。

第1層：15～18区にかけて分布する。粘土を含むオリブ黒色細粒砂層で、弥生時代中期後葉から近世にいたる遺物を包含し、土師器甕19・備前焼鐙鉢21などが出土した。

第2a層：14～18区以外のほぼ全域に分布する。層厚10cm以上のにぶい黄～灰色のシルト～粗粒砂層で、弥生土器壺3・6、鉢8が出土した。弥生時代中期中葉に形成されたと考えられる。6は無頸壺と思われ、櫛形流水文と波状文を組合わせて施文している。

第2b層：13区以南に広がる層厚5～15cmの灰白～灰オリブ色のシルト～細粒砂層で、弥生土器壺1・2・4・5、鉢7、甕9～13、石甕丁14・15、石斧16が出土した。弥生時代中期中葉の堆積とみられる。7は高杯の可能性がある。石器の石材は14が凝灰岩、15が緑色片岩、16が安山岩と思われる。

第2c層：10～18区に分布する。層厚10～25cmのオリブ黒～黒褐色の細～粗粒砂層で、弥生土器片を含む。

第2d層：13～19区に分布する。層厚約5cmのオリブ黒色粗粒砂層で、弥生土器片が出土した。以下の層は、流木などの植物遺体はみられるが、遺物は含まない。

第3a層：22区以北のNR401内に分布する。層厚約10cmの細粒砂泥りオリブ黒色シルト層である。

第3b層：20区以北のNR401内に堆積した層厚約5～20cmの粗粒砂泥りオリブ黒色シルト層である。

第3c層：20区以北のNR401内に分布する。層厚約15cmのオリブ黒色シルト層で、有機物のラミナが顕著である。

第3d層：NR401内の最下部に堆積した層厚約20cmの灰色粗粒砂層で、層下面はTP-0.4mである。

第3e層：NR401内の南肩のみに堆積した最大層厚約60cmのにぶい黄褐～オリブ黒色細粒砂層である。

第4a層：8区以北のNR402内に分布する層厚5～30cmの粗粒砂を含む灰～灰オリブ色細粒砂層である。

第4b層：8区以北のNR402内に堆積した層厚10～20cmの粗粒砂泥り黒褐色細粒砂層で、有機物の

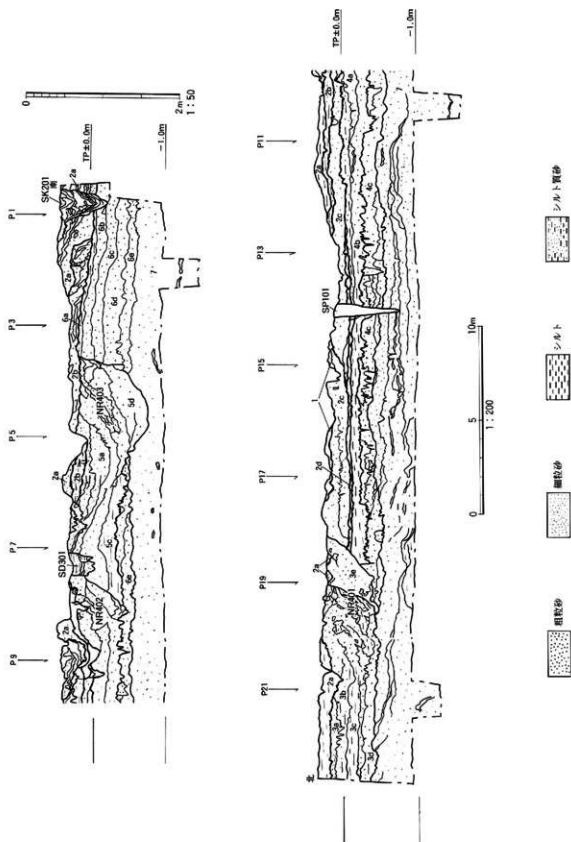


図3 調査区東壁断面図

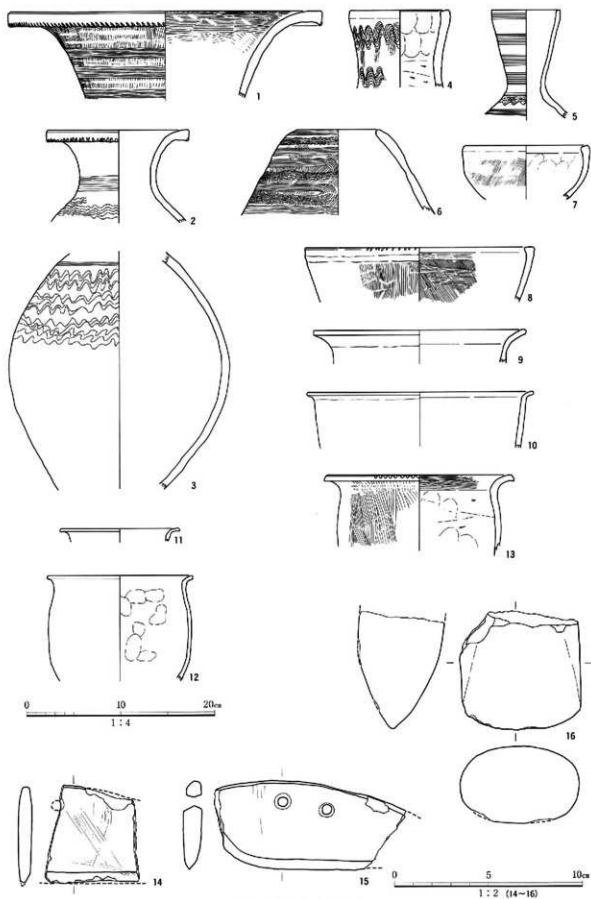


図4 弥生時代の出土遺物
第2a層(3・6・8)、第2b層(1・2・4・5・7・9~16)

ラミナがみられる。

第4c層：8区以北のNR402内の最下層に堆積した層厚20～30cmの灰色細～粗粒砂層で、植物の根で擾乱されている。下面はほぼTP-0.5mである。

第4d層：8区のNR402南肩に堆積した灰色細粒砂層である。

第5a層：NR403内の5～7区に分布する最大層厚25cmのぶい黄～灰オリーブ色細粒砂層である。

第5b層：4区以北NR403内に堆積した層厚10～30cmの粗粒砂混り灰色細粒砂層で、下部に有機物のラミナがみえる。

第5c層：4区以北のNR403内の最下部に堆積した、擾乱が顕著な層厚10～30cmの灰色シルト偽礫が混る灰色粗粒砂層である。擾乱は植物の根によると考えられる。

第5d層：4・5区のNR403南肩のみに分布する灰～灰オリーブ色の粗粒砂層である。南肩際は幅約4mにわたって深く削られ、底面はTP-0.7mを測る。

第6a層：4区以南に分布する。層厚約5cmの粘土を含むオリーブ黒色細粒砂層で、上面に生痕化石と思われる小穴が顕著にみられた。

第6b層：4区以南に分布する。層厚約10cmの粗粒砂混りオリーブ黒色細粒砂層である。

第6c層：4区以南に分布する。層厚10～20cmの粗粒砂を含む灰色細粒砂層である。

第6d層：4区以南に分布する。層厚10～30cmの粘土を含む灰色中粒砂層で、有機物ラミナがみられる。

第6e層：4区以南に分布する層厚10～20cmの灰色シルトが混る灰色粗粒砂層で、擾乱が激しい。本層下面はTP-0.6mである。

第7層：TP-0.4～0.6mより下に存在する地層で、灰～灰オリーブ色の細～粗粒砂からなり、流木を含みラミナが顕著に観察される。

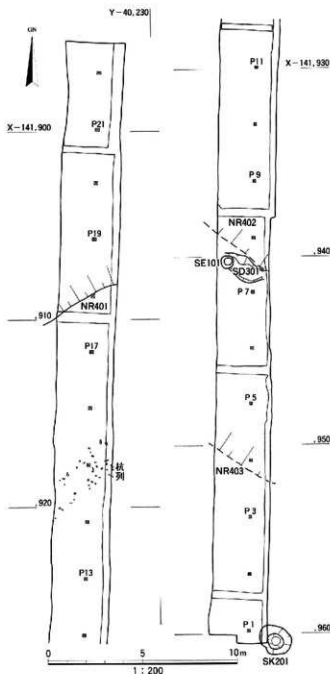


図5 調査区全体図

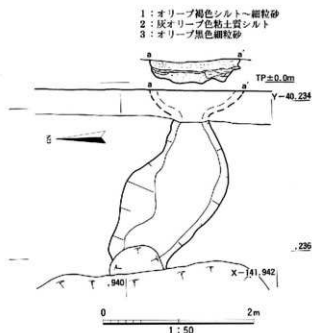


図6 SD301平・断面図

ii) 遺構と遺物(図5～10)

SD301 8区に位置する形状がやや不整形な東西溝で、幅は0.5～1.2m、深さは0.3mである。埋土は下部がオリーブ黒色細粒砂、上部はラミナが顕著なオリーブ褐色細粒砂である。弥生時代の人為による溝と思われる。

SK201 1・2区の東側にある古墳時代中期後葉の土壌である(図7)。平面は不整な楕円形で長径が1.8m、短径1.3mで、深さは0.6mを測り、埋土は黄灰～オリーブ黒色粘土質シルト～粗粒砂で、埋土上部から土師器甕17・18が、下部から須恵器杯・甕片が出土した。

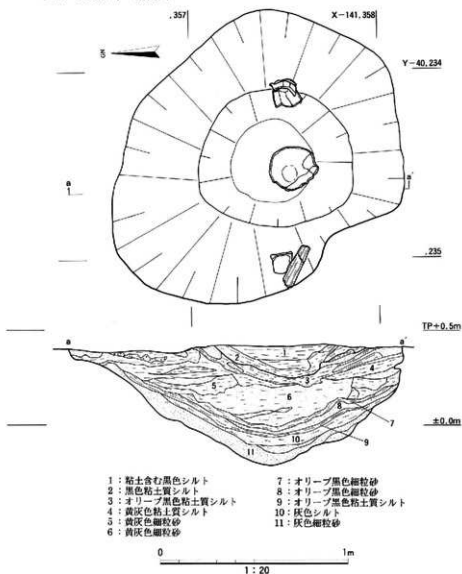


図7 SK201平・断面図

SE101 8区に位置する羽釜と曲物を井戸欄に用いた15世紀頃の井戸である。掘形は直径1.3m、深さ0.6mで、上部の瓦質土器羽釜22・23は、図8のように壊れて破片が散在した状態で出土した。また曲物は腐朽してタガを残すだけになっていた。残存したタガから曲物の直径は80cmと推定される。断面図に示したように井戸が掘込まれた地層は、砂質土が東から西に向かって傾斜して堆積しており、水が得やすい地点であったと考えられる。

SP101 14・15区の東壁で検出されたピットである。掘形の直径は上部で0.5m、下部で0.1m、深さは0.9mを測る。中央に直径0.1m、長さ0.9m以上の竹を直立状態で埋めていた。

杭列 15・16区は1層が分布し、中世から近世初頭の遺物が多く出土した。図9のように約0.9mの間隔をとって、北で東に43°振る2列の杭列が検出された。並んだ杭の芯々間は0.3~1.4mと一定ではない。時期は杭穴底から唐津焼皿20が出土したことから、17世紀初頭以降と思われる。

NR401 19区以北に存在する流路で、第3a~3e層で埋没する。

NR402 8区以北に存在する流路で、第4a~4d層で埋没する。

NR403 4区以北に位置する流路で、第6a層以下を侵食し5a~5d層で埋没する。

3) まとめ

森小路遺跡の弥生時代集落の中心は、当調査地西方約300mの新森公園北方を中心とする南北約300m、東西約500mの範囲と考えられることが多かったが、MS01-4次や今回の

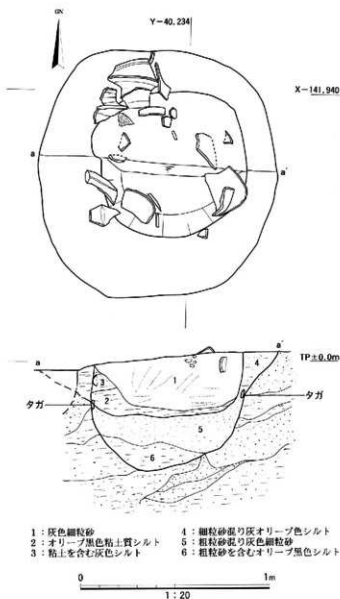


図8 SE101平・断面図

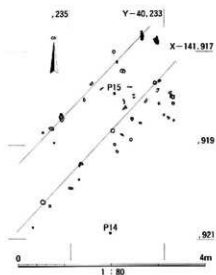


図9 杭列平面図

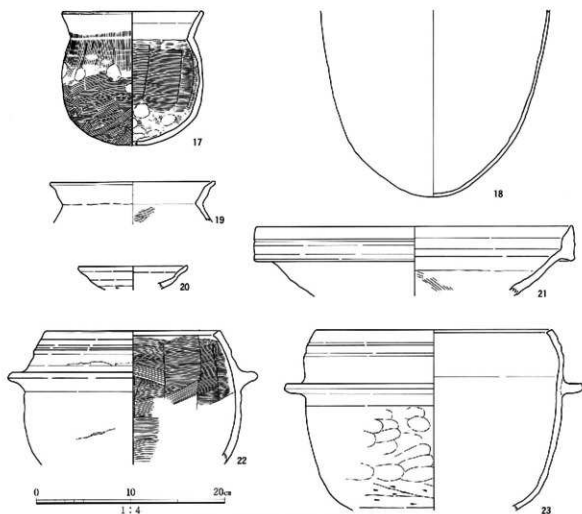


図10 古墳時代～近世初頭の出土遺物

SK201(17・18)、SE101(22・23)、第1層(19・21)、杭列(20)

調査などで内環状線を越えて、さらに東側に拡がること became 確実になってきた。当調査地の弥生時代の遺構は東西溝のみであったが、ほぼ調査区全域で弥生時代の包含層を確認できた。包含層は洪水によって形成されたと思われ、おもに弥生時代中期前葉の遺物を多く含むが、同中葉の遺物も含むことから、中期中葉頃には被災したものと思われる。また調査区南端で古墳時代中期後葉の土壌を、中央部で中世後期の井戸と近世初頭と考えられる杭列・ピットが確認されたことは、これからの森小路遺跡の調査に一定の指針を与えてくれるであろう。

またNR401～403は、いずれも北肩は未検出であることから、いずれも調査区に収まらない広い幅をもち、南のNR403から次第に埋没し、陸地化していったものと思われる。これら流路底がいずれもTP-0.4～0.5mであることは、河内湖において当地が浅い水漬きの状態にあったことをものがたると考えられる。

内環状線東方の調査を重ねることによって、森小路遺跡の各時期の実態や古環境が、いよいよ明確になるものと思われる。

(黒田慶一)

第XII章 三宝寺跡伝承地の調査

第1節 SP01-1次調査(図版32・33)

1) 調査にいたる経緯と経過(図1)

三宝寺は12世紀後半に禅僧である大日坊能忍により建立され、七堂伽藍のほか僧坊48房を有していたとされる。永禄年間には兵火により焼失したと伝えられている。これまで、周辺では大阪経済大学内のSP96-1次調査、大桐2丁目でのDT00-1次調査が行われているにすぎないが、鎌倉時代から室町時代を中心として遺構・遺物が見つかった。

大阪市高速電気軌道第8号線井高野～今里間建設工事が大阪市交通局により計画され、当地には瑞光停留場が建設されることとなった。大阪市教育委員会は2001年9月20日～22日に試掘調査を3箇所で行い、うち1箇所(図1-NO.3地点)で地表下約1mに土師器細片を含む溝状の遺構を検出し、面的な調査が必要であるとの判断を下した。これを受けた大阪市交通局からの委託により当協会が調査を実施することとなった。

10月22・23日の両日に重機による掘削を第1層まで行い、以深は人力による掘削で調査を進めた。北端部は下水管が検出されたため調査対象から外したが、一部地層が遺存する箇所を先行して調査し、排土置場として利用することとした。中央部に検出された下水管は保護のため周囲に余裕を残して掘削した。また、東側半分は下水管の埋設により大きく攪乱されていた。

適宜、遺構検出・実測・写真撮影を行いながら調査を進め、現地における調査は10月31日で終了し、11月1日に器材の撤収および埋戻し作業を行った。

なお、調査に用いた方位は磁北である。平面実測に用いた基準点は任意で設定し、交通局の工事基準点に取付けている。

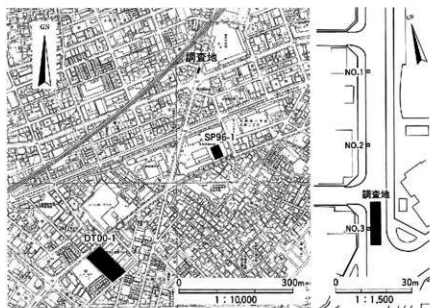


図1 調査地位置図

2) 調査の結果

i) 層序と遺物(図2・4)

水成層が主体であり、各層ともに上面のレベルは南から北へ、西から東へと緩やかに下がっている。また、調査地中央部では下水管埋設が原因と考えられる比高10cm程度の地層の崩落部が認められた。

第1層：道路舗装とその基礎となる敷石および攪乱で、平均層厚50cmである。

第2層：暗灰黄色中粒砂で層厚10cm以下で南西部を中心に部分的に遺存する。出土遺物は少ないが肥前磁器3、京焼系陶器のほか棧瓦を含み、18世紀後半以降に推定される。

第3層：浅黄色中粒砂で構成される層厚50cm程度の水成層である。均質でラミナは顕著ではない。また、部分的に木根による攪乱と思われる黒色化した個所が認められる。出土遺物は少量で瓦器・瓦片があるのみである。

第4層：暗灰黄色中粒砂～シルト質中粒砂からなる層厚35cm程度の水成層である。基本的には中粒砂とシルト質中粒砂が薄く互層状に堆積しているが、踏込みなどによって堆積が乱された個所も多い。踏込みにはウシと考えられる偶蹄類のものが顕著に認められた。また、上面には部分的ではあるが、おおむね東西方向に浅い溝状の凹みが数条認められた。耕作痕の可能性もあることから、認識できなかったものの本層上には土作があったかもしれない。遺物は細片が多いが、下部を中心に土師器7、須恵器4・5・8、瓦器・瓦などが出土し、鎌倉時代後葉～室町時代初頭を中心とする水成層と考えられる。このうち須恵器杯蓋4はTK209型式前後に位置づけられ、大きく時期のさかのぼる資料である。

第5層：黒褐色シルト質粗粒砂～粘土質粗粒砂からなり、北部の浅い落込みSX01の埋土のほか、遺構埋土としてのみ遺存する。遺物は土師器・須恵器、瓦器

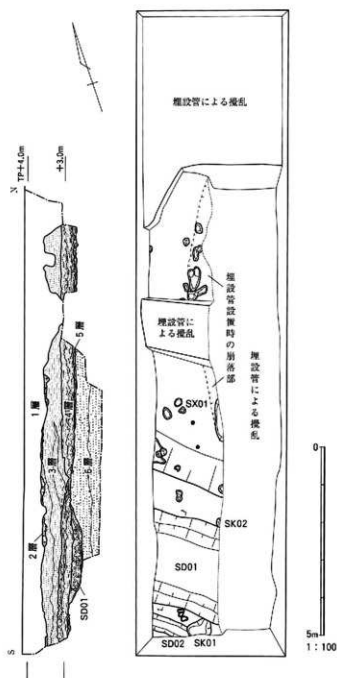


図2 第6層上面検出遺構平面図・西壁断面図

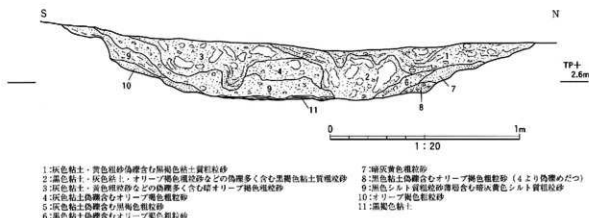


図3 SD01断面図

6を少量含むのみであるが、13世紀代、鎌倉時代後葉と考えられる。

第6層：浅黄色中粒砂からなる水成層で層厚80cm以上ある。上部40～50cmには直径5cm以下の礫を含み、以下は均質である。遺物は出土しなかった。DT00-1次調査の結果から吹田砂堆を構成する地層の可能性はある。

ii) 遺構と遺物(図2～4)

遺構検出は第2層以下各層において行った。

第6層上面検出遺構としては、第5層を埋土とする溝SD01のほか小穴、北部では浅い落込みSX01が検出された。

SD01 南部で検出した幅2.5m、深さ0.4mの北西-南東方向の溝である。埋土は肩部および底部にわずかに自然堆積土がみられるほかは人為的な埋戻し土で、最終的には第4層で埋没する。埋戻し土には調査地で確認できなかった黒色粘土および灰色粘土の水成層に由来する偽礫を多く含む。また、軟弱な状態で埋戻されたためか、埋戻し土の堆積はかなり乱れている。出土遺物は少なく土器器皿1、須恵器壺2のほか土器・須恵器・瓦器片がごく少量出土したにすぎない。

溝の機能としては、溝を境として第6層上面の標高が南部で高く、北部で低くなることから区画施設の可能性はある。

SD02 SD01と平行する幅0.4m、深さ0.05mの溝で、SK01を切る。埋土は下部が遺構掘削時の崩落土、上部が機能時の堆積層である。遺物は出土しなかった。

SK01 南端部で検出し、直径0.6m程度、深さ0.2

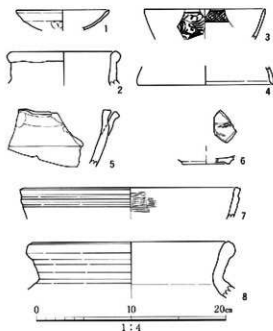


図4 出土遺物

SD01(1・2)、第2層(3)、
第4層(4・5・7・8)、第5層(6)

mある。埋土は第6層が擾乱を受けたもので、人為的な遺構ではなく、木根などの自然的な要因によると思われる。遺物は出土しなかった。

SX01 北部で検出した浅い落込みで、第6層の高い部分とは最大で0.2mの比高がある。自然の落込みと推定できる。遺物には土師器・瓦器小片がわずかに出土したのみである。試掘調査で確認したのは本遺構である。

小穴 調査地全面で深さ0.1m以下である不整形の浅い小穴を多数検出した。直径0.3m、深さ0.13mのSK02を除いては平面形状や堆積状況から自然の凹みと推定できる。

これらの遺構の年代としては、おおむね鎌倉時代後葉と考えられよう。

このほか第4層内では下部を中心にウシと考えられる足跡が、第2層内では小穴が検出された。

3) まとめ

今回の調査では周辺の調査成果と同様、中世の遺構・遺物を検出することができた。遺構のベースとなる砂層はDT00-1次調査の成果から古代にさかのぼる可能性があるものである。今回の調査地では鎌倉時代後葉と考えられる溝を検出することができた。同時期の溝はDT00-1次調査でも確認されており、同方位であることが注目されよう。正方位から振る方位で現在の周辺の道路とも合わず、当時の地割と関係するものかもしれない。その後、調査地周辺は幾度も洪水に見舞われることになり、途中、ある時期には耕作地として利用されていた可能性もある。また、近世にはほぼ現在の地表面に近い高さであったと推定される。

周辺を含めた三宝寺跡伝承地の調査はまだ緒についたばかりであり、不明な部分が多く残されている。今後の引き続き調査によるデータの蓄積が望まれる。

(平田洋司)

第2節 SP02-1次調査(図版34)

1) 調査にいたる経緯と経過(図1・2)

調査地は淀川低地と大阪湾岸低地に挟まれた淀川右岸の砂堆上に位置しており、12世紀後半に大日坊能忍が建立した禅宗寺院三宝寺の推定寺域内にある(図1)。三宝寺は七堂伽藍のほか僧坊48坊を有する寺であったが、永禄年間(1558～1569年)の兵火で焼失したといわれている。

本調査地周辺では過去に3次の発掘調査(SP96-1・01-1、DT00-1)が行われ、寺院の存在をうかがわせる軒瓦や一石五輪塔、輸入青磁碗などが出土した(図2)。

2002年3月6・13日の両日に試掘調査を行ったところ、地山とみられる砂層の上面で中世と推定される落込みが確認された。そこで関係各機関の協議を経て、本調査を行うことになった。

調査は試掘結果に基づき、地山直上までの地層を除去すべく重機掘削を開始したが、途中、後述の第1層で縄文土器を検出したため、予定を変更し、重機掘削は第2層上面までとした。以後は、人力により掘削精査し、図面・写真などで記録した。現地での調査は5月24日に完了した。

なお、本調査で使用した基準値は世界測地系に基づく国土平面直角座標第VI系による。



図1 調査地周辺の遺跡



図2 調査地位置図

2) 調査の結果

i) 層序(図3・4)

本調査地の南半は、すでに後述の地山である第7ii層付近まで削平されていた。北半部の観察に基づく層序は以下のとおりである(図3)。

第0層：近世から現代までの地層である。

第1～3層：いずれも唐津焼・肥前磁器などを含む近世の整地層である。第1層が茶褐色シルト層、第2層が灰白色砂層、第3層が灰褐色シルト混り砂層で、どの層からも中・近世遺物とともに縄文土器が出土した。調査区北半東部の地山上面で第3層を埋土とする遺構を検出した。

第4層：灰黄褐色中～細粒砂の整地層で、調査区西端や東半は削平され、失われている。後述の溝SD601の最終的な凹みを埋め、瓦器などの中世遺物を含む。本層からも縄文土器が出土した。

第5層：灰褐色砂～シルト層で、SD601廃絶後の埋土である。中世の遺物と縄文土器が出土した。

第6層：SD601に堆積した水成層で、黄褐色シルト混り砂薄層と暗灰黄色砂混り粘土質シルト薄層

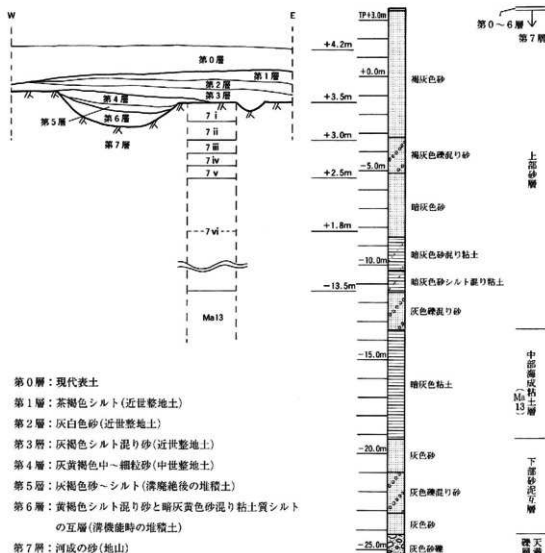


図3 層序模式図

図4 ボーリング柱状図

の互層である。中世の遺物を含む。溝が機能していた時に堆積したものであるが、最下部には小さな凹みがいくつかみられ、その中にたまった砂は溝掘削時の堆積の可能性がある。中世の遺物とともに縄文土器が出土した。

第7層：本層以下から遺物は出土しておらず、地山と考えられる河成の砂層である。

最高所の標高が3.5mで、地山最上層は黄褐色中～細粒砂(7i層)からなり、標高2.9m付近まで続く。生物による擾乱を受けている。以下標高2.2m付近まではラミナが顕著で、擾乱を受けていない層である。上位が灰黄褐色のやや粗い砂層(7ii層)、下位が灰黄褐色細粒砂層(7iii層)である。7iii層には水平方向の鉄分の帯が2条みられた。この下には擾乱を受けた粗粒砂混りの灰白～暗黄灰色砂(7iv・7v層)が標高2.5m付近まで続き、その下にまたラミナの顕著な灰黄～淡灰黄色の砂(7vi層)がある。7vi層でみられた平行ラミナは緩く傾斜しており、東北東から西南西方向への水の流れが考えられる。7vi層では細粒砂から粗粒砂へと堆積する逆級化が数単位観察され、この地が頻繁に洪水に見舞われていた状況がうかがえる。こういった状況から、このあたりは水没と離水を繰返した三角州のような場所であったと考えられる。今回の調査で観察しえた層はこの7vi層までで、最深部の標高は1.8mである。

調査地西隣のボーリングデータ(図4)によると、この河成の砂層(第7層)は標高-13.5m付近まで続き、その下には今から5,000年前頃までに堆積したといわれている完新世の海成粘土層(中部海成粘土層Ma13)が堆積している。

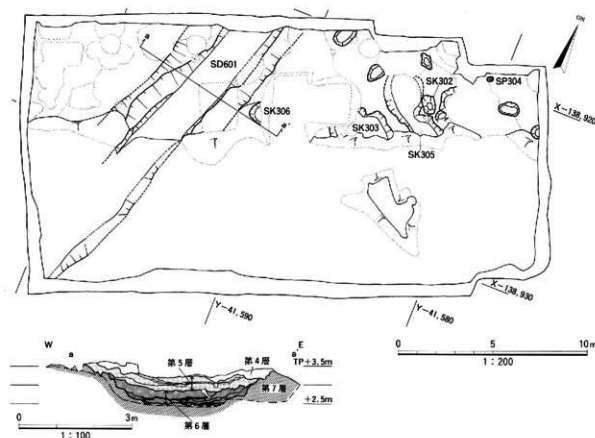


図5 地山上面の遺構平・断面図

ii) 遺構と遺物(図5～7)

本調査では地山上面で中世の溝、近世の土壌とビットを検出した。本調査地に堆積する地層の多くは、泥をほとんど含まない砂層であるため、遺物は風や水流・踏込みなど、外部の力が働く最初とに廃棄された位置から動く可能性がある。実際、各層・各遺構の遺物は、さほど出土量も多くはないのに時間幅のあるものが、同一の層や遺構から出土している。また元の位置から動いていないことを確認できた遺物もない。したがって各層・各遺構の時期の厳密な判別は避け、考えられるおおまかな時期を示しておくことにする。

a. 中世の遺構と遺物

SD601は幅約5m、深さ約1m、断面逆台形の人工の溝で、調査区北半部の中央から南西隅にかけての約18mを検出した。南半部は大きく削平されているため、底面の一部を検出したにすぎない。溝機能時である第6層では数回の大きな流れが観察された。また、第6層にみられるラミナや底面の標

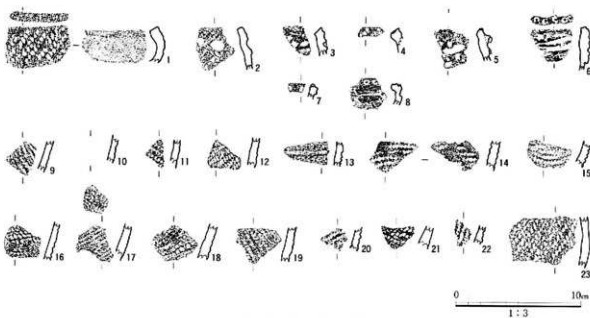


図6 出土遺物(縄文土器)

第6層(1・19)、第5層(3・14・21)、SK305(8)、第3層(4・6・7・9～11・18・20・22)、第2層(13)、第1層(2・5・16)、擾乱(12・15・17)、精査中(23)

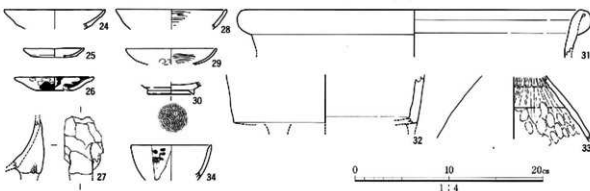


図7 出土遺物(中世・近世)

第6層(24・25・29・30・32)、第5層(33)、第4層(27)、第3層(26・28・31・34)

高からみて、溝は北北東から南南西に流れていたものと思われる。

第6層の出土遺物には図7の土師器Ⅲ24・25、瓦器Ⅲ29、産地不明の中世陶器の高台30、瓦質土器火鉢32などがあり、瓦器の特徴などから14世紀以降のものと考えられる。これら中世後半の遺物に混って縄文土器(図版下段と図6の1・19)も出土した。中世の遺物が磨耗しているのに比べ、縄文土器はほとんど磨耗していない。

溝廃絶後に堆積した第4・5層の遺物は、丹波焼か備前焼とみられる陶器の壺33(第5層)と土師器三足釜27(第4層)、および縄文土器3・14・21(いずれも第5層)を図示した。27は13世紀頃のもので、陶器の壺33は備前焼であれば16世紀末頃まで下る可能性がある。したがってSD601は中世後半の溝で、中世末までに埋まっていたのではないかと考えられる。

b. 近世の遺構と遺物

調査区東半で検出された図5で300番代の遺構はいずれも第3層で埋まっている。深さは0.2～0.6 mで、平面が楕円形や不整形のものが多く、建物の柱などとして組合うものや性格のわかるものはない。第3層からは図7に示したように、瓦器Ⅲ28、土師器Ⅲ26、備前焼大甕31、肥前磁器碗34といった中世後半～近世の遺物が出土したので、これらの遺構も近世のもの判断した。SK302・303・305からはあまり磨耗していない縄文土器も出土した(図版下段および図6の8、SK305出土)。

c. 縄文土器

縄文土器は第1～6層のすべての地層から出土している。約180点出土したが、すべて破片である。これらはいずれもあまり磨耗していないが、接合したものはなかった。大半が深鉢とみられる。施文された縄文は、縄目の大きいもの、小さいもの、縄の撚りが粗いもの、密なもの、縄の間隔の広いもの、狭いものなど、さまざまである。

おもなものを図版下段と図6に示した。1～8は口縁部、9～23は体部である。いずれの個体も外面に等しく縄文を施し、内面をナデで仕上げるが、1と14は内面にも縄文がみられる。また1と4は口縁端面にも縄文を施している。5は口縁外面の下に突帯が2条巡り、口縁と突帯の端部を半截した細い管状の工具等で等間隔に刺突している。8も口縁端部に同様の刺突があり、6の口縁の刺突は半截しない細い管状の工具によるものである。7の口縁端部の刺突も工具によるが、その形状はわからない。外面の刺突は2～4にみられ、2の刺突はほかよりも大きい。工具による外面の沈線は5～8・13にみられる。

総じてみると、表面全体に縄文をつけたのち、指や棒・竹などの工具による刺突や沈線を施している。また、口縁先端に刺突や縄文が施されたものもある。こうした特徴は縄文時代中期末～後期前半(約4,000年前頃)のものにみられ、今回出土した縄文土器も同様の時期のものと考えられるが、今回出土した縄文土器の中で型式まで推定できる資料はない。

3) まとめ

過去に行われた調査でも中世後半の溝がいくつか検出されている。畠の畝間とみられる幅1 m程度の小溝と、幅2～3 mの大溝2条(SP96-1・DT00-1次調査)があるが、大溝の方向はどちらも北西から南東方向で、今回検出されたSD601と交差する方向である。これらの大溝と比べ、SD601は溝幅

も5mとさらに広く、また地山上面や溝の検出面・底面などの標高も、SD601のほうが高い。したがって、どこまで続いているのか、あるいはそれぞれがいつの時期に機能していたのかなど、さらなる検討の必要はあるが、同時に機能していたとすれば、SD601は幹線水路であろう。また、これらが同時併存で繋がっていたとすれば、これらの溝によって区画される部分に建物など遺構が存在した可能性が考えられる。

次に、本調査の最大の成果として特筆すべきは、縄文時代中期末～後期前半にこの付近で人が活動していたことが確認されたことである。出土した縄文土器が後世の遺物よりも磨耗していないことは、本調査地のきわめて近くに未知の縄文の遺跡が存在したことをものをがたる。

これらの成果は、今後の研究や調査を進める上での大きな手がかりになったといえよう。

なお、本遺跡の調査の成果は、『葦火』100号や大阪歴史博物館の特集展示『新発見！なにわの考古学2002』（2002年7月31日～9月23日）、大阪経済大学の特別展『東淀川の歴史と美術』（2002年9月30日～11月12日）などで速報したので参照されたい。

（松本啓子）

参考文献

- 松尾信裕2002、『三宝寺跡伝承地で見つかった縄文土器』：大阪市文化財協会編『葦火』100号、p.7
大阪歴史博物館・大阪市文化財協会2002、『大阪の歴史を掘る』、p.8
大阪経済大学2002、『大阪経済大学70周年記念事業ギャラリー－開館記念特別展 東淀川の歴史と美術』

あ　と　が　き

本書では2001・2002年度に実施した18件の発掘調査と2件の試掘立会調査の成果を収録した。収録した遺跡は13遺跡を数え、時代・性格も多岐にわたっている。中之島6丁目所在遺跡は新発見の遺跡であり、伶人町遺跡・三宝寺跡伝承地は調査数も少なく、読者諸氏にはなじみの少ない遺跡であろう。一方、大坂城跡は著名であるが、本書に記載した豊臣期の達磨窯は市内で初めての発見であり、大坂城の研究に一石を投じるものであろう。このように新発見の遺跡はもとより、調査が進んでいる遺跡においても日々、成果はあがっている。

本書は基本的には調査終了直後に調査担当者が作成した報文を合冊したものにすぎない。そのため各調査の報告は短く、十分な検討、意義づけなどできなかった感もあるが、速報性を重視した結果とご寛恕願う次第である。

本書を通じて大阪市域の歴史の解明に繋がることを望む。

(松尾信裕)

索引

索引は遺構・遺物に関する用語と地名・遺跡名などの固有名称とに分割して収録した。

〈遺構・遺物に関する用語〉

- あ 暗渠 53, 61, 63, 99
 い 石垣 2, 28, 32, 37, 38, 40, 42, 45, 47, 48, 99, 100, 104, 107, 109, 118
 大形土製品 29, 94, 95
 お 織部 96
 か 瓦器 3, 11, 15, 16, 18, 29, 88, 128, 129, 130, 132, 135
 飾り瓦 65, 66, 69
 瓦質土器 (瓦質) 15, 16, 18, 29, 31, 52, 63, 125, 135
 華南彩釉陶 38, 40
 瓦葺 2, 49, 52, 69, 74
 竈 6, 40, 95
 唐津焼 27, 29, 31, 32, 35, 36, 40, 42, 86, 87, 93, 94, 95, 96, 104, 105, 125, 132
 く 櫛払 38, 72, 73, 74
 蔵屋敷 2, 99, 116, 118
 こ 五輪塔 15, 131
 さ 櫓 11, 28
 し 志野 29, 86, 87, 88, 94, 95, 96
 鯉瓦 52, 59
 縄文土器 1, 131, 132, 133, 135, 136
 す 須恵器 3, 6, 7, 11, 18, 21, 29, 80, 81, 84, 85, 86, 90, 92, 93, 124, 128, 129
 せ 青花 29, 40, 42, 52, 86, 94, 97
 青磁 15, 81, 88, 96, 131
 瀬戸美濃焼 25, 27, 29, 36, 52, 86, 87, 94, 95, 96, 101, 104, 107, 109, 112
 た 堅穴住居 6, 7, 9
 達磨窯 49, 52, 53, 55, 56, 58, 59, 65, 73, 74
 丹波焼 29, 36, 101, 135
 つ 壺原焼 101
 の 軒平瓦 52, 53, 59, 63, 66, 68
 軒丸瓦 31, 52, 53, 59, 63, 65, 68
 製斗 65, 66
 は 白磁 15, 18, 40, 42, 52, 78, 87, 88, 94, 96
 土師器 4, 6, 11, 14, 15, 16, 18, 21, 24, 25, 29, 31, 35, 36, 38, 40, 52, 76, 81, 85, 84, 86, 87, 90, 92, 93, 94, 95, 96, 97, 98, 120, 124, 127, 128, 129, 130, 135
 ひ 肥前磁器 3, 45, 52, 70, 78, 81, 86, 87, 97, 101, 104, 105, 109, 128, 132, 135
 備前焼 29, 31, 81, 86, 87, 88, 95, 104, 105, 120, 135
 ふ 船入 2
 へ 塀 28, 33, 36, 37, 53, 61, 63, 99, 114, 115
 ほ 掘立柱建物 7, 28, 33, 79, 81
 み 妙知焼 78, 84, 85
 や 焼塩壺 29, 88
 弥生土器 84, 85, 120
 り 李朝 42, 87

〈地名・遺跡名など〉

- あ 有馬温泉御湯殿 65
 い 一心寺 13, 16
 う 上町台地 5, 17, 19, 24, 37, 49, 79, 83
 く 百済尼寺 17, 21
 さ 堺環濠都市遺跡 57, 74
 し 四天王寺 13, 16, 19, 52, 67, 68, 74
 す 住友銅吹所 72, 74
 や 山之内遺跡 5, 7

Osaka City Archaeological Reports

2001-2002

**A Report of Excavations
at the**

**Yamanouchi, Abenosuji-minami, Reijjincho, Saikudani, Funade,
Namba Shell Strata, Naniwa-Capital Suzaku Street, Naniwa-Palace, Osaka Castle,
Osaka Castle-town, Nakanoshima 6-chome,
Morishoji and Presumed Location of the Sanpo-ji Temple Sites**

June 2003

Osaka City Cultural Properties Association

Notes

The following symbols are used to represent archaeological features, and others, in this text.

SA : Palisade or Fence

SB : Building

SD : Ditch

SE : Well

SK : Pit

SP : Pit or Posthole

SW: Stone Wall

NR: Natural river

SX : Other features

CONTENTS

Foreword

Explanatory notes

Acknowledgement

Chapter I Outline of the reserches in fiscal 2001・2002	1
S.1 Reserch conducted in fiscal 2001・2002	1
S.2 Research results from trial excavations	3
1) FD02-1	3
2) NK02-1	4
Chapter II Yamanouchi site	5
S.1 YM01-13	5
Chapter III Abenosuji-minami site	9
S.1 AS02-1	9
Chapter IV Reijinchō site	13
S.1 RJ02-5	13
Chapter V Saikudani site	17
S.1 SD01-3	17
Chapter VI Naniwa-Capital Suzaku Street site	21
S.1 NS01-1	21
Chapter VII Naniwa-Palace site	25
S.1 NW01-1	25
S.2 NW01-3	28
S.3 NW02-6	33
Chapter VIII Osaka Castle site	37
S.1 OS01-1	37
S.2 OS02-8	49
S.3 OS02-12	75
S.4 OS02-29	79
Chapter IX Osaka Castle-town site	83
S.1 OJ02-2	83
S.2 OJ02-3	90
Chapter X Nakanoshima 6-chome site	99
S.1 NX02-1	99

Chapter XI Morishoji site	119
S.1 MS01-26	119

Chapter XII Presumed Location of the Sanpo-ji Temple site	127
S.1 SP01-1	127
S.2 SP02-1	131

PostScript

Index

English Contents

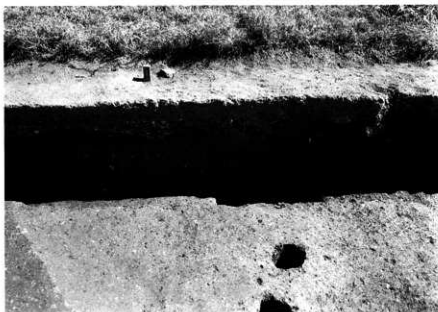
Reference Card

報告書抄録

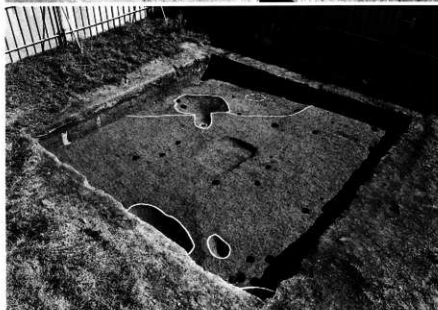
ふりがな	おおさかしまいぞうぶんかざいはくつちようきほうこくー2001・2002ねんどー						
書名	大阪市埋蔵文化財発掘調査報告ー2001・2002年度ー						
編著者名	平田洋司・小倉徹也・高橋工・村元健一・藤田幸夫・積山洋・佐藤隆・李陽浩・松本啓子・田中清美・小田木富慈美・宮本佐知子・池田研・平井和・黒田康一・松尾信裕						
編集機関	財団法人 大阪市文化財協会						
所在地	〒540-0006 大阪市中央区法門坂1-1-35 TEL 06-6943-6833						
発行年月日	西暦 2003年6月30日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
船出遺跡	浪速区豊津中3	27111	34°39'25"	135°30'10"	20030227	幸4	大阪市による建設工事
豊津貝冢遺跡	浪速区豊津中5	27111	34°39'35"	135°30'10"	20030306	幸3	大阪市による建設工事
山之内遺跡	住吉区山之内3	27120	34°35'15"	135°30'20"	20011009~1015	35	大加土木による建設工事
阿倍野紡南遺跡	阿倍野区阿倍野紡5	27119	34°38'10"	135°30'30"	20020509~0515	33	有明会社ワイズ・ケイによる建設工事
舟入町遺跡	天王寺区東船場1	27109	34°39'05"	135°30'55"	20030121~0225	105	宗義法人一心寺による建設工事
細工谷遺跡	天王寺区東船場	27109	34°39'38"	135°31'43"	20020121~0219	170	近鉄不動産株式会社・ 新屋和不動産による建設工事
難波京平栄大路跡	天王寺区北山町	27109	34°39'25"	135°31'35"	20010402~0426	125	大阪市住宅供給公社による建設工事
難波宮跡	中央区上町1	27128	34°40'40"	135°31'34"	20010420~0508	100	中道不動産株式会社による建設工事
	中央区馬場町1	27128	—	—	20010604~0702	120	山口興産株式会社による建設工事
	中央区安堂寺町1	27128	—	—	20020729~0806	50	アーバンライフ株式会社による建設工事
	中央区石町2	27128	34°41'03"	135°31'43"	20010409~0427	164	株式会社日経プレステージによる建設工事
	中央区和泉町1	27128	—	—	20020423~0706	530	大阪市教育委員会による建設工事
	中央区東高麗橋	27128	—	—	20020617~0627	39	大池建設株式会社による建設工事
	中央区上本町西2	27128	—	—	20030303~0310	25	日本パナシー株式会社による建設工事
大坂城跡	中央区本町2	27128	34°40'55"	135°30'30"	20020705~0801	134	三平リース株式会社による建設工事
	中央区瓦町1	27128	—	—	20020917~1118	300	船場瓦町建設工事
中之島6丁目	北区中之島6	27127	34°41'05"	135°29'15"	20020801~1003	298	味の素株式会社による建設工事
所在遺跡	遺跡番号	—	34°42'55"	135°33'40"	20020301~0419	250	大阪市交通局による建設工事
森小路遺跡	東淀川区境光3	27114	34°44'50"	135°32'45"	20011022~1101	50	大阪市交通局による建設工事
三交寺跡伝承地	東淀川区大津2・境光3	27114	—	—	20020415~0524	355	学校法人大阪経済大学による建設工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		
山之内遺跡	集落	古墳	竪穴住居1棟		土師器・須恵器		
阿倍野紡南遺跡	集落	古墳	小穴・溝		土師器		
舟入町遺跡	集落	鎌倉・室町	井戸・土塀		土師器・瓦質土器・青磁		
細工谷遺跡	集落・社寺	平安・鎌倉	溝		土師器・須恵器・瓦器・白磁・瓦		
船出遺跡	その他	江戸	耕作土		須恵器・瓦器・陶磁器類		
豊津貝冢遺跡	その他	古代~中世	耕作土		土師器		
難波京平栄大路跡	その他	江戸	井戸・土塀		土師器・陶磁器・瓦		
難波宮跡	宮跡・城郭	奈良・室町	柱穴・溝		土師器・須恵器		
		安土桃山・江戸	溝・井戸・土塀		陶磁器類・輸入陶磁器・瓦		
大坂城跡	集落・城郭	安土桃山・江戸	石垣・竪穴・穴蔵		陶磁器類・輸入陶磁器・瓦・銅器		
		安土桃山	溝・井戸・土塀		輸入陶磁器・瓦・木製瓦流		
大坂城下町跡	集落	奈良・安土桃山・江戸	井戸・土塀・溝・礎石建物		土師器・須恵器・陶磁器類・輸入陶磁器・瓦		
中之島6丁目	蔵屋敷	江戸	石垣・基壇・礎石建物		陶磁器類・瓦		
所在遺跡			土塀・溝				
森小路遺跡	集落	奈良・古墳・室町	溝・土塀・井戸		弥生土師・土師器・須恵器・瓦質土器・石斧・石砲丁		
三交寺跡伝承地	集落	鎌倉・室町	溝		縄文土師・土師器・須恵器・瓦器・瓦質土器		

版 圖

東壁地層断面
(西から)



調査区全景
(北西から)



SB301竈
(南東から)





調査区南壁地層断面
(北西から)



第3層内遺構
検出状況(東から)



第3層内遺構
完掘状況(東から)

SK02遺物出土状況



SK30
(東から)



遺構掘削後全景
(東から)





SK01・02検出状況
(東から)



SK02掘削状況
(東から)



SK01遺物出土状況

機械掘削時の風景
(西から)



SD01検出状況
(南から)



SD01断面





SD01-a
(南から)



SD01-d
(北から)



調査区全景
(西から)



北壁断面(南西から)



東壁断面(西から)



第2遺構検出面(西から)



第2遺構検出面東部(南西から)

第1遺構検出面(西から)



SE101(東から)



調査区全景
(南から)



SP01(北から)

調査区全景(東から)



調査区東部地層堆積状況(南西から)



古代の柱穴
(西から)



近世の柱穴
(西から)



近世の遺構全景
(南から)

大坂ノ陣の焼土と石垣
(南から)



石垣全景
(北西から)



石垣裏込め
(北から)





石垣西側に設置された
石組(南から)



石垣と現代の敷地境界
(南から)



調査地北面の道路
(西から)

[右から2本目の電柱の右
手が調査地。この付近で
道路の傾斜が急になる。]

調査地遠景
(東から)



第1層上面検出状況
(北から)



第3z層基底面検出状況
(北から)





1号窯検出状況
(北東から)



2号窯検出状況
(西から)



3号窯検出状況
(西から)

4号窯検出状況
(南西から)



5号窯検出状況
(北から)



瓦積み・暗渠遺構
検出状況
(北西から)





1



2



3



4



5



6



7



8

1 : 文字瓦(第3a層)、2 : 木製瓦範(第2層)、3 ~ 5 : SD301(3 : 大型、4 : 中型、5 : 小型)、
6 : 第2層、7 : 第1層、8 : 三角埴(第1・2・3a層・SD301)

礎石と石組遺構の
検出状況(西から)



埋臺と石組遺構の
検出状況(北から)



調査終了状況
(東から)





SD301検出状況
(西から)



SD301完掘状況
(南から)



SD301遺物出土状況
(近景：南から)

徳川期遺構検出状況
(西から)



地山上面遺構検出状況
(西から)



地山上面遺構検出状況
(北から)

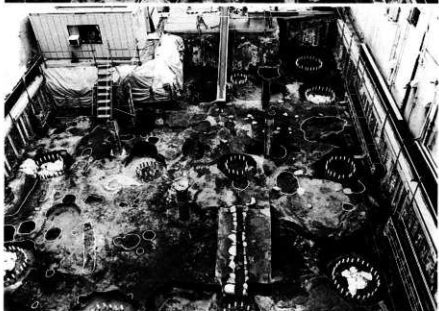




地山上面遺構検出状況
(北から)



豊臣期遺構検出状況
(北から)



徳川期遺構検出状況
(北から)

SD201東半部
(北から)



SD201西半部
(北から)



SX101東半部
(東南から)





SE301完掘状況(西から)



SK202動物骨出土状況(西から)

調査地遠景
(北東から)



南壁断面
(北から)



SX10bii01検出状況
(西から)





SW9aiii01検出状況
(北東から)



SX9ai01検出状況
(南から)



8bi層上面検出状況
(北西から)

SB8ai01の羽目板部の
検出状況
(北東から)



8ai層上面検出状況
(東から)



SX7i01-02、SA7i01
検出状況
(北から)





調査区全景
(南から)



3区弥生土器
出土状況



2区東壁断面
石廬丁出土状況

SK201遺物出土状況



SK201断面
(西から)



SK201完掘後
(北西から)





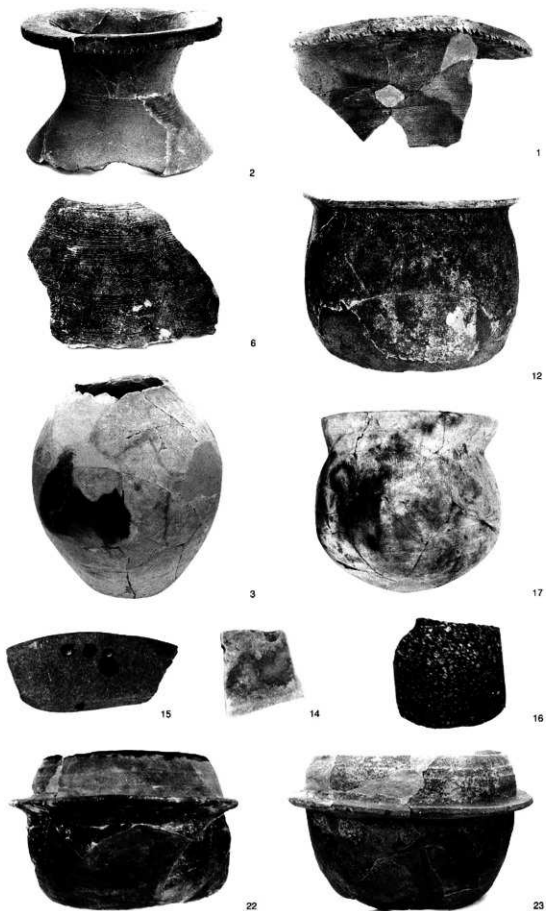
SE101遺物出土状況
(西から)



SE101井戸側検出状況
(南から)



8~10区土層堆積状況
(南西から、
NR402の肩が見える)



第2a層(3・6)、第2b層(1・2・12・14~16)、SK201(17)、SE101(22・23)

調査地全景(南から)



地層断面(東から)



第6層上面検出遺構
(北から)



SD01全景(東から)



SX01検出状況
(東から)



第4層内踏込み
検出状況(北から)

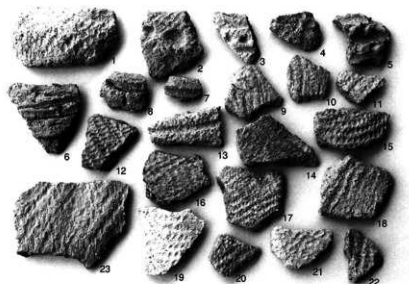




調査地全景(東から)



中世の溝SD601
(南から)



出土した縄文土器

大阪市埋蔵文化財発掘調査報告-2001・2002年度-

ISBN4-900687-72-3

2003年6月30日 発行 ©

編集・発行 財団法人 大阪市文化財協会

〒540-0006 大阪市中央区法円坂1-1-35

(TEL.06-6943-6833 FAX.06-6920-2272)

<http://www.occpa.or.jp/>

印刷・製本 株式会社 中島弘文堂印刷所

〒537-0002 大阪市東成区深江南2-6-8

Osaka City Archaeological Reports

2001-2002

**A Report of Excavations
at the**

**Yamanouchi, Abenosuji-minami, Reijjincho, Saikudani, Funade,
Namba Shell Strata, Naniwa-Capital Suzaku Street, Naniwa-Palace, Osaka Castle,
Osaka Castle-town, Nakanoshima 6-chome,
Morishoji and Presumed Location of the Sanpo-ji Temple Sites**

June 2003

Osaka City Cultural Properties Association

Osaka City Archaeological Reports

2001-2002

**A Report of Excavations
at the**

**Yamanouchi, Abenosuji-minami, Reijincho, Saikudani, Funade,
Namba Shell Strata, Naniwa-Capital Suzaku Street, Naniwa-Palace, Osaka Castle,
Osaka Castle-town, Nakanoshima 6-chome,
Morishoji and Presumed Location of the Sanpo-ji Temple Sites**

June 2003

Osaka City Cultural Properties Association

『大阪市埋蔵文化財発掘調査報告』—2001・2001年度— 正誤表

頁	行・位置	誤	正
p.15	4～5行目	井戸側・井戸側等の	井戸側等の
p.134	図6	拓本脱落のため、下図と差替え	

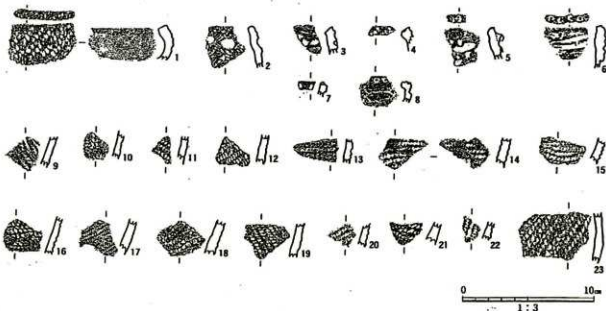


図6 出土遺物(縄文土器)

第6層(1・19)、第5層(3・14・21)、SK305(8)、第3層(4・6・7・9～11・18・20・22)、第2層(13)、第1層(2・5・16)、攪乱(12・15・17)、精査中(23)

